

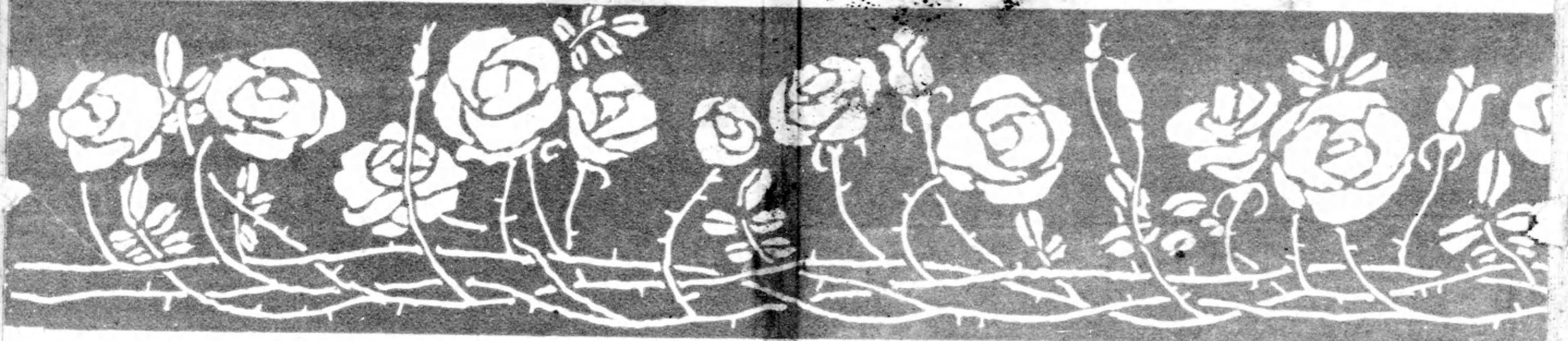
トストイ作
闇の力
全
秋庭俊彦譯



0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{19m} 70 1 2 3 4 5

始





特100
875



闇

の

力

トルストイ作

秋庭俊彦譯

東京 植竹書院發行

大正
4. 7. 28
内交

東京
植竹書院
交納

「トルストイは語り自己を多く語りし作者はあらず、一はツルゲニエエフの語なり。げにや浩漉なるトルストイの全集は、其一代の苦き経験を内容とせり。その理想その行爲に許多の矛盾を包蔵せるは人の皆認むるところなり。而も吾れ幾たびか自ら毀ち、幾たびか自ら建てし無間斷なる勇猛精進の迹に外ならず。由來詩人の性格ばかり窮めがたきものはあらず。されど念ふに、人性と獸性の相剋殺するは、トルストイが自家性格の矛盾にして、「光」と「闇」とはその眼に映じたる世態人情の二面なり。虚偽を壞り蹈襲を斷ち、一切の權威を否定し去つて、赤裸々なる自我の上に新なる性命を築き起さむとせし、その強き執着と努力とは、悲壯なる戦闘者の運命を語るものなり。世の眼識なきもの動もすればその諸神に抗する強項の態度を見て驚怖し、その教を排し、その書を貶せんとす。詎んぞ知らん大いなる反抗の底に大いなる愛惜あり、大なる否定の中に大なる肯定あることを。今や人心漸く努力に倦み輕浮に趁らんとす。此時に方り、トルストイの眞摯と、剛健と、執着と邁進とを藉り來りて、他山の石となす。亦可ならずや。教理我に合はざるあらば棄つべし。論旨我に嫌らざるは斥くべし。選擇取捨は讀む人の自由なり。

想ふにトルストイは文藝を自然の上に置けり。その文藝に對する眞摯なる態度は終始一貫せり。無私の人生觀と宗教的信仰とは、相資けて作物に獨特なる啓示的色調を賦せり。人生と、自然と、藝術と、宗教とは渾然として一也。遊戲三昧は彼の知らざる所にして、たゞ記すべからざるを記せず、偽りなき心に懇へて毫釐も假借もせず、曾て權威の爲めに詩

を贅にすることなし。曖昧たる謎語を斥けて、つれに葛藤の解決を求む。されば彼の作中の人物は概皆作家自己の権化なり、分身なり。「少年時代」のエルテニエフ、「コザツク人」のオレニン、「復活」のネクリユウドフ、「闇に輝く光」のニコライ・サリンチエフなど皆然らざるは莫し。何れも功過兼ね具へ、強項にして情熱に當める完人なるを看る可し。

八十餘年の長きその一生が靈と肉と、光と闇との一大苦闘史なりしごとく、その作中の人物は多く闇と光と、「フアウストとメフェイストとの兩型に歸す。而も其の闇と光との葛藤は常に光の勝利を以つて終る。「闇の力」の描く所は即ち教化せざる自然のまゝの衆庶なり。病みほうけたるビョトル、生れつき悍にして淫なるアニツシヤ、たくみと欲とに長けたる魔女のごとき嫗。神をおそれ、偽を蝸の如く憎むアキム、闇の爪牙に捕はれつゝも漸く開悟の光に入る伊達男のニキタ、皆とりとりに活けるが如く描き出されて、具に作者の所信を抒ぶ。世のトルストイの教を排する者、この深刻なる一篇の悲劇を薄く淺く擲み取らんはかへすくも憾なり。

文學士林君思を泰西の戯曲に潛むること久しく、その尤なる者を我文苑に移し植ゑんと志し先づ企劃する所の叢書第一巻として此雄篇を公にす。淺き小さき物のみもてはやされんとする我劇壇にかばかりのな、しき作品を得たるは吾人の私によるこぶ所。序を請はるるまゝにかくはものしつ。

森 林 太 郎

闇の力

人物

- ビートル 富裕な百姓——四十二才——再婚——病身
 アニツシヤ 其後妻——三十二才——しやれ者
 アクーリナ ビートルの先妻の娘——十六才——耳遠く少々お懶口者
 アニユートカ 後妻の娘——十才
 ニキタ ビートルの家の下男——二十五才——めかし者
 アキム ニキタの父——五十才——素樸な信心深い百姓
 ムトリヨーナ アキムの妻——五十才
 マリンカ 二十二才——孤兒
 マルタ ビートルの妹

デイミトリツチ 兵士上りの老僕
 其他マリシカのカ夫。アクリリナの新郎。警官。下士。教區長。馭者。隣の女。媒妁
 人。少女二人。客大勢。百姓大勢等。
 場所——露西亞の或る大きな村。
 時——現在。

第一幕



ヤシツニア タキニ

第一幕

ピートルの住家の廣き一室。

中央に入口。下手に窓。上手は戸口ありて奥の室に通ず。片隅に聖像を掲ぐ。煖爐。

これは上部が平らで其上に寝られるやうに出来て居る。織機。櫃。机。椅子。腰掛數脚。

ピートルは腰掛に腰を下して馬具を繕ひ居る。アニツシヤとアクリリナは紡ぎ乍ら小歌を合唱して居る。

ピートル (しばらくして、窗を覗き乍ら) 馬の奴等又もう出かけちまいやがつた。愚圖愚圖してゐると又仔馬の奴が蹴殺されるぜ。

ピートル (大聲に) ニキタ。おいこら、ニキタ。(耳をすまして) あの野郎は聾だ。(女共の方へ向いて) 止める。何を云つても聞こえれちやれえか。

ニキタの聲 (庭の端から) 何か用ですか。

ピートル 馬を追ひ込むんだ。

ニキタ 今直に入れやすで。少し待つとくんない。

ピートル (頭を振り乍ら又腰を下して) どうも婢僕なんて者あ仕様のれえもんだ。此俺が壯健でさへありや、死ぬ迄こんな者あ使ひたくれえもんだが。あんな者を置いちや唯苦勞をするばかりだ。(立て見ては又坐り) こら、ニキタ——どうた、咽が裂ける程呼んでも返事をしやがられえ。ちや、お前達のうち誰でも一人行つて見て呉れ。アクリリナ、お前が行つて馬を入れて来い。

アクリリナ 馬を入れるの。

ピートル きまつてるぢやれえか。

アクリリナ はい只今。(出てゆく)

ピートル あの野郎こそ本當のやくざ者と云ふもんだ。家の爲めに何にもなりやしれえ。

アニツシヤ (嘲りの語調で) さう云ふ貴方は尻が重い方ぢやありませんわねえ。煖爐から離れたかと思ふと直にベンチへお尻を据ゑ付けて、其癖、人の事は何のかのと世話の焼きづめでさ。

ピートル 手前達を相手にや餘つ程厳しくやらねえと、一年もすると家が滅茶々々になつちまふ。どうも窮つた奴等だ。

アニツシヤ だつて一度に十個も用事を吩咐けて置いて、直に仕て仕舞はないともうがみがみ騒ぎ立てる。お尻を炙り乍ら用事ばかり吩咐けるなら、誰だつて出来ますな。

ピートル (溜息を吐いて) 嗚呼、俺がこんな病身でさへなかつたら、一日だつてあんな奴等を家に置くんぢやれいんだが。

アクリリナ (庭の方から) はい、しッ、しッ。

馬の斯く聲、走る音が聞える。庭の門の締まる音。

ピートル 其癖あの野郎は無駄口ばかりは人一倍に叩きやがる。いやどうもあんな奴は備つておくもんぢやれえて。

アニツシヤ (嘲り乍ら口真似をして) あんな奴は備つておくもんぢやれえ。(調子を變へて) 一體貴方は自分で先づ動いて、それから口を利かなけりや駄目ですよ。

アクリリナ (入り来り) サア入れて来ましたよ。あゝ随分骨が折れた。

ピートル 一體ニキタの奴はどこに隠れて居やがるんだ。

アクリリナ ニキタ? 今街に居てよ。

ピートル 何の爲めに街になんか居やがるんだ。

アクリリナ 何の爲めだか知らないが、角の處で何か饒舌つてゐたわ。

ピートル こんな奴と話したつて何の役に立つもんか。一體何人だ無駄口の相手は。

アクリリナ (碌に耳に入らず) え、何?

ピートル (手を振つて相手にしない)

アクリリナ (坐つて糸を紡ぐ)

娘アニユートカ入り来る。

アニユートカ (母に駈け寄つて) ニキタの父やと母やが来てよ。

アニツシヤ 嘘ぢやないか。

アニユートカ 嘘ぢやない、本當よ。地獄へおとされてもいゝわ。(笑ふ) 妾がね、ニキタに會つたらね、ニキタが言つたよ、「アンナ嬢つちやん御機嫌よう、もうお別れですから

又私の婚禮の晩に入らしやついれ」つて、さう云つて笑つて居たよ。

アニツシヤ (ピートルに) 貴方が案じる程ぢやないんですよ。御覽なさい、彼の方から出て行きますわ。「俺は此奴を逐ひ出してやらう」も有るものか。

ピートル 行くなら勝手に出て行きやがれ。あんな者ならそこらに腐るほどあるわ。

アニツシヤ だつて彼に前貸しにしてあるお金はどうするんです。

アクーリナ (戸口の處で話を立ち聴きし。急に出てゆく)

ピートル (不機嫌に) あの金は夏になつたら屹度埋め合せをさせるのさ。

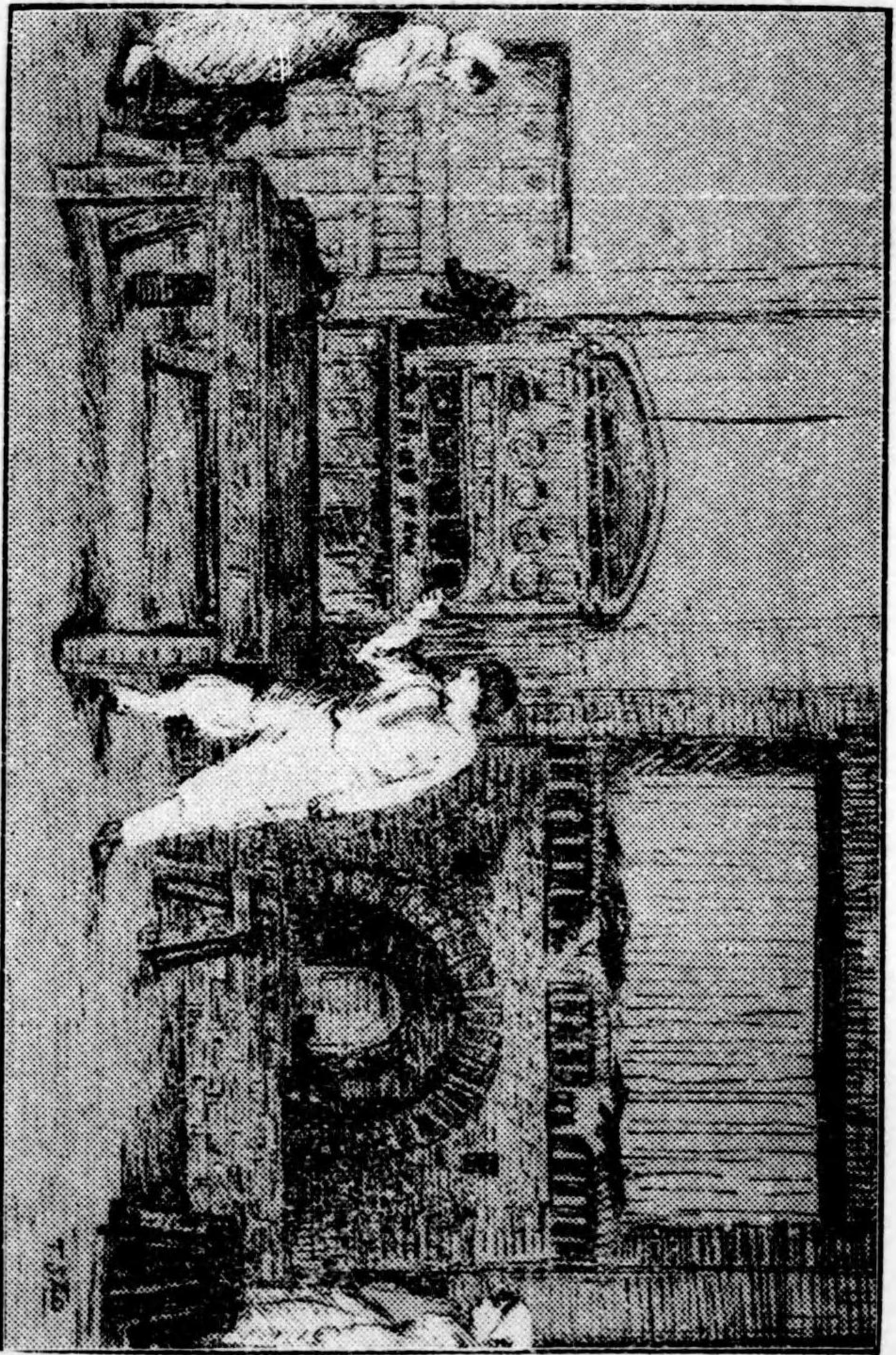
アニツシヤ さあ彼が居なくなつたら、もう彼に喰はせておく要はなし、貴方は嘸御本望でせうよ。其代り妾はこれから冬中一人で馬のやうに稼ぐんですれえ。娘は仕事が嫌ひで

亭主は煖爐の番人と來てゐる。本當に貴方は偉いお方ですよ。

ピートル まだ彼が何と言ふか分りもしれえことを、何でさうべちやくちや吐かすんだ。

アニツシヤ だつて庭中家畜で一杯ぢやありませんか。貴方は牛はまだ一疋も賣らない上に、羊も冬中置くつもりなんですか。生物には水も給らなきやならない、秣もやらなき

幕 一 第



やならない、それなのに男を逐ひ出すなんて、まあどう云ふ量見だか分りやしない。もう妾には手荒い仕事は出来ませんから。もう何がどうならうと、妾も貴方のやうに燠爐の根附けになりますから、もうどうでも御勝手になさいまし。

ピートル (アクリリナに) お前は行つて秣をやつて來な。もう給つてい、時だ。

アクリリナ 秣ですつて。はい／＼。(長衫を着て繩を締める)

アニツシヤ 貴方のやうな者の爲めに仕事をするなんて眞平御免ですよ。自分でおやんなさい。

ピートル もう、澤山だ、大抵で止さんか！ お前は丸で癡狂だ。眩暈憑の羊のやうだ。

アニツシヤ さう云ふ貴方こそ癡狂犬ですよ。懶惰で、見るも嫌だ。人を虐めるばツかし能にして居やがる、筆爺め。

ピートル (唾を吐き) ベッ！ (外套を着て) 仕方のねえ奴だ。どうしても俺が自分で行つて見なけりや駄目だ。(出てゆく)

アニツシヤ (あとから喚びかけて) 獅子の鼻の懶惰爺め！

アクリリナ まあ何でそんなにお父さんの悪口を云ふんです。

アニツシヤ 要らぬお世話だ、鈍ちき、黙つてお出で。

アクリリナ (戸口の方へ行つて) 何でそんなにぶん／＼憤るか、ちやんと知つておますよ。貴方こそ鈍ちきだわ。だれが貴方なんか怖いもんか。畜生！

アニツシヤ 何だつて。(飛び上つてアクリリナを擲る物を探しながら) 覚えてやがれ。さあ用心しないと……斯うだぞ。

アクリリナ (戸を開けて) 畜生！ 鬼婆。本當にさうだわ。鬼婆、畜生！(駈けて行く)
あとにアニツシヤ獨り。

アニツシヤ (考へ込んで) 婚禮に來いと云つてたつて？ 一體どうしやうつてんだらう。誰と夫婦にならうつてんだらう。ニキタ、覚えておいでお前の方がさう云ふ量見と極まればもう……けれど、彼と別れちや活き甲斐がないわ。嫌々、どうしても別れるもんか。

下男ニキタ入り來る。

ニキタ (あたりを見廻し、アニシヤの只獨り居るのを見て急ぎ駆け寄り、小聲で) 大變な事になつちまつた。家から親爺が來やがつて俺を連れて行かうつてんだ。さあ嫁を取つてくれるから家へ行け、これからずつと家に居るんだ、と斯う云ふです。

アニシヤ ぢや、婚禮したら宜いぢやないか。それが妾にどうしたつて云ふの。

ニキタ そんな事を本氣で云ふんぞすかえ。俺はこれでもどうしたら旨く型がつくかと思案に餘つてやつて來たのに、「それぢや婚禮したらいゝぢやないか」なんて、一體その氣が知れやしねえや。(目を働かせて) それとも貴女はもう何も忘れて仕舞はしたのかね。(女を撫でる)

アニシヤ (つきのけて) 早く婚禮したらいゝぢやないか。それが何よりだよ。

ニキタ 何でそんなに拗るのかね。手もつけられやしねえ。何を一體氣にかけてゐるんかね。

アニシヤ 何でもいゝ、もうお前は妾を棄てやうつてんだらう。お前がどうしても其の氣なら、妾だつてお前のやうな者に未練はないから。よつく覺えておき。

ニキタ まあさう憤らんでもいい。全體俺が貴女を忘れられると思ひなさるか。途方もねえことだ。どうして貴女と手を切つて仕舞はれるものか。實は俺の腹では、假令婚禮をする事になつても、どうしても貴女の處へ歸つて來やう、と斯ういふ積りてゐるんだ。只親父や阿母が家へ引つ張り附けやうとするので困るんだ。

アニシヤ だつてお前が婚禮したら、妾や餘計者ぢやないか。

ニキタ 處がね。處がどうも、親父の言ひ出した事にや背けれいんだ。

アニシヤ 何でもお前はさう親父に塗りつけて仕舞ふけれども、悉皆お前の量見だよ。

其マリンカとか云ふ女と乳繰り合つてゐるのも、昨日や今日の話ぢやないんだ。今のやうなことを云ふのも、皆その女の入れ智慧に極まつてゐるさ。それでなくつて、此間も彼女がこんな處へ來やう筈がないぢやないか。

ニキタ え、マリンカ? 如何にも俺があんな女に惚れてるやうに。俺だつて女早魅ぢやあるまいし。

アニシヤ それぢや何故親父が來たんだ。お前が喚び寄せたんだらう。何のかんのつて

妾を瞞すんだ、さうだ〜！（泣く）

ニキタ まあ貴女にも呆れちまふな。それぢや神様だつて信用出来やしねえ。そんな事あ夢にだつて思ひ付きやしねえ。俺は一切知られえ〜とて、悉皆親父の所思なんですよ。アニツシヤ それがお前の知らない事だつたら、何で驢馬のやうに迂路ついで来る用があるんだね。

ニキタ 何でも俺は親父の氣には逆らへれえんで、併し婚禮しやうなんて氣は俺に毫ほども無えんでがすよ。

アニツシヤ そんなに嫌だつたら斷ればいいぢやないか。一言で済むことを。

ニキタ 處が、前にも其手をやつた人間があつたが、とう〜裁判騒ぎまでやりましたぜ。俺はさう云ふ事あ大嫌ひでね。第一外聞が悪うがさあ。

アニツシヤ 冗談も大抵におし。いゝかれニキタ。お前がどうしてもマリンカと一緒にゐるんなら、妾はもうどうつて仕様が無いんだから、一層妾は死んぢまはう。もう散々穢された體だし、掟も破つてゐるんだから、外に遁路つてありやしない。だからお前が居

なくなれば、直様妾はもう行つて了ふから。

ニキタ 何で俺が行くもんですか。行くつもりなら夙に行つてまさあ。此間もイヴン・セミヨ〜ニツチから馭者になれて勸められて、餘つ程好い口らしかつたけれど、俺あ斷つて行きやしれいんだ。これと云ふのもまだ外に遣り口があると思へばこそその事ですよ、尤もお前さんが俺をいやだといふ事だつたら、そりや又別な話ですがね。

アニツシヤ さう。どうかその心でおくれよ。家の耄爺はもう今日にも明日にも知れないんだから。あれさへ居なくなれば二人の罪は知れやうないんだし、お前は世間晴れて立派に此家の主人ぢやないか。

ニキタ そんなにクヨ〜取越し苦勞は詰られえ。何でも俺は自分の爲めだと思つて稼ぎますよ。苦勞しますよ。何有、旦那にも可愛がられりや、お神さんにも可愛がられるに極つてまさあ。女衆の方から惚れて来るのは、こりやどうにも仕やうがねえ〜と云へばそりぎりでき。

アニツシヤ ぢやお前は矢つ張り、妾をまだ思つて呉れるんだわれ。

ニキタ (女を抱き締めて) エ、何を仰しやるんです。此の思ひ詰めてる心が分りませんか。

ニキタの母マトリヨーナ登場。聖像の前で暫く禮拜す。ニキタとアニツシヤは腕を解く。マトリヨーナ (獨白) なあに、何も見ないこと、何も聞かないことにして置ませう。彼が唯一寸蝶々とせり合つた丈だもの、何のことは無い。謂は、犢どもの痴話つてる様なものだ。若い同士にや有りがちな事で、何も乳繰り合つて悪いと云ふ筈は無いらんだ。しかし忤や、旦那様が庭前でお前を喚んでいらつしやるが。

ニキタ 今一寸斧をこゝへ取りに来たんだよ。

マトリヨーナ おう、さうとも。お前はいい斧を取りに来たんだ。ね、いつも女子の側にあるんだねえ。

ニキタ (こゝんで斧を取つて) ねお母さん。お母さんは俺に嫁を取れなんて、本氣で言つてるのね、どうだ。全然役たいもねえことだ。第一俺や一寸も氣が進まれえんだ。

マトリヨーナ 無論さお前。何の爲めに嫁など押し付けるものか。皆あの親爺が言ひ出し

た事だよ。お前は何も心配せずとあつちへ行つておいて。その事は私等だけで旨く話をつけるから。

ニキタ どうも變だ、本當に變だ。婚禮しろ〜と言ふかと思ふと、今度はそんな事なしなくもいゝつて云ふ。何が何やら、さつぱり分られえや。(入る)

アニツシヤ 一體どしたつての、お婆さん。本當にニキタに嫁を娶つてやらうつての。

マトリヨーナ 何のまあ貴女。だつて婚禮は出来ませんわ。第一御存知の通りの身上で御座いますから。嫁を娶るの何のと云ふのは皆あの老爺の出まかせで、いゝ加減な出放題ですよ。たとへば馬にしているから、槽に麥のあるうちは動きませんからねえ。何だつて其の通りでせう。(意味ありげにアニツシヤを見て) 妾が何も知るまいと思つておなすても……

アニツシヤ あいお婆さん。お前さんはもう何も悉皆感付いてることだし、何もお前さんに匿しだてするには當らないから、云ひますがね。實はね、妾や、ほんとに濟まないことをしてつたの。お前とこの彼とね、妙な仲になつちまつてね——

マトリヨーナ これは珍しいことをお初に承りました。此婆は何も感付きませんでしたか。ほい。ねえ貴女。この婆も甘い酸い位は、少しは知つた人間でムいます。何も悉皆知つてゐますつてことよ。草が伸びるのも見通す眼力を持つてゐますよ。又若い御新造には時には魔薬も入用だと云ふことも、それも存じて居りますよ。實は今日もこゝへ少し持つて参りました。(包を解いて、紙に包んだ粉薬を出す) 不要な物のことは存じませんけれど、入用な物となればこれでも心得て居りますよ。これがさうです。この婆だつて、驚鳴かされたこともありすからねえ。女と云ふものは、時に依つちや老耄れたやくざ男と一緒に居なけりやならないこともありすさ、ねえ貴女。妾だつてこれで秘奥術は七十七位は心得て居ますよ。お家の旦那はあゝ病身で干上つて仕舞つては、もう長持ちは御座いませぬ。肉又で衝いたつて血が出さうもないぢやありませんか。覺えてらつしやい、來春迄には旦那も型がつかますから。さうすれば是非とも誰かを後釜に入れたけりやならないでせう。それには家の忤なんどは、持つて來いだらうと思ひます。彼だつて人並に羨けて御座いますから。妾だつて何を好き好んで忤の出世の邪魔をし

ませうに。何も我子の仇敵ぢやありませんからねえ。

アニツシヤ そりやね、あの人さへ見棄て、呉れなければ……

マトリヨーナ 何のまあ、お見棄て申すの何のつて、貴女。そんな勿體ないことがあるもんですか。唯我家のあの老爺に困るんですよ。御存知の通り、もう大抵耄碌してゐる癖に、一度何か思ひ込んだが最期、もう楔で打ち込んだ様に凝つて仕舞ひましてねえ。

アニツシヤ 一體何だつてそんな婚禮しろなんて云ひ出したの。

マトリヨーナ はい、それでムいます。御存知の通り、忤めはどうも女には目の無い方でムいましてね。最も彼も男振りも少し何ですから、そりや無理も無いんですけれど。それは兎に角、前に雇はれてゐた處で出来合つた話ですよ。そこに同じ料理人をしてゐた孤兒の娘が、何でも彼を引つ懸けにかゝつたんですよ。

アニツシヤ マリンカつてね。

マトリヨーナ えい、その女です、忌々しい阿魔つちよでムいますよ。どれ丈けのことが其間に有つたか無かつたか知れませんが、兎に角いつの間にか親爺の耳へ這入つたんで

す。餘所から聞いたものでせうか、それとも女は中々喰へない奴ですから、自分で話し込んだのか知れませんが。

アニツシヤ なんて鐵面皮しいものだろ。淫賣のやうな奴に限つてねえ。
マトリヨ一ナ 處がうちの親爺は頑張るんです。「是非その女と一緒になれ、ならねけりや罪が消えないから」と、斯う云ふんです。疾く悴を呼び寄せて婚禮させなけりやならないと騒ぎ立てるんです。妾が何と云つたつてどうしても聴かないんですよ。そこで妾も考へました。こりやどうにか方向を變へてやらうと思ひました。ねえ、貴方、あんな鈍馬を丸め込むのは造作ありませんよ、初めは同意のやうに見せかけておいて、愈々といふ羽目になつて、此方の思ふ壺へ箝めるんですよ。何をいつても女には男の氣の附かない七十七手の術がありますからね。そこで親爺に言ひました。「お前さんの云ふのが眞當だから、兎に角もつと考へた上にしませう。それには二人で先づビートル・イグナーチツチュ旦那の處へ行つて熱く相談した上で、旦那の意見も聞いてからのことにしませう」と斯う云つて今日はまあ上つたやうな譯でムいます。

アニツシヤ まあさう。そんな譯だつたの。だつて親爺さんが達つて婚禮しろつて命令ければあの人だつて……。

マトリヨ一ナ なに、命令けますつて？ そんな命令なんか構ひませんよ。そんな御心配には及びませんよ。妾はこれから直にこゝの旦那にお目にかゝつて、どうか話のつく迄は引きませんから。まあ考へても御覽なさい。悴は今のまゝでこんな幸福はないんです。またこの上にどの位の幸福が待つてゐるか知れないぢやありませんか。何を苦んでそんな淫奔女を女房に持たせませうに。大丈夫ですよ。妾をそんな間拔婆やと思つて下さるんですか。

アニツシヤ だつてあの女はこゝまでニキタの跡を跟けて來たんだよ。ねえ婆さん、ニキタが婚禮するんだつて聞いた時には、妾も此胸へ刃物を當てられたやうな氣がしたんだよ。今でもまだあの女のことを忘れずに想つてるんぢやないかしら。

マトリヨ一ナ まあ貴女。何で悴がそんなお人よしてムいませうに。あんな穢らしい宿無し女を可愛がるなんて筈が無いぢやありませんか。我家の彼も中々解りのいい子です

よ。惚れて爲になる女か女でないか位は、よく見別けが付きますから。まあ貴女、此婆やを信用して下さいまし。この目の球の黒いうちは、彼を横取りして行つてあんな女にくつけるやうなことは決してしません。それともお金の少しでも戴かしてやつて御覽なさい、死ぬまでお側を離れる様なことはない奴です。

アニツシヤ だつてニキタが行つて了つたら、妾はもう生きてゐられやしないもの。

マトリヨ一ナ そりやお察し申しますよ。貴女のやうな瑞々しいお若い方が、あんなぼんぼれ靴見たやうな病人と連れ添つてゐるのは、並大抵のことぢやありませんわ。

アニツシヤ 全くよ、れえお婆さん。あんなひよつと、親爺は、もう見たばかりで慄々して了ふ。

マトリヨ一ナ さうでせう。大抵ぢやありませんわ。ですから、これ御覽なさい。(あたり)に氣を配つて囁く)妾が或る年寄の處へ行つて薬のことを訊いて見たら、此二種を呉れてよこしました。まあ御覽なさいまし。こちらが麻睡劑で、これを尠し服ませれば、もうぐつすり睡込んで仕舞つて、其側で躍らうが跳れやうが平氣ですつて。こちらがそれ

内服で、味も香も無い癖に、其利くことつたら無いんですつて。一服づゝ七度にやれば、もう忽ち型が付きますつてさ。

アニツシヤ えいまあ！ そんなもの？

マトリヨ一ナ えい。第一後へ一寸も證據が残らないんですつて。廉くは售れないつて云つたんですが、特別に一留で譲つて貰つて來ました。斯う云ふ物を手に入れるには餘つ程機轉が要りますよ。妾は自分のお金で拂つて來ましたがね、もし貴女が御用でないと思しやれば、仕方ない外へ廻さうと思つてゐるんです。

アニツシヤ だつて悪いことになりはしないだらうか。

マトリヨ一ナ なあに貴女、悪いことになんかなるもんですか。旦那が丈夫な體なら話はないんですが、あの工合ぢや疾く片附けるに限りますよ。世間にや随分有ることですわ。ええ。

アニツシヤ あいどうしたらいいだらう。妾のやうな意久地なしにや、氣味が悪くて仕様がなないわ。れえお婆さん、本當に罪ぢやないだらうか、どうだらう。

マトリヨーナ　ぢやこの薬は返して参りませうね。

アニツシヤ　一體どうするんだつたね？　矢つ張り水で溶くんだらうか。

マトリヨーナ　いえお茶へ清めた方がいさうで御座います。香も何も無いから、一寸も氣附かないつて云ひますよ。その親爺は中々察しのいい親爺でしてね。

アニツシヤ　(薬を取つて)あゝ妾ももうどうしたらいいんだらう。どうしてこんな大それたことをするやうになつたんだらう。今の様な地獄の苦しみさへなかつたら……

マトリヨーナ　それから例のお金をお忘れにならないやうに何卒。その親爺にも歸途に渡すやうに約束しておきました。あの親爺だつて慘憺なんですよ。

アニツシヤ　いゝよ、大丈夫だよ。(手匣の處へ行つて薬をかくす)

マトリヨーナ　ねえ内儀さん、呉々も祕密でムいますよ。他に覺られないやうにね、もし覺られてもしたら、それこそ貴女……(語を切つて金を收める)

ピートルとアキムと登場。アキムは聖豫の前で禮拜す。

ピートル　(腰をかけて)アキム阿爺、其後はどうだね。

アキム　はい、お蔭さまで。唯困つたことには、忤めがとんだ亂次を惹起こしまして。

はい。どうもその、手前の考では、もし旦那様が……

ピートル　あゝ宜しく。まあお掛け。ゆつくり話をせう。

アキム　(坐る)

ピートル　一體どうしたつての。何でさうニキタの婚禮を急ぐんだね。

マトリヨーナ　何の旦那様、婚禮なんか少しも急ぐにや及ばないんでムいますよ。御存知の通り我家の活計の窮りかたと申したら、一通りや二通りぢやないんで御座います。手前達が食ふや食はずの態で居乍ら、どうして忤に嫁娶りどころぢやムいません、婚禮などはてんで思ひも及びませんよ。

ピートル　そりやお前達自身の方が一番解つて居やうがな……

マトリヨーナ　何もさう婚禮を急ぐ要はないんで御座います。中々これも一と仕事なんてすから。

ピートル　さあ。俺の考ぢや、婚禮は何時だつて悪くはないて。

アキム はい、眞實でムいますよ。實はその——手前も市で仕事にありつきましてね、それが大變香ばしい仕事なのでムいますから……

マトリヨーナ 何だつてまあ。ほんに結構な御職業ですよ。溝浚ですからねえ。二三日前にも家の前へ見えると妾やムカ／＼つて嘔吐ずにやゐられなかつたよ。オーいやだ。

アキム そりや無理もない。初めは誰にだつて好いものぢやない。けれどそりや臭氣だけのことだ。馴れてさへ仕舞へばまあ酒滓ぐらゐな物で、つまり似たり寄つたりの物だ、あの臭氣にしているからが、我々風情にや然う八ヶ釜しく云ふ程のことでもない。着物でも着換へりや濟むことだ。俺やまあどうかして悴を内に置きたいもんだと思つてるんだ。つまり彼は内に居て整理をつける、俺は市へ仕事に出るやうにするんだ。

ピートル そりや悴を内へ入れるのも無論宜からう。けれど前貸しにして置いた給料は、ありやどうすりやいいんだね。

アキム そりやもう旦那様御尤でムいます。私も彼には申し聞けておきました。御奉公申すからには體は先様の物で御座いますから、彼だつて交替期までは此方様にお勤め申

さにやなりませねど、そこがそれ、どうも……婚禮とか云ふのですから……暫くお暇を頂戴出来ないものでムいませうか、如何なものでムいませう。

ピートル いゝとも、そりや差支ない。

マトリヨーナ いえ、私どもはこれに就いては意見が異つてゐるのでムいます。申しピートルの旦那様、妾は神様に申上げる通りに……で心底を打明けて申上げますから、其上で私と此老爺とどちらが理で、どちらが非かどうぞ御判断下さいませ。此老爺は悴奴に達つて嫁を娶つてやると極め込んで居りますが、一體何人を娶るのか訊いて御覽じませ、これが並普通な嫁でムいましたら、妾も自分の子のことでも、何て否應は申しませう。が何を云ふにもあゝ云ふ疵物の人間ですから……

アキム お前はあの娘を直に惡物にするが、どうも怪しからん、實に怪しからん。あの娘は汚名を着せられた、それも誰の爲めだ、皆俺が悴の爲めぢやないか、つまりその……

ピートル ぢや一體どうして汚名など着せられたんだ。

アキム どうもそのニキタ奴が不埒からでムいます。

マトリヨーナ まあお待ちよ、妾がお話しするから。妾の方が言ひ廻しは上手だよ。ねえ旦那様、實は我家の忤の奴が、御存知の通り、一頃料理番にくすぶつてゐたことがういます。すると同じ處に奉公してゐたマリシカとか云ふ娘が、丸でおぼこの癖に忤に首つ丈になつて持ちかけたんでういます、そして今ちや其娘の方で、忤に瞞された、ニキタに瞞されたと、剛情張つてゐるのでういます。

ピートル そりや不届だな。

マトリヨーナ 處がその娘と云ふ奴のだらし無き加減と來たら、もう當り放題の男を引つ懸け廻して歩いてるんですよ、丸で賣女ですもの。

アキム 又ベラノ、碌でもない、いゝ加減なことを喋り立てるか。チエチエ、困つた老婆だ。

マトリヨーナ 又チエチエチエ——こりやこの老爺の口癖なんです。自分でも何の事が知りやしない。ねえ旦那様、どうか其娘のことは何人にお訊き下さつても同じ事でういます。實際宿無しのうるつき者です。

ピートル (アキムに) どうだねアキム爺、實際さうとすれば婚禮などは無駄な事だぜ。一

旦那として入れた土には、まさか靴ぢやあるまいし、具合が悪いつてさう無闇に脱ぎ捨てる譯にや行くまいし。

アキム (嚇として) 嘘をつくな老婆め。手前が云ふことは……チエチエ……皆嘘だ。あんなに出來の善い娘がどこにある。俺や可哀さうでならんわ。あの氣の毒な娘が可哀さうでならんわ。

マトリヨーナ フン、あの娘が可哀さうだつて。忤は可哀さうぢやないのか。ぢやあの娘を自分の頸つ玉へ括りつけて、一緒にどこへ行くが、いや。まあそんな謔言あ切り上げて貰ひてえもんだ。

アキム 何でこれが謔言だ。

マトリヨーナ 黙つておいてつたら。横口を出さずに聽いておいでよ。

アキム (遮つて) いや聽かない。何で俺の言ふことが謔言だ。手前は何でも自分の都合のいゝ様に勝手に牽強けて仕舞ひやがる。だがな、神様には無理は利かんぞ、覺えて居

れ。

マトリヨーナ　こんな老爺の對手になつちや舌が腐つて了ふ。

アキム　あんな働き手の娘がどこにある。それに又……チエチエ……俺がやうな貧乏世帯では……チエチエ……婚禮つたつて何程要るものか。何が何でもあの娘が受けた無實の罪には換へられんわ。それに……チエ……あの娘は孤兒だ。可哀さうにあられもないことを云はれてゐるんだ。

マトリヨーナ　これが此老爺のきまり文句だ。

アニツシヤ　まあアキム爺や。女衆の云ふことを聞いた方がいゝよ。女の道は女が精いらね。

アキム　まあ何と云ふことを仰しやる。あの娘だつて人間ぢやムいせんか。彼女だつて……チエ……矢つ張り神様のお手で出来た物でなくてどう致しませう、それとも……マトリヨーナ　また極り文句を繰返してゐる。

ピートル　ねえアキム爺。處が女子と云ふものはさう一途に心は許せないもんだよ。屹度

若い者がそこらにゐるだらう。本當かどうか彼に訊かなきゃ駄目だ。彼なら屹度本當のことを云ふだらう。おい、若い者を喚んでくれ。(アニツシヤ立上る) 親爺が用があるから茲へ來いつて。

アニツシヤ　(出てゆく)

マトリヨーナ　(ピートルに) 本當に旦那の仰しやる通りでムいますよ。もう解りきつた事なんです。本人から聴くが何よりですよ。現時貴方、無理づくで嫁を娶らせる法はありまんからね。何れ當人の意見だつて聴いて見なけりやならないんです。けれど彼だつて、あんな女と一緒になつて、恥を曝すやうなことは請合つてありませんよ。妾の考では、こちらの旦那の處で奉公を續けてゆくのが、何よりなんです。夏中我家へ連れ戻しとくなんて、本當に無駄なことですよ。まあ此方に置いて戴くことにしまして、どうぞ十留だけ今頂戴致したうムいます。

ピートル　まあ順序をたて、相談をきめやうぢやないか。一つ済ましといてそれから次へかいらなけりやいかんよ。

アキム 旦那様、申し上げます。一體何事も行爲は眞當にして行かなければなりません。唯我身に一番都合の好いやうに引き直して、神様を忘れては濟みませぬ。たとひ斯うした方が宜からうと思召しても、まあ考へても御覽じませ、彼も一旦出来合つた女で見れば……まあどの道を取るにしても、神意に背いた事は必ず因果が報いて來ますからなれ。

ピートル それは確にさうだ。神様は忘れちや濟まない。

アキム そこでムいます。誰にせよ掟に遵ひ神意に稱つて道を踏んで行きますると、洵に愉快で心に不足がございませぬ。彼に婚禮させると決めましたのも其理由で、つまり彼を墮してはならない、彼は掟通りに家に置いて、此老爺は……チエ……チエ……たとひ面白くない仕事でも、市へ出て精を出してやると、斯う致したいのでございませぬ。なに構ひませぬ、神様に對しちやその方が宜しい。對手の女は孤兒でございませぬ。去年の夏やらには町の商人が材木をちよふまかされたこともありませぬ、商人はちよふまかしても神様はさうは參りませぬ……チエチエ……

ニキタとアニュートカ登場。

ニキタ (ピートル)に何の御用ですか。(坐つて煙草を取り出す)

ピートル (物靜かに叱る口調で)こら、物の解らん奴だ。親父様が相談があると云ふぢやないか。それにお前はでツちり坐り込んで、煙草など喫いつけてる。立つてこちらへ來い!

ニキタ (卓子へ向つて坐り肘を突いてニタ／＼笑つてゐる)

アキム ニキタ、お前の事で苦情が持ち上つたんだぞ。さうよ、苦情がさ……

ニキタ 苦情が? 誰から?

アキム 誰からつて知れたことだ、孤兒のあの娘からさ。あのマリンカから起つたんだよ。

ニキタ (笑ひ乍ら)をかしたこともあるもんだ。一體何だれ苦情つてのは。誰から聞いたんだれ。あいつが自分で持ち込んだのかれ。

アキム まあおれが訊くから眞正に答をしろ。一體お前はあの娘と關係したのか。

ニキタ 一寸も解りやしれえ、皆何を云つてるんだれ。

アキム お前はあの娘と莫迦な事をしたんぢやないか、チエチエ……莫迦な悪戯を。
 ニキタ 別に何もした譯ぢやありませんよ。そりや退屈まぎれに諧戯を云つたこともあ
 るし、こちらで手風琴を演げば彼女が踊つたこともあつたさ。何もそれが馬鹿な悪戯つ
 て法もあるまい。

ピートル ニキタ。さうしらばつくれずに、親父様の訊く事にちやんと返辭をしるよ。

アキム (眞面目に)ニキタ。人間の眼は掠めても神様のお眼はさうは行かんぞ。熱く考
 へて見る、嘘を言つてゐられる時か。對手は孤子だと見て、辱しめても構はぬと云ふ量
 見ぢやる。孤子なんと云ふものは……チエチエ……。本當の事を言はんか。

ニキタ もうこれより言ふ事ありやしれえや。もう言ふ丈の事あ言つて了つたんだも
 の。(熱心になつて)何を彼女は喋りやがつたことだ。此ニキタの事を、何のかんのと告
 口しやがつたんだな。現時その位な諧戯したつて何だもんで。あいつ何でも勝手にほざ
 きやがれ。

アキム ニキタ、確りせい。隠すより顯はるゝはなしと謂ふぢやないか。ありの儘を正

直に言つて仕舞へ。

ニキタ (獨りで)みんなて寄つて人をいぢめやがる。(アキムに)知らないことは知らない
 いつて言つたぢやないかれ。あんな女に何も干繋はつけやしななんだ。(威だけ高に)神
 様、御誓言を申します(禮拜す)。俺やもう何も身に覺えがない。(間。なほ激して)一體
 あの女を俺と一緒にするなんて、そんな途方もない事をどうして考へついたらもんだ。丸
 で人を侮辱してゐる。現時無理づくで結婚させるなんて法がどこにあるものか。もう話
 は洒然してゐる。(立上つて)今誓言した通りこれより外には何にも知らないんだから。
 マトリヨーナ (アキムに)そら云はないことですか。お前さんのやうな馬鹿正直な人間は
 嘘言でも何でも直に本氣にしてさふ。用でもないに頭へ煙を立て、子息を威してゐる。
 此子だつて今の儘で何不足ないんですもの、此儘ずつと置いて戴きたいつもりでゐるん
 ですよ。又此不景氣に十留も旦那から頂戴出來りや、こんな結構づくは無いちやありま
 せんか。

ピートル さあ、アキム爺。どうしたらいいんかれ。

アキム (舌打ちして) ニキタ、記憶て居れ、あの可哀さうな女の涙は餘所へ流れやしな
い、屹度お前の頭の上へ落ちるから。泥に踏み込まんうちに用心しておけ。

ニキタ 何を俺が用心するんだつて。御自分の方が用心なさいだ。(坐る)

アニユートカ あ、お母さんに直にニキタの云つたことを話して上げるわ。(走り去る)

マトリヨーナ (ピートルに) 旦那さま御覧じませ、此の通りでございます。此老爺は碌で
なしの口を利く癖に、何かこれと思ひ込んだが最期、中々離しません。そしていつも極
まり文句ばかり並べて居ります。寔に用でもない事で、お騒がせ申して申譯ございませ
ん。此子は今迄通り置いて戴くことに致しますから、どうぞお使い下さいまし。

ピートル どうしたもんだろ、アキム爺や。

アキム 何と申しまして……チエチエ……決して無理にと申すつもりはムいませぬ。

唯どうもその……チエチエ……。實は此老爺の考では……チエ……チエ……

マトリヨーナ お前さんの考など誰が知つて居て。此子は今迄通りにやつて行きたいんで
すよ、自分では此方を出たいなんて氣は一寸も無いんですから。一體悴を連れて行つて

どこに置かうつてんですよ、何をさせやうつてんですよ。これが居ないつたつて、ちや
んとやつてけるぢやありませんか。

ピートル アキム爺や、一つ云つときたいがね。若し夏中連れて行つて置かうと云ふなら、
冬だつてこちらに用はないよ。居るんなら一年中居ることにして貰ひたいんだ。

マトリヨーナ 一年の間だつて大丈夫お請合が出来ます。なかに夏季の仕事なら、誰をだ
つて手助に頼めますよ。ですから此子はお心おきなくお使い下さつて、どうぞ只今其の
十留の方を頂戴出来ませぬ……

ピートル ぢやどうだね、一年ときめていいんだね。

アキム (溜息して) はいどうも致し方ございません。斯うなつては……チエチ

エ……

マトリヨーナ づは一年と極まりした。丁度デメトリユースの日からでございます。給金
の方はお約束通り頂戴出来ませうね。十ルーブルの分も只今お願ひして参りせう。(立つ
て頭を下げる)

アニツシヤ、アニユートカと登場。

アニツシヤ (側の方に坐る)

ピートル さあ、愈々話が決まつたら、一寸その店へ行つて一杯やらう。アキム爺、さあシユナツアでも飲らうぢやないか。

アキム いや私はお酒は無調法でございます。はい皆目手を附けません。

ピートル あいさうか、ぢや茶でもよからう。

アキム はい、お茶ならば戴けます。お茶は結構でございます。

ピートル ぢや女衆も茶を喫んだらよからう。おいニキタ、お前忘れないで羊を入れてな、藁を集せといとくれ。

ニキタ (立上つて) 畏りました。

ニキタの外は一同退場。段々暗くなる。

ニキタ (煙草を喫いつけて) 一同で人を虐めやがる。彼女と何をしたか、すつかり吐いて了へなんて、さう一寸やさつとて出来る物語かい。親爺め口癖のやうに「彼女を娶れ」

とか云ふが、一寸手を出した女をみんな娶つたら、おれ様の嫌々が何人出来ることだ。

此方は婚禮などしたくでもれいんだ。此儘でも妻帯者よりやずつと結構なお身分だから、一同で妬きにかいつてぬやがる。だが、神様の前で誓言した時にや、誰かに突かれたやうな氣がしたぜ。それで話柄の緒はぶつり断ることは出来たが、どうも虚偽を誓言するのは罪だと云ふことだな。何有、たか、口尖の事だ。そんな莫迦なことがあるもんか。それに違ひれい。

アクリリナ、カフタンを着て登場。

アクリリナ (カフタンから繩を解いてそれを置き) 燈火ぐらぬは點けておくれよ。

ニキタ 貴女の顔が見えるやうにですかい。燈火がなくも結構よく拜めますぜ。

アクリリナ まあ大嫌ひ! (左手の室へ去る)

アニユートカ 駈ける。

アニユートカ (ニキタに囁く) ニキタ、疾くおいで、誰か喚んでるよ。

ニキタ 喚んでるつて? 誰ですかえ。

アニエートカ それ料理番のマリンカさ。その角に立つてるよ。

ニキタ 嘘云つてらあ。

アニエートカ 嘘ぢやないつたら。

ニキタ 何が用だつて。

アニエートカ お前が行くのを待つてるよ。一言でいいから是非ニキタに云ひたいことがあるんだつて。何の用かつて訊いても言はないでね、「ニキタが此家を出るのは本當か」つて聞いたよ。妾がね、「そんなことは嘘だ、爺やお嫁さんを取るんだから連れて歸らうつて云つてもニキタは聴かないでまだ一年はこゝにゐるんだ」つて、さう云つたらね、「是非とも話したいことがあるから後生だから喚んでおくれ」つて、もういいこと待つてるんだよ、疾く行つておやりよ。

ニキタ ヘツ、糞でも喰へだ。何で行くもんか。

アニエートカ もしお前が行かなけりや、自分で這入つて来るつて、そいつてたよ。

ニキタ なあに這入つて来やせんよ。も少したてば行つて了ふさ。

アニエートカ お前がアクリリナと婚禮するんぢやないかつて、そんなことも訊いたよ。

アクリリナ、紡車を持つて左手から出て来る。

アクリリナ 誰が妾と婚禮するつて。

アニエートカ ニキタよ。

ニキタ 馬鹿な、冗談にも程がある。誰がそんなことを云ふの。

ニキタ 屹度世間でさう云ふんですよ。(アクリリナを見て笑顔)ねえ嬢ッちやん、俺と婚禮しませうか。

アクリリナ お前と？ 以前だつたらしたけれど、今はもう嫌。

ニキタ どうして今は嫌ですつて。

アクリリナ 妾を可愛がらないんだもの。

ニキタ どうして。(坐る)

アクリリナ 誰か許さないんだもの。(笑ふ)

ニキタ 誰が許さないつて？

アクリリナ そら、繼母ちゃんだよ。いつでも慳食にして、其癖お前の躰ばかり跟けてるんだもの。

ニキタ (笑つて) こりやどうも、嬢ツちゃんも隅に置けれいや。

アクリリナ 此眼は節の穴ぢやないかられ。今日もあんなに父さんに毒づいて。あんな嫌な般若面たらありやしない! (左手の室に入る)

アニユートカ (窗から覗いて) ほら御覽ニキタ。本當に來たよ、そこへ來たよ。妾や行くから。(急いで去る)

マリソカ登場。

マリソカ 妾をどうして呉れるのよ。

ニキタ どうしてくれるつて? どうもしやうれえよ。

マリソカ お前さん、妾を振り捨てる氣なんですれ。

ニキタ (むつとして立上り) 一體何の用があつて這入つて來たんだ。

マリソカ まあ、ニキタ!

ニキタ をかしな奴らぢやれえか。手前何しに來たんだよ。

マリソカ ニキタ!

ニキタ ニキタは茲にぬるぢやれえか。此ニキタをどうしやうつてんだ。何の用があるんだよ。あつちへ行けと云ふのに。

マリソカ ぢや愈々妾を捨てやうつてんだね、構ふまいつてんだね。

ニキタ 手前のことなど何で知つたことかい。自分でも解らん癖に。手前が角の所に立つて、アニユートカを喚びによこした。それで俺が出て行かないんだもの、手前など用が無いつてことあ解りさうなもんだ。そんなことが解らんのか。あつちへ行つてろ。

マリソカ ぢや妾のやうな者に用がないつてんですれ。もう妾が邪魔になるんでせう。今の今迄そんなに薄情ぢやないと思ひ込んで居たのに、ぢやもう妾とは赤の他人で何の用もないと云ふんですれ。

ニキタ 何でそんな役たいもないことを並べるんだ。丸で辻褃も合つてやしれえ。その手で親父を説き込んだんだらう。さあ頼むからあつちへ行つてくれと云ふに。

マリシカ 妾には貴方より外思つてゐる人は無いつてことは解つてゐるぢやありませんか。貴方が妾と夫婦になつて下さらんか、そんなことは妾苦にしてゐやしないわ。唯妾が何も貴方に悪い濟まないことをした覚えもないのに、どうして妾を見換へやうつての。さあそれを聞きたいんですよ。

ニキタ 何だそんな馬鹿なこと。手前などと無駄口を利く用はれえんだ。あつちへこせろ。

マリシカ 妾と添ひ遂げやうと約束して置き乍らまゝと妾を出しぬいた、そんなことは妾悔しくないけれど。それよりも、どうして妾を見限つて下さつたと云ふんです。實はそれだつて諦めては居るけれど、妾の後代りに外の人を入れるなんて、それが妾悔しいの。其對手だつてちやんと妾は知つてますよ。

ニキタ (悲つて女に詰めかけ)これ、手前のやうなふて腐れと、兎や斯う言ふ用は無いんだ。譯も解らん分際で、何だ。あつちへ行けつて云つてゐるぢやないか。まだ非道い目に逢ひたいつてのや。

マリシカ 非道い目つて何です。オヤお前さん妾を擲つ氣ですれ。ぶつなら、さあ擲つて下さい。

ニキタ (顔をそむける)

マリシカ 側へ向かなくてもいいんですよ。さあニキタ!

ニキタ 用でもねえことだ。誰か來たらどうする。もう饒舌つてゐる用はれえんだ。

マリシカ それぢやもう止めます。もう何もかも濟んだことです。忘れろと云ふなら忘れもします。けれどニキタ、お前さんは妾を忘れられますか。自分の貞操を後生大事と衛つてゐた妾を、よくも穢して、よくも騙して呉れましたね。こんな孤兒を可哀さうだとも思はずに……(泣く)。さんざん人を辱めておいて、振り捨てて了ふ。けれど決して妾は恨めしいとは思ひませんよ。どうか達者で暮して下さい。今度の對手が妾より佳いなら無論妾のことなど忘れて了ふでせうが、もしさうでなかつたらお前さん屹度妾のことを思ひ出しますから。ねえニキタ、屹度妾のことを思ひ出しますから。あれほど想ひ合つた仲でももう斯うなつては仕様がなから、もう別れませう。もうこれが見取めです

よ。左様なら、御機嫌よう。(彼を抱かうとして其頭を捕へる)

ニキタ (振り放して) 手前達と利く口や持たんわ。どうしても行かんなら俺の方で行くさ。こゝに一人で居やがれ。

マリンカ (泣き立て) 畜生め。(戸口の所で) 今に罰があたるから。(泣き乍ら去る)

アクリリナ 左手から登場。

アクリリナ ニキタ、お前のやうな人情知らずは無いよ。

ニキタ なぜね。

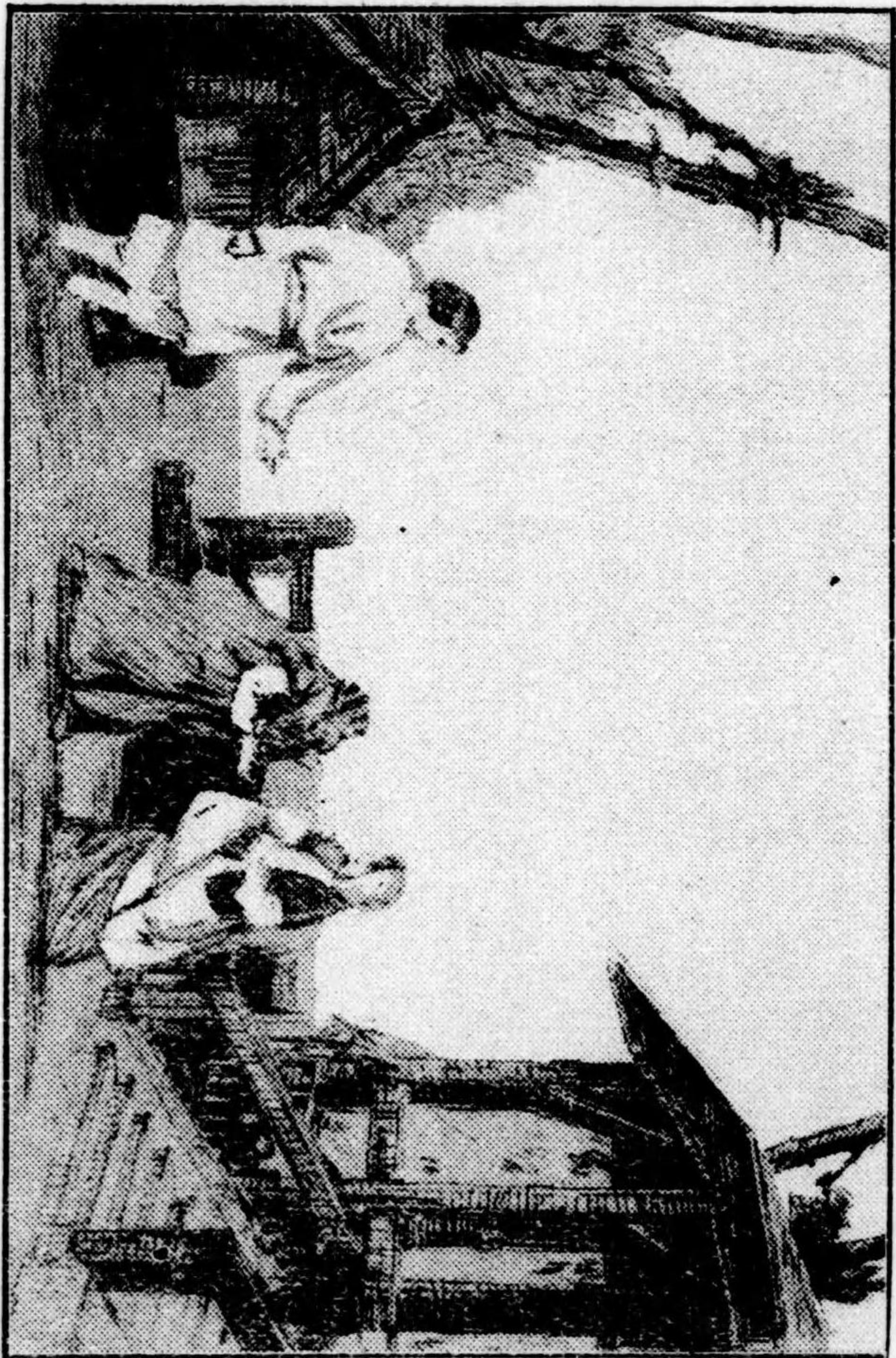
アクリリナ あんなに泣かしてさ。

ニキタ 貴女にや何もありませんよ。

アクリリナ あんなに虐めるんだもの。今に妾のとこだつてあの通りだよ。人いぢめ！
(又左手の室へ去る)

ニキタ (長い沈黙の後) これも覚えておいて可い。女つて奴は砂糖のやうに甘い奴だ。それが可愛い。だが餘り深入りすると、往生だて。(幕)

幕 二 第



ニキタ

アクリリナ

第二幕

ピートルの家の側の街道。

右手には二室に分れた建物、中央に階段ある支關。其前にベンチ一脚。左手には庭と門の一部見ゆ。右手奥には洗濯物が乾してある。

序幕と此幕との間には六ヶ月の経過あり。

アニツシヤ獨り庭の隅に亞麻を打つてゐる。

アニツシヤ (仕事をやめて耳をすまし) 又あいつは動き出した。屹度爐端から匍ひ下りたんだよ。

ピートルの聲 (家の中で) アニツシヤ!

アクリリナ桶を一荷擔つて登場。

アニツシヤ 父さんが喚んでるから、行つて見てやつとくれ。

ピートル (前のやうに) アニツシヤ!

アクリリナ 御自分で見てあげればいゝのに。

アニツシヤ 行つておわりつてことよ。

アクリリナ右手の家の中に入る。

アニツシヤ (獨り) もう彼にも切なくなつて仕舞つた。一體金をどこに置くんだらう。二三日前には支關に居たから、どうも其邊へ隠したらしいが、今ぢやもう何處にあるんだか一寸も分りやしない。何でも彼はそれを取られるかと戦々してゐるんだ。どうも家の中には極つてゐるが、どうにかして見付からないものかなあ。昨日は妹に確に着けては居なかつた。これぢや丸で見當がつきやしない。本當にもう切なくなつて仕舞ふわ。

アクリリナ、右手の家の中から出て来てシヨールを捲く。

アニツシヤ どこへ行くのお前。

アクリリナ 父さんがマルタ叔母さんを喚んで來いつて。俺はもう死ぬから妹を茲へ喚んで來てくれ、息のあるうちに一言あれに云つて置くことがあるつて。

アニツシヤ (獨白) 何、妹を喚び寄せるつて! まあ窮つて了ふ。嗟——嗟——もう。屹度

それに金をやる氣なんだよ。まあどうしたら可いんだらう。あゝ。(アクリリナに) 行つちや可けないよ。どこへ行く氣なんだね。

アクリリナ 叔母さんを迎へによ。

アニツシヤ 行くなつてことよ。妾が自分で迎へに行つてやるよ。お前はね、洗濯物を持つて川へおいでよ。愚圖々々しておりや日が暮れちまふよ。

アクリリナ だつて父さんに吩咐かつたんですもの。

アニツシヤ 妾が行けつて處へ行きやいぢやないか。マルタ叔母さんのところへは妾が行くつてことよ。疾く襦衣を垣からはづしておいで。

アクリリナ 襦衣を？ だつて本當に行つて下さらんけりや困るわ。あんなに吩咐かつたんですもの。

アニツシヤ 呟いれ、妾が行くからつて云ふに。アニエートカはどこへ行つたえ。

アクリリナ あれですか。犢の番をしておますよ。

アニツシヤ こつちへ喚んでおくれ。無闇に逃げるやうなことはあるまいから。

アクリリナ、右手奥から洗濯物を下して門から左へ這入つて行く。

アニツシヤ (獨り) どうしよう。喚びに行かなかつたら彼奴が呟鳴るだらうし。喚びに行けば、妹に金をやつて了ふだらうし。そんな事になりや百日の説法も屁一つだ。どうしていいのやら、自分でも分りやしない。あゝ、もう頭が張り裂けるやうだ。(仕事をツける)

マトリヨーナ、旅へ出かけるやうに杖をつき包をかゝへて左手の門より登場。

マトリヨーナ まあ内儀さん。

アニツシヤ (見廻して仕事を投げ捨て、喜び餘つて両手を打合せ) おやまあ、ばあやさん、好いとこへ。喚びにやつてもこれまでだよ。

マトリヨーナ そりやまあ一體何事でございますい。

アニツシヤ 妾やもう馬鹿になつて了ふとこだよ。あゝもう、慘憺な羽目になつちまつて！

マトリヨーナ ぢや、まだ瞑目かないんですれ。

アニツシヤ それどこぢやない。活きるとつかず、死ぬとつかずで。

マトリヨ一ナ もう誰かに金をやつて了つたやうですかい。

アニツシヤ 丁度令れ、株のマルタを喚びに行けつて云ふんだけれど、てツきり金の事に相違ないんだよ。

マトリヨ一ナ そりやさやうですとも。だがもう貴女に秘して誰かに渡して了つたんぢやないんでせうか。

アニツシヤ そりやないよ。誰にも渡しやうがないよ。だつて妾が鶉の目鷹の目で附きツきりなんだもの。

マトリヨ一ナ ぢや一體在りかは何處ですかい。

アニツシヤ それをどうしても吐かないの。如何手を盡しても嗅ぎ出せないんだよ。どうも隠し場所をあつちこつちへ替へるらしいよ。それにあのアクーリナの奴も油断ならなかられ。あんな痴な癖に他をつけ狙つて用心してゐやがる。あゝ、もう此頭は張り裂けるばつかしよ。がつかかりして了つたわ。

マトリヨ一ナ あゝお神さん。もしあの人貴女に秘して金を誰かにやつて了つたとすれば、貴方は一生涯泣きの涙でございますぜ。此屋敷からも追はれて了ひますぜ。お神さん、貴方は此永い年月嫌な良人で苦しみ抜いた揚句に、今度は乞食寡婦で恥を曝して歩くことになりますが……

アニツシヤ ばあや、もう止してくれ！ 苦しくつて此胸が裂けさうだよ。もうどうしていいやら分りやしないし、誰一人相談相手になつてくれる者は無しさ。ニキタに話して見たつて、唯ビク／＼して居て飛び込んで左袒ても呉れないし。昨日は唯金は床の下に隠してあるつて、一言云つてくれたばかりさ。

マトリヨ一ナ ぢやそこを捜して見ましたかい。

アニツシヤ そんなことが出来るかね。彼はそこに附ききりなんだもの。どうも自分の肌へ着けたり外へ隠したりするらしいよ。

マトリヨ一ナ お神さん、睨りなさいよ。こゝでへまな事でもしやうものなら、もう取り返しがつきませんぜ。(小聲で)例の濃い茶を淹れてやりましたかい。

ピートル右手の家の中で又呻く。隣の女通りすがる。

アニツシヤ 嗟々もう。(返事をしやうとしたが隣の女が来たので黙つて了ふ)

隣の女 (家の中の呻き聲に耳を倚て、アニツシヤに) アニツシヤ、まあお聞きなさいよ、旦那が唸つてるぢやありませんか。

アニツシヤ なあに、いつもあんな唸るやうな聲をして咳をするんですよ。容態がどうも悪いには悪いんだけど。

隣の女 (マトリヨーナに進み寄つて) おや小母さん、お早う。どこからお出でになつて。マトリヨーナ まあ貴女も。我家から来ましたよ。悴に會ひたうて、彼の襯衣を届け旁々やつて来ました。あれでも我子となりや、面倒も見にやなりませんし。

隣の女 ですとも、無理の無いことでき。(アニツシヤに) 妾や麻布を漂白さうと思つたんですが、他もまだ初めないやうだし、少し早過ぎるやうな氣がしまして。

アニツシヤ そんなに急ぐこともないでせうに。

マトリヨーナ あの、旦那はもう聖餐式が済んだんですか。

アニツシヤ えい、昨日僧さんが来てくれて。

隣の女 あ、お神さん、妾も昨日お目にかかりました。ほんとにあんなに病み逢けて了つて、よくまあ持ちこたへたもんだと思ひますよ。ねえお神さん、二三日前にも、もう息を引きとるつて騒ぎで、泣いたり呻いたり、湯灌まで用意したんですのにねえ。

アニツシヤ それがあんなにむツくり盛り返して、今ぢや又ぶら／＼してゐて。マトリヨーナ 旦那の末期の油塗の式はどうなさいますか。

アニツシヤ 皆からもそれを勧められるんだけれどね。明日もまだ息があつたら、僧さんを喚びにやらうと思つてるの。

隣の女 本當にお神さんも大抵ぢやないこと。「病人よりも看護の地獄」たあよく云つたもんですわねえ。

アニツシヤ それだけならまだ好いんだけれどねえ。

隣の女 そりやだれだつてお察し申しますよ。今か／＼つて病人を一年中も見てゐるのは並大抵のことぢやありませんよ。丸で兩手を括られてるやうなもんですもの。

マトリヨーナ 寡婦生活も堪りませんよ。それもまだ若いうちならようござんすがね、白髪者と來たら唾を吐き懸けてくれるものもありますよ。年をとるほど辛いことはありませんぜ。まあ此婆やを御覽なさい。一寸歩くともう疲れきつて、自分の足も感覚なしですもの。——時にお神さん、悴はどこにゐるんでせうか。

アニツシヤ 畑の手入をしてゐるよ。まあこちへお這入んなさいよ。茶缸サモワールを仕掛けておいしいお茶でも喫りませうから。

マトリヨーナ (坐つて) あ、お神さん、妾も萎頓ですよ。——それはさうと、旦那の塗油式は是非とも仕てお上げなさいよ。それで魄も往生出来るんですからねえ。

アニツシヤ さうどこぢやない。明日は僧さんを迎へにやりますよ。

マトリヨーナ さう、さう。その方が宜うございますよ。——ねえそちらのお神さん、妾の方にや又婚禮がありましたね。

隣の女 まあ、何だろ、此春さき今時分。

マトリヨーナ それがね、それ諺に云ふ——惚れた同士の季節知らず——とか云ふのでね。

セミヨンがああのマリンカを娶つたんですよ。

アニツシヤ そりやまあ仕合せてしたねえ。

隣の女 處が先方は男裸夫なんです。おまけに子澤山と來ておませうからね。

マトリヨーナ さうですとも、四人も蠢々してゐるんです。だれが貴女、一節ある眼識の

きいた女ならそんな男のどこへ嫁きませうに、そこをそれ、あの女を迎れたんでせう。

もう女の方ぢや嬉しくつてバタ／＼ですわ。それでも祝儀の時にや酒も出ましたしね。

尤も酒は強かつたが、杯が脆かつたとかで、破碎けて酒が零れましたとき。

隣の女 驚いた、噂になるほど？ 一體御亭主は工面が宜いんですかえ。

マトリヨーナ まあ當座可なり好いんですよ。

隣の女 そりやさう云ふもんですよ。誰だつて初手から繼子の中へは有難くはありませぬわね。現に妾の方でもミチャエルなんて、土百姓ですがね貴方……

隣の女の夫の聲 こらマウラ！ 痴漢め、どこへ失せてやがるんだ。早く行つて牛を入れて來い。(隣の女、出てゆく)

マトリヨ一ナ (隣の女がまだ見えるうちは今迄通り聲高く) さあ、あの女が稼いで了へばせめて我家のニキタにだけま未練が無くなる筈だ。(急に叫び聲になつて) もう行つて了ひました。ねえお神さん、例の茶を淹れてやりましたかよ。

アニツシヤ 又そんなことを云ひ出すのかね。妾やもう自分の方が死にたいやうだわ。あんな茶を飲ましたつて彼は死にやしないし、唯妾の罪を重ねるばかりだ。あ、何だつてあんな粉薬なんか持つて来て呉れたんだね。

マトリヨ一ナ おや、あの粉薬が何ですとえ？ ありやお神さん唯睡り薬ですもの、あれを服ましたつて何もありませんよ。何も毒にやなりませんよ。

アニツシヤ まあ、妾やあんな睡り薬の事なんか云つてやしないよ。白っぽい方の奴よ。

マトリヨ一ナ なあにお神さん、あれがどうしました。あれこそ本當の薬ですよ。

アニツシヤ (溜息して) そりや知つとるけれどね、何だか空怖しくつてさ。もうこんな窮つたことはありやしない。

マトリヨ一ナ ちや、どつさり用ゐたんですかい。

アニツシヤ 少しづつ二度ばかり與つたよ。

マトリヨ一ナ それでも知らんでおましたかい。

アニツシヤ 妾自分でも一寸甜めて見て、苦いなんて氣がつかない位だつたのに、彼は飲んで了ふとれ、こんな茶は嫌だつて云ふんだよ。妾やね、病人にや何だつて味が變ですよつて云いてはやつたけれど、其時にや妾も變に胸苦しかったよ。

マトリヨ一ナ まあ、そんなことは忘れてお了ひなさいまし。思つてると尙碌な事ありませんよ。

アニツシヤ お前さんがあんな粉薬なんか持つて来て妾にこんな罪なことを唆しかけて呉れなかつたら宜かつたのさ。妾やそれを考へた丈でも、此胸を締めつけられるやうな氣がするよ。一體何であんな物を持つて来て呉れたのだよ。

マトリヨ一ナ まあ、お神さん、どうなさつたんですよ。お耽り願ひますよ。罪、罪つて何でそんなに妾に塗りつけて下さるんですか。御自分のことは棚に上げて此無病な頭へさう罪を託けて下さつて迷惑致しますよ。怪しい事には妾は決して連累ひはしないんで

す。何の事か一向存じ寄りませんよ。妾は神壇の前でも誓言致します。粉薬など差上げた覚えは毛頭有りません。嘗てそんなものを見たこともなし、そんな物が有ると云ふことも聞いたこともありません。お神さん、貴女は今日の御身分もお考へ下さいよ。つひ此頃もお噂申したんですよ。お神さんが何よりお可哀いさうだ、義理の娘は抜けてゐるし、旦那は隻足棺へ入れてゐる、こんな惨憺があらうか、これぢや誰だつて浮ばれやうがない」つて申したんですよ。

アニツシヤ さうよ、それに違ひないわ。だからもう妾は自分で首でも縊るか、彼をやつて了ふか、それより外道がない。地獄でもこれまでだもの。

マドリヨーナ それりや御尤でムいますよ。けれど斯うなつちやもう茫然しちやゐられませんか。何が何でも金を探し出して、旦那にや疾く茶を服まして了ふんですよ。

アニツシヤ 噫、情ない、本當にどうしく可いんだか分りやしない。もう胸が押し潰されさうだ。どうか彼がひとりて死んで呉れ、ばい、んだけれど。妾やそんな恐しい罪は考へるでも嫌だ。

マドリヨーナ (憎さげに) 一體あの人は金の置き處をなぜ言はないんだらう。誰にもやらないで冥土へ持つてくつもりかしら。罰があたるよ。そんな金をフイにしちや勿いぢやないか。そんな事お罪ですよ。今一體何をして居ますえ。用心しなくちや可けませんよ。

アニツシヤ あい、妾もう何も知らない。こんな切ない目に會つて！

マドリヨーナ 何も知らないつて事はありませんよ。解りきつてるぢやありませんか。何もう屁間な事をしたら一生悔んでもかへりませんよ。あの妹に金を渡されて貴女指を咬へて見てゐるんですか。

・アニツシヤ あい、妹を喚びに行けつてんだつた。妾が行かなくちやならない。

マドリヨーナ まあその方は後にして、何を措いても茶缸をお仕掛けなさいよ。あの人に茶を服ましといて、二人で一緒に金を探ませう。大丈夫ですよ。見當らんで譯はありませんよ。

アニツシヤ あい、もしどうかなつたら！

マトリヨーナ 何を云つておなさる。何がどうかなるつてんですよ。唯金を眺めた丈で横取りされて構はんですか。さあ、さつさとおやんなさいよ。

アニツシヤ ぢや茶缸を掛けに行かうか。

マトリヨーナ 早くなさいまし。する丈の事をしておかないと、後で臍を噬みますよ。さうそ、早く〜。

アニツシヤ (右手の家の方へ行く)

マトリヨーナ (呼びかけて) モシ一言。どうかニキタにや御内證でね。あんな碌でなしに粉薬のことも嗅ぎ付られたら、それこそ大變ですよ。何をするか知れやしない。あんな氣の弱い奴にや鶏一羽絞められないんだから。ねえ、彼奴にや御無用ですよ。(驚いて口を噤む)

ピートル 不意に右手の戸口に出て来る。

ピートル (壁に縋つて階段の方へ摺り歩き、弱い聲で) 聞けれえのか。こらアニツシヤ。何人だそこにゐるのは。(ベンチへ倒れかゝる)

アニツシヤ (角の方から出て来てピートルに) 何でお前さん匍ひ出て来たんですよ。今迄の處に寢て居たらよからうに。

ピートル 子供はケルタのとこへ行つたのか。あゝ、苦しい。早く死んだ方がいい。

アニツシヤ あの娘は洗濯に川へやつたから暇がないんですよ。お待ちなさい、妾が手がすいたら自分で行つて來ますから。

ピートル ぢやニートルを遣れ。ありやどこにゐるんだ。——あゝ、苦しい、もう死にさうだ。

アニツシヤ だからあの娘を今探れてゐるんですよ。

ピートル あゝ、ぢやどこにゐるんだ。

アニツシヤ こちらで聞きたいんですよ。本當に忌々しい奴だ。

ピートル もう何する力もない。五臓六腑が煮えかへつて、體中に錐をもみ込まれるやうだ。それを手前達あ犬ころ同前に棄つて置きやがる。水一杯呉れる氣がありやしねい。

あゝ、苦しい……あゝ、苦しい。早くアクーリナを喚んで來い。

アニエートカ駆け来る。

アニツシヤ それそこへ来た。アニエートカ、父さんが喚んでるよ。

ピートル (アニエートカに) 早く行つてくれ……あ、苦しい……お叔母さんとこへ行つて……父さんが用があるから来ておくれつて、そいつて来てくれ。

アニエートカ はい。

ピートル 待て。大急ぎだつて云ふんだぞ。父さんがもう駄目だからつて……あ、苦しい。

アニエートカ 一寸シヨールをとつて直にれ。(急いでゆく)

マトリヨーナ (アニツシヤに目くばせして、小声で) さあお神さん、油断なくねえ。早く行つて部屋中お探さない。犬が蚤をとるやうに何かから何まで掘ちくつて。もし體に着けてるかどうか、こちらで妾が探しますから。

アニツシヤ (小声でマトリヨーナに) お前さんが居てくれれば千人力だよ。(右手の階段の處へ行つてピートルに) サモワールを掛けませうか。ニキタに會ひにつて丁度婆やさんも

来てゐるから、一緒におあがんなさいよ。

ピートル おい、何よりだ。疾く淹れてくれ。

アニツシヤ 右手の家に入る。マトリヨーナ右手の階段に近づく。

ピートル 今日は。

マトリヨーナ (頭を下げ) はい、旦那様、お早う御座います。お加減の方はまだお宜しくない御様子で。我の老爺も大變お案じ申しまして、どうか行つて旦那様の御容態を伺つて来てくれ、臭々も宜しく申してくれと、斯う云はれて上つたのでムいます。(又頭を下げる。)

ピートル 俺はもう永持ちはないよ。

マトリヨーナ どうもお見受け申した所では……一體何でムいますよ、病氣と云ふ奴は悲しい奴でムいます。旦那様も随分お妻れになりましたねえ。御様子を見ただけで胸が一杯になつて了ひます。はいさうですとも、病氣にやられちや見えも糸瓜もあつたもんどちやムいませんよ。

ピートル もう俺の往生も間近になつたよ。

マトリヨーナ なあに旦那様、こればかりは何とも致しやうがムいません、みんな神様のお思召次第ですから。それにもう旦那様は聖餐式もお済みになつたさうでムいますし、神様のお迎へがあつたら塗油の式をお受けになればいいのでムいます。有難いことに御新造はあんなに惻發つたお方ですから、念の届きたけに丁寧なお葬をしたり、お経を上げたりなさるに違ひムいません。なあに活計向の方は忤めがお請合致しますよ。

ピートル 處がね、家の采配を振る人間が無いだよ。家内の奴だつて獨立や出來ないし根が馬鹿な方だからね。さうそ、そりや知つとるよ——そりやみんな知つとるがね。娘の奴もどうも足りないし、それにまだ齡が齡だからね。さあ今ぢや斯う兎に角の身上に築き上げて、その切り廻し手が無いと云ふんだ。こればかりが屈托でならないんだ。
(すゝり上げる)

マトリヨーナ 何さ貴方。現時お金さへありや、どんな者だつて使つたり動かしたり出來ますよ。

アニツシヤ右手から支關へ來る。

ピートル (アニツシヤに喚び掛け) アニユートは行つたのか。

マトリヨーナ (獨白) まあどうだい、まだ忘れないでゐる。

アニツシヤ (支關から) えい、もう行きましたよ。もうどうですえ内へ這入つちや。手傳つて上げませうか。

ピートル まあ宜いから死ぬ迄でも茲に置いてくれ。内の中はむれ／＼する。あゝ、苦しい。胸のところが灼かれるやうだ……疾く死んだ方が勝した。

マトリヨーナ だつて、神様のお迎へを受けないうちは、靈魂は獨りぢや飛んで行けませんよ。ねえ旦那様、壽命と云ふものは神様のお手のうちにあるんですから、死にたいつて死ねるもんぢやありませんよ。だから旦那様だつて復快癒らないとは限りません。現に妾の村にも、もう醫者に匙を投げられた大病人が……

ピートル 駄目、駄目、どうも俺は今日のうちに死ぬやうな氣がする。(寄りかゝつて眼を閉ぢる)

アニツシヤ (階段を下りて来て) さあ、どうしたんですよ。這入るんですか、這入らんのです。いつでも愚圖々々してゐる。申し、申し。

マトリヨ一ナ (側の方へゆく、アニツシヤを手招きして、小聲で) 申し、見當つて?

アニツシヤ (小聲で) 駄目。無いんだもの。

マトリヨ一ナ (同じく) どこもすつかり探したんですか。床の下も?

アニツシヤ (同じく) そこにも無いの。屹度屋根裏の部屋だよ。昨日も這ひ上つて行つたもの。

マトリヨ一ナ (同じく) ぢや行つて、出来るつたけお探さないよ。舌で何もかも甜める位にしてさ。どうも今日のうちに殺りさうですよ。爪は眞蒼になつてね、顔の色つたら鉛のやうですもの。——茶缸はどうしましたえ。

アニツシヤ 今煮え立つとこ。

ニキタ、(出来るなら馬上で) 左手より門の處へやつて来る。ただピートルには氣付かず。

ニキタ、(母に) お母さんお早う。内ぢやみんな變りはないかね。

マトリヨ一ナ あいさ、仕合せにどうにか斯うにかやつてるよ。

ニキタ ふーん。時に、旦那はどうなんだらう。

マトリヨ一ナ 叱! それそこに。(ピートルの居るベンチを指さす)

ニキタ その儘でお置きよ。私の構つたことぢやないもの。

ピートル (目を開いて) ニキタ。おいニキタ。まあ茲へ来い。

ニキタ、そこへ行く。アニツシヤはマトリヨ一ナと耳語す。

ピートル えらく歸りが早いぢやないか。

ニキタ もう畑の方が濟んだんですから。

ピートル 橋の向ふの小畑も濟んだのか。

ニキタ あそこは餘り遠いもんですからな。

ピートル 何、遠いつて? こゝへ歸つて来りや尙遠くなるぢやないか。又態々其爲めに
出直さなければならぬ。一度にやつて了つたら宜ささうなものだに。

アニツシヤ (聽いてゐる)

マトリヨナ (近づいて来て)これニキタ。なぜ旦那様のお氣に召すやうに骨を折らないんだよ。旦那様はこの通り御大病で、お前を何よりの力に思つて御座るんだもの。肉身の親のやうに御奉公していいんだ。あんなに吩咐けといたぢやないか。だから骨身がミリ／＼云ふ程働きなさいよ。

ピートル さうだ。阿母の云ふ通りだ。あゝ困つた！ 疾く馬鈴著を出して來い。女衆は……あゝ苦しい……女衆は、擇り分ける。

アニツシヤ (獨白)又あんな旨いことを云ふ。他を皆退かさうつてんだよ。屹度今金を携つてゐるんだ。それをどこかへ隠さうつてんだ。

ピートル 直にもう薯の植ゑ付けだぞ。疾くしないと腐つて了ふぞ。あゝ俺やもう何も出來ない。(立上る)

マトリヨナ (メンチへ駆け寄つてピートルを支へる)妾が連れてお入れ申しませう。

ピートル あゝ、それぢや頼まう。(不意に考へついて)ニキタ！

ニキタ (プリー／＼して)何ですとえ。

ピートル もうこれが見終めだぞ……俺はもう今日にも臨終だ……どうか、お前に角だつたことを言つたり、無理なことをしたり、もし俺に悪いことが有つたら、後生だ勘辨して呉れ。屹度お前に色々濟まないことをしたに違ひない……どうか赦してくれ。

ニキタ なあに、どつちが悪いなんて云へませんよ。赦すも赦さんもれいぢやありませんか。

マトリヨナ あゝ、これニキタ。旦那の仰しやることを熟つく搦んで見る。

ピートル 後生だ。どうか勘辨してくれよ！ (泣く)

ニキタ 旦那、大丈夫神様が赦して下さいますよ。俺や旦那から悪い事をされた覚えはなし、何も悪く思ふ理由はムいませんよ。旦那、それよりどうか俺の方を御勘辨して下さい、俺こそ旦那に濟まないことをしてゐるんです。(泣く)

ピートル、すゝり泣き乍ら、マトリヨナに支へられ右手の家へ入る。

アニツシヤ あゝ、どうしたらいいんだろ、情ない、こんな事を彼が思ひついたのは胸中があつてのことだ、もう解つてゐる。(ニキタに近寄つて)金が床の下にあるなんて、な

ぜい、加減な事ばかり云ふんだね。有りやしないぢやないか。

ニキタ (直には答へず泣いてゐる) 俺や旦那に悪い事をされた覚えは無いんだ。いつても親切ばかりだ。處が俺やどうだ。俺の仕た事あ何と云ふ態だ。

アニツシヤ お黙りよ。金は一體どこに在るつてんだね。

ニキタ (むツとして) そんな物を俺や知らねえ。御自分で探したらいい。

アニツシヤ まあどうしてそんなに急に氣が弱くなつたの。

ニキタ 旦那あ何よりお氣の毒でさあ。本當にお氣の毒でなんねえだ。今のあの泣きかたを御覽なさい。嗟々……

アニツシヤ なかしな人だこと。今急にあの人間が可哀さうになつたのかね。何を云つてゐるんだね。今の今あんなに嗟々云ひ合つてお前に悪體口を利いたぢやないか。それどころか、お前のやうな者は追ひ出して了へつて嘔鳴つてた人間だよ。あんな者より妾の方を可哀さうだと思つてくれていいんだ。

ニキタ そりや又なぜですえ。

アニツシヤ 彼やもう助からないつてんで、金をすつかり隠したんだよ。

ニキタ そりや餘計な心配だ、隠しませんよ。

アニツシヤ まあ、ニキタ。彼は今妹を喚びにやつんだよ。屹度それに金をやる氣なんだよ、そんな事にでもなつたら、二人はどんな慘憺を見るんだね、どうして生きていくんだね。妾など屹度こゝから追ひ出されて了ふよ。お前だつてそこらを考へて呉れなくちや困るよ、お前は昨夕彼奴が屋根裏の部屋へ上つて行つたつて言つたぢやないか。

ニキタ 行きましたよ。そりや確に見ましたよ。だが、どこへ隠したもんかそんな事あ知りませんよ。

アニツシヤ あ、何て妾だる。どれ行つてそこを探して見やう。

ニキタ 去らんとする。マトリヨーナ右手の家から階段を下りて来る。

マトリヨーナ (アニツシヤに耳語し) 行きなさんな。金は體へ着けてゐますよ。妾が今觸つて見ました。紐へ括りつけて胸へあてて置きますよ。

アニツシヤ あい、もうどうしたらいいだろ。

マトリヨーナ 今いけなかつたら、後で屹度うまく探せますよ。いいですか。右脇の下ですよ。あの妹がやって来たなら、もう休矣ですぜ。

アニツシヤ さうだね。彼女が来たなら金を渡すに極まつてるよ。まあどうしたらいいんだろ。情ないわ！

マトリヨーナ どうしたらいいんですつて？ れえ貴方、茶缸が煮え立つたら茶を按排して彼に服ませるんですよ。(叫くやうに)紙の中のをすつかり押しあげて入れて與るんですよ。で、一杯飲んで了つたら、手早く金を振ぎとるんです。ピク／＼しなさんな、もう氣が付きやしませんよ。

アニツシヤ だつて氣味がわるい！

マトリヨーナ もう、摺つた揉んだ言はずに疾くしなさいよ。妹が来たなら妾の方を氣配りますから。愚圖々々は禁物ですよ。金を奪つて了つたら茲へ持つといでなさい、すりやニキタが始末しますから。

アニツシヤ だつてまあ、どうして側へ寄つて行けやうに……それに……

マトリヨーナ さう駄々を言はずに、まあ妾の云ふ通りになさいてば。これにリキタ。

ニキタ (近づき)何が用だつて。

マトリヨーナ こゝに待つておいで、そつちの方でもいい。今に用を頼むから。

ニキタ (手で拒んで)女同士で又何か企てるな。何でも自分勝手の方へ掻き廻してゐる。もう充分だよ。どれ薯をとりに行つて來やうか。

マトリヨーナ (ニキタの手を緊と把つて)お待ちよ、待つといでつてば。

ニキタ坐る、アニユートカ左手の門から登場。

アニツシヤ (アニユートカに)これ。どうしたつて？

アニユートカ 叔母さんはね、娘さんの家の庭にゐてね——直に上りますつて。

アニツシヤ 來るつてよ、まあどうしたらいいだらう。

マトリヨーナ (アニツシヤに)まだ間がありますよ。何でも妾の云つた通りになさいつたら。

アニツシヤ もう何が何だか分りやしない。頭がガン／＼してゐる。アニユートカ、小牛

を行つて御覽、もう逃げて歩いてるか知れないから。(アニュートカ左手へ去る)

アニツシヤ (マトリヨーナに) どうしても妾にや出来ないよ!

マトリヨーナ 何でもいゝから入らつしやいつてば、茶缸が煮え過ぎますよ。

アニツシヤ まあ、どうしたらいいだらう! (右手の家に入る)

マトリヨーナ (ニキタに進み寄つて) さあれえ、お前。(傍に坐つて) お前のやうな事件は餘ッ程考へてやらないとれえ、無闇の事しちや駄目だよ。

ニキタ 事件つて何をさ。

マトリヨーナ さあれえ、一體お前は將來どうして暮していく積りかい。

ニキタ どうして暮していくつて? どうしてでも無いさ、他の人が暮していく様に暮していく迄さ。

マトリヨーナ これさ、こゝの老父が今日にも落命くらしいんだよ。

ニキタ さうさ、壽命だもの落命くかも知れぬさ。それが俺にどうしたつてんだね。

マトリヨーナ (話し中も絶えず右手の階段の方へ氣を配つてゐる) まあ、お前も。生きて

る者は生きてる法を考へなけりやいけないよ。それがなか／＼六ヶしいんだよ。茫然して居ちや困るぜ。妾やお前の爲めには彼方へ行き此方へ行き、足を摺古木にして骨を折つてゐるぢやないか。少しは考へて見ておくれ——妾の事は何とも思つてゐないのかね。

ニキタ 何だつて又そんなに骨を折るんだね。

マトリヨーナ さあ、皆お前の爲めだよ、皆お前の身の振り方の爲めだよ。呆然してゐちや何も出来やしないぢやないか。お前も知つとるだろ、代言人のイヴン・マセーイツチ。

妾は此頃あの人のところへ行つて相談したんだよ。餘ッ程思案したがとう／＼訊いて見たさ。申しねえ、例へばこゝに娘の一人ある鰥夫の百姓が後妻をとつて、又それに娘が一人出来たのに其百姓が死んだとすると、誰か外の人が入婿をして娘達は外へやり、自分分は戸主になれるもんでせうか。つてさ。したらね、そりや出来ないことはないが、色色面倒はある——尤も金づくでやれば造作ないが、でなくちや止した方がいゝつて云ふのさ。

ニキタ (笑つて) さうさ、さう云ふに極まつてらあ。いつでも金を出せだ。何でも金次

第だもの。

マトリヨーナ てれえ、妾やもう露骨打ちあけて了つたのさ。するとれえ。何を措いてもお前は村の組合へは、皆加入らなけりやならない、それにも金が要る。つまり親玉株に取り入るには料理屋へでも招んでやらなきやならない。何でも如才なくやつつけるに限るつて云ふんだよ。これ、これを御覽。(懐から書類を出して)こんな物を書いてよこしたか読んで見ておくれ。お前にやもう何も精通つてゐるんだから。(ニキタの讀むを聽いてゐる)

ニキタ なあに、こりや公證だ、何も名案でもない。

マトリヨーナ まあ聽いておくれ、あの人はまだ云つたぜ。何を措いても金を遁がさない工夫をするんだつて。もし金を攫んでおなけりや、養子の手續も危いもんだ。何でも金が先だつんだからつてよ。だからお前、睨りして今のうちにやつつけて了はにや駄目だよ。

ニキタ 金はお神さんの金だ、勝手に屈托するがいや。俺の知つた事ぢやれえもの。

マトリヨーナ まあお前も、何て馬鹿なことを云ふだらう。女の智慧で及ぶことか。縦令金を手に入れた處で、どうしていか知りやしないよ。そんな事は女ぢや駄目だよ。

お前のやうな男性でなけりや。お前ならどこへでも隠してどうしても出来るよ。さう云ふ方へかけちやお前の方が抜目がないから。

ニキタ あい、女の淺智慧にも困つたもんだ。

マトリヨーナ 何で淺智慧だれ。何でも先金を強奪つてお置き、さうすりやあの女はもう掌のうちだよ。後で縦令喰つてかいつて來ても平氣なもんだぜ。

ニキタ あいもう、其話ぢやうんざりした。もう俺や行く。

アニツシヤ眞蒼になつて右手の家の中から駈け出して來る。

アニツシヤ (マトリヨーナに) 本當に體に着けておたよ。こうれ。(前掛の下を見せる)

マトリヨーナ 疾くニキタにおやんなさい、始末しますから。これニキタ、早く持つて行つて何處へでもお隠し!

ニキタ 大丈夫。どうぞこゝへ。

アニツシヤ まあどうしたらいいだろ。妾が自分でやつた方がいいと思ふし……(左手の門の方へ行く)

マトリヨーナ (其手を掴んで)どこへ行くんです。もう妹が來ますよ。ニキタにおやんなさい。これの方が大丈夫ですよ。まあ貴女も解らないこと。

アニツシヤ (どぎまぎして立ちとまり)まあどうしたらいいんだろ。

ニキタ さあ、どうぞ……へ。俺がいいところへ隠して上げますよ。

アニツシヤ どこへ隠すの。

ニキタ (笑つて)俺にや信用がねいんですかい。

アニツシヤ あい、もうどうしたらいいか知らない。(ニキタに金を渡す)ニキタ、いいかれ、氣をおつけよ。

ニキタ 心配はありませんよ。自分でも分らない位巧く隠しますよ。(左手の門を通つて退場)

アニツシヤ (驚いてつつ立つて)まあ彼の容子つたら………

マトリヨーナ どうしたんですえ。もう逝つたんですか。

アニツシヤ どうもさうらしいよ。妾が金を奪つても知らないでゐるんだもの。

マトリヨーナ (左手を見て)疾くお部屋へ入らつしやい、嬢つちやんが來ましたよ。

アニツシヤ 妾や悪い事をしちまつたわれ。おやニキタは彼は……。金をどうするんだらう。

マトリヨーナ 叱! 疾くお部屋へ。もうマルタが來ましたよ。

アニツシヤ さあもう奈何ならうと、彼に任したんだから……(右手の家に入る)

アクリーナ、洗濯物を抱へて左手の門から這入つて來る。ピートルの妹マルタ、奥からやつて來る。

マルタ (アクリーナにもつと早く來たかつたんだがね、娘のそこへ行つてたもんだから。ほんに、お父さんは奈何なの、もういけないの。

アクリーナ (洗濯物を下に置いて)どうなんですか——妾洗濯に行つたもんですから。マルタ (マトリヨーナを指して)此お方は?

マトリヨーナ はい、妾は、ニキタの阿母で、ズイエーフから参つたのでムいます。お初にお目にかゝります。こちらの旦那が御不快で大變お六ヶしいお様子で、只今もこゝへお出かけになつて、早く妹を喚んで來いつて仰しやつたんで。もう今頃は如何でムいませうか。アニツシヤ號哭し乍ら右手の家から出て來る。

アニツシヤ (柱へしがみ着いて精一杯に哭き出す) あい、あい、あい、妾を残して……妾を一人ぼつちにして……もう目を落して了つた……あい、あい、妾はもう一生涯慘憺な寡婦で……切ない暮しを……あい、あい……

近所の女愕いて門から入つて來てマトリヨーナとアニツシヤを抱きかゝへる、アクーリナとマルタは内へ駆け込む。群集が諸方から駈けて來る。

群集の聲 疾く婆さん達を喚んで來るがい。死んだものはすつかり始末をするんだ。

マトリヨーナ (袖をまくり上げて) あい何だる！ 釜にまだ水があるんぢやないか！

サモワールも掛かつてゐて——その水もまだ注げないんぢやないか。まあ妾にお任せ、妾が宜い様にやつてやるから。(幕)

幕 三 第



第三幕

序幕と同じピートルの室。

冬。前幕より九ヶ月後。

アニツシヤ取り亂した服装で機を織つてゐる。アニユートカ、爐の上に寝てゐる。

老僕 デイミトリツチ (そつと這入つて来て上衣を脱ぐ) あいこりやまあ。旦那はまだ戻りやんねいな。

アニツシヤ どうしたつてね。

デイミトリツチ ニキタ旦那はまだ町から戻りやんねいでがすか。

アニツシヤ まだだよ。

デイミトリツチ ははあ、又いゝ具合にお樂みかな。……あゝ、やれ〜。

アニツシヤ お前禾打場は片付いたのね。

デイミトリツチ 片付きましたよ。する丈の事はして藁まですつかり掛けとききましたよ。

私や仕事の行りなぐりは大嫌ひでさ。あゝやれ〜。(手のたことを擦つて) もう戻りやる時分だがなあ。

アニツシヤ 何で周章て、歸つて来るもんかね。お金を持つてるんだもの、又阿魔つちよと乳繰り合つてゐるんだよ。

デイミトリツチ さうだ。金を持つてゐるんだもの我儘の仕放題だ。一體アクリリナ嬢ツちやんは何だつて町へ一緒に出かけて行つたもんだ。

アニツシヤ そんな事妾が知つたことかね。何の爲めに悪魔に誘き出されたか彼女に聞いて見るがいゝさ。

デイミトリツチ 成程さうだ。金せへありや町へ行つても色んな事が出来る。大きに然うだ。

アニユートカ 母ちゃん。あたし父やがね、姉やんに云ふのを聞いてたよ——お前に好いシヨールを買つてやる、本當に買つてやるなら自分で擇り取りしろつて云つてたよ。でね、姉やはめかいて往つたよ。新しい上衣を着てね、佛蘭西のシヨールを巻いてさ。

アニツシヤ 彼方はもう恥かしいもきまりが悪いも知りやしない。賣女。

デイミトリツチ 恥かしい理屈がありません。金をどつさり持つてるんだもの、勝手な楽しみが出来てさ。(欠伸をして)あ、やれ。もう夕飯時だらうが。

アニツシヤ (黙つてゐる)

デイミトリツチ れえ、私も少し暖まらして貰ひませう。(爐の上へかき上り)あ、やれやれ、南無マリア様、ニコラス様。

近所の仲よしの女登場。

女 (アニツシヤに)旦那はまだ歸らねやうですれ。

アニツシヤ えい、まだ。

女 もう可い時刻だにな。若しかおらが方の酒屋へでも寄り込みやしまいか。妹のテクラの話ぢや、町から来た橋が大部並んで居たさうだから。

アニツシヤ アニエートカ、これアニエートカ。

アニエートカ なあに。

アニツシヤ 疾く酒屋へ行つてね、父さんが膠着いて飲んでゐるかどうか見ておいで。

アニエートカ (爐端を飛び離れてカフタンを着て)今直に、

女 アクリリナも連れて行つたんですか。

アニツシヤ でなけりや行きませんわ。彼女でなけりや夜も日も明けないんですもの。銀行へ利息を取りに行くんだなんて、跋を合せてゐるんだけど、皆彼女に唆かれて夢中になつてゐるんですよ。

女 (頭を振つて)まあ呆れて物が云へませんわねえ。(沈黙)

アニエートカ (月口で)若しそこに居たら、父やんに何て云ふの。

アニツシヤ ぬるかどうか見てくりや可いんだよ。

アニエートカ はい。ぢや駈けて行つてね。(出てゆく)

や、暫くの間。

デイミトリツチ (呻り聲で)あ、やれ、南無ニコラス様。

女 (仰天して)まあ、屹驚した！誰だれ。

アニツシヤ 下男のデイミトリツチですよ。

女 まあ愕然したよ、唐突に。それはさうとお神さん、アクーリナにお嫁の口があるつて本當ですかえ。

アニツシヤ (機から立ち上つて、卓子に向つて坐り) えい、デトローフから話があつたけれど、何か面白くない事でも聞いたんでせう、話は立消になつたんですよ。誰が貴女、物好きにさ。

女 だつてズイエーフのリスノーフからも話があつたんでせう。

アニツシヤ そりや彼女の方で嫌だつて、それぎりになつたんです。

女 だつて、つまりは何方かへ嫁らにやなりませんわねえ。

アニツシヤ 無論さうしたくつて堪らないんですけれど、どうして餘所へやつていか分らないんですよ、長し短しでね。それに良人ぢや一寸も乗り氣がないし、當人だつてさうですよ、御覽の通り乳繰り合つて、彼女でなけりや湯も茶も煮かないんですから。

女 まあ、そんな大それた事。逆もそんな事思へませんよ。だつて假にも親子と名のついでさ。

てさ。

アニツシヤ あ、貴女、皆で私を瞞してすつかり出し抜いたんですよ、もうお話にも何にもなりませんよ。唯妾がお人好しだから何にも知らずに夫婦になつて了つたんです。寢耳に水ほども知らないうちに、あの二人はあんな仲になつちまつたんですもの。

女 まあ何と云ふ事なんでせう。

アニツシヤ 妾の鼻をあかして二人で隠し食ひしてゐるのが段々目について来るんでせう。貴女、こんな嫌な事つたら無いんですよ、逆も堪つたもんぢやありませんよ。あ、もう何の腐れ縁であんな奴を思ひ込んだのだから！

女 本當に何と云つていいんだか。

アニツシヤ その上彼奴からこんな仕打をされて凝乎としてゐるのが妾悔しくつてならないんですよ。その切ないつたら無いんですよ。

女 近頃は随分亂暴もするつてぢやありませんか。

アニツシヤ するんですよ。前には酒を飲んでも丸で猫のやうに溫柔でしたし、偶に手荒

いことをすることがあつても、そりや妾の方だつて宜い事ばかりぢやなかつたからですよ。處が今ぢやどうです氣に入らんことでもあると直に襲つて来て、踏み殺し兼ねない險相なんですよ。此間も非道い目にあつて命からしく振り離しましたよ。けれどもあの阿魔と來たらそれに越した悪黨です、丸で蛇のやうな奴ですよ。まあどうしてこんな人非人共が此世に出來だもんですかねえ。

女 本當にねえ。貴女も丸で病人としきや見えませんよ。堪つたもんぢやないでせうさ。乞食の様なのを貴女が拾ひ上げてやつて、今ぢやあべこべに踏み付けられてさ。一體疾くどうにかして了へばいいんでせうに。

アニツシヤ 處がねえ貴女。自分の感情にや仕様のないもので、先夫は随分嚴酷家だつたけれど、それでて妙にこちらの我儘が通つたんですけれど、今度ののと來たらどういふ譯かそれが出來ないんですよ。顔を見るときも意久地が無くなつて了ふんです。あいつの前へ行くともう何にも出來ず丸で濡れ鷺と云ふ態ですからね。

女 まあ貴女もねえ。何か魔術をかけられてゐるんですよ。それに世間ぢやあのマトリヨ

ーナが機織をしてゐるんだと云つておますが、屹度皆あのお婆さんの指揮なんですよ。アニツシヤ さう、それも考へてゐるんですがね。妾も時々ムカ／＼つてして來ると、喰ひツ撃いてやりたい様なこともありますがね。いざ彼奴の前へ行くともう悲る元氣もなくなつちまんです。

女 確に魔術なんですよ。兎角偶然の事で掛けられるもんですからね。どうも貴女の御容子を見ると……

アニツシヤ 妾はこんなに皮ばかりになつてるのに、あのアクリリナの馬鹿女を見て下きい。前にやあいつは、いつも蓬々な髪をして、見つともない娘でしたのに、今ぢやどうです、見違へるやうです。それに彼が飾り立て、やるもんだから、全て七面鳥のやうに艶装してゐるんですよ。性來が馬鹿な癖に何か思つてゐるんでせう、こんな事を言ふんです——妾が此家の女主人だ、此家は妾の物だ、今に妾は父さんのお嫁さんになるんだなんて言ふんですつて。あれでゐて短氣で仕様がないうんですよ。ブリ／＼始めたもんなら屋根の藁でも剥ぎ兼ねないんですもの。

女 本當にお察し申しますよ。だのに世間ぢや貴女はお金があるんだからつて羨ましがつてゐるんですけど、金の力でも涙だけは留まりませんからねえ。

アニツシヤ 羨む方には理屈はあるんでせうけれどね。此身代も彼の爲めにふいになつて了ふんです。あんな面目もない滅茶費ひをされて！

女 だつてお金は貴女んでせう。何だつて見す／＼爲れなりきにしてゐるんですか。

アニツシヤ あい、餘所目にや何にも分らないんですけれど。妾も妙な間違をしちまつたんですからね。

女 若し妾だつたらお上へ願ひ出ますよ。お金は貴女のでせう。男が費ふ権利が無いぢやありませんか。

アニツシヤ 今更権利騒ぎでもありませんし。

女 あゝ貴女も、斯うまでお妻れんなつたのを見ると……

アユツシヤ えい、れえ貴女。こんなに弱つちまつたも、みんな彼奴のお蔭ですよ。もう何をしていたか分らないんです。本當に情なくなつて了ふ。

女 誰か来ましたよ。(耳をすます)

アキム登場

アキム (聖像に禮拜し靴を拭き上衣を脱ぐ) 今日はお變りもムいませんか。皆さんお達者で。

アニツシヤ 今日はお父さん。家からお出でになつて？

アキム へえ、悴に會はうともつてやつて来ました。尤も出掛けはおそかつた。晝飯を食つてから出かけて来たんですけどね。さあ、雪で／＼その歩きづらいと云つたら……チエチエ——非道い目にあつた。それで斯うおそくなりました。時に、悴は内に居ますかえ。悴がさ……

アニツシヤ 居ないんですよ。町へ行きましてね。

アキム (ベンチに腰をかけて) 少し彼に用事があつてぢやが。チエ、なあに一寸頼みてい事で。もう此間も困るつて話しはして置いたんですけど。實は馬がくたばりましてね、どうもあの馬にや騙められましたよ。へえ……馬をその……。どうもまあそんな事で來

たんですがね。

アニツシヤ えい、ニキタもそんな話をしましたよ。歸つて來たら相談出來ませう。(爐ばたへ立つてゆき) 其うちには歸つて來ませうから、まあお夕飯でもおあがんなさい。おい、デイミトリツチ、もう御飯だよ。

デイミトリツチ あい、好い氣持だ。やれニコラス様。

アニツシヤ さあ御飯だよ。

女 どれお暇ませう。左様なら。(退場)

デイミトリツチ (爐の上から下りて來て) 覺えなく睡入込ちやつた。あい、好い氣持だ。

やれニコラス様。——おや久瀧、アキムさん。

アキム えい！ デイミトリツチか。どうして此處へ來てゐるんだ！ え？

デイミトリツチ えい、お前のところのニキタさんの御厄介になつて、今ぢや此家の下男だよ。

アキム こりや消魂だ。チエチエ……おらが悴の下男には。こりや消魂だ。

デイミトリツチ 俺も町の商家に居たこともあるが、例の飲み過ぎて駄目。一層田舎で暮らさうと思つて見ても家は無しさ、とう／＼奉公することになつたんだ。(欠伸をして) あい、やれ／＼。

アキム まあ、何といふことだ……。ニキタは何をしてゐるんだ。何の、あいつが……

下男を傭ふほどの仕事も無い筈ぢやが。チエチエまた……

アニツシヤ 何の、仕事なんかもうそつちのけですよ。前には幾らか氣を付けたんですが今ぢやもう外の事に夢中で、それで下男なんか入れたんですよ。

デイミトリツチ 何せ旦那は金があるんだもの平氣なもんだ。

アキム さあそれが不可。チエチエ……役たいも無い物だ。そんな物があるから體が鈍になつて了ふ。

アニツシヤ もう那樣鈍になつちや、本當の病氣もあれまごさ。

アキム さうだ、誰でも善くならうといふ量見でかゝつて、終惡くなつて仕舞ふのだ。

チエチエ。人間は金があるとどうも懦弱になるて。

デイミトリツチ さうぞ、犬でも同じことだ。満腹が過ぎると、狂氣になつちまふ。人間だつて住肴に漬かつておりや鈍になるは極まつてるさ。俺のやうな者でも、景氣のよかつた時にや随分無理をしたもんだ。三週間も痛飲つゞけて、袴まで叩いてしまった。素ッ裸になる迄は止められなかつた。今ぢや願斷して、もう見るでも嫌だ。あゝ、やれくニコラス様。

アキム ぢや婆さんは何處に潜つてるんだえ。

デイミトリツチ ははあ、婆あかえ。相應によく生きてる口があるもんだよ。今ぢや町で酒屋を廻つてゐるがれ、お見事な婆さんだよ。隻眼は潰れてゐる、隻眼は飛び出てゐる、口は横ツちよに歪んでゐる。おまけに何時だつて白面で居た例がれえ死ぬまで那樣なんだらうさ。

アキム オヤ、どうもそりや餘りだれ。

デイミトリツチ だつて老兵卒の噂々だもの、外に仕やうがれえさ。そこらが當人の運つくだ。

皆沈黙。

アキム (アニツシヤに) ニキタは町に何の用があるんですかい。何か售りにでも持つて行つたんですかい。

アニツシヤ (食卓を用意して) なあに手ぶらで行つたんですよ、金を取りにれ、銀行まで行つて来るつて。

アキム (食ひ乍ら) 一體何に使ふ金ですかい。どこか別な處へでも投れやうつてんですかい。

アニツシヤ いえさ。元金には手を觸けないんだけど、何でも用途があるから二三十ルーブル引き出して来るつてさ。

アキム 引き出して来る用も無からうにな、チエチエ……今日も出す、明日も出す、そんな風ぢや忽ち終へちまふ。

アニツシヤ 何さそりや餘計に取れるんですよ。元金は其儘で居ますさ。

アキム 其儘で? どうして其儘でゐるんですかい。チエチエ……どれ丈でも取れば、

其儘で居やうがねえ。譬へて見りや、粉でも、箱か倉の中へ入れておいて、其うち幾らかでも取つたら、其儘でゐる筈がねえ。そりや萬八ですから、瞞されないやうに御用心なさいよ。自分で確めないと騙がれますぜ。如何に金だつて、取つたあとが其儘でゐる理屈がねえんだ。チエチエ。

アニツシヤ 妾にもよくは分らないんですがね、イヴン・モセーキツチに勧められたんですよ——「金は銀行へ預けるに限る、其儘で置いて利息だけ取れますよ」つて。

デイミトリツチ (食事を畢へて) さうだ、それに違ひねえ。俺が居た店でも其の術をやつてゐた。銀行へ金を預けちや自分達は懐手で何も爲ねえで利息だけは取つて来た。

アキム それがどうもをかしいつてんだよ。金を餘計に取れるなんて。チエチエ。一體誰が其金を出すのか。

アニツシヤ 銀行へ行くとよこすんですよ。

デイミトリツチ いえさ、女の話ぢや了解が悪りい。宜いかね俺が話すからお聴きなさい。

例か斯うだ——お前さんが金持で俺が素寒貧だとする。春の播種季になつても下す種子

がねえとか、上納が出来ねえとか何とかいふ羽目に、俺がお前さんの處へ出かけて行つて頼み込む。「アキムさん十留ばかり貸しておくれ、種子下しをするんだ、其代り秋のマリヤ祭の時分にや、元金の上に一割の増金をお禮に付けて返しますよ」と云ふ。そこでお前さんは、俺の身上にやまだ馬があるとか、牛があるとかを見極めると——「宜いとも承知した、其代り禮として二三留足して返してくれ」と返事をする。俺だつて素手ぢや何も出来ねえ。畏つたと云つて十留借りて来る。儲秋になつて收穫が濟むと、俺は十留返しにゆく、お前さんは三留増金を貰はうと云ふんだ。

アキム それ、そんな事あ宜しくねえ……チエ……。そんな真似をする百姓は……チエ

……そりや神さまを忘れてゐるんだ。そんな事あ可ねえよ……チエ……。

デイミトリツチ まあお待ちよ。又斯ういふこともあるんだ。お前さんが今のやうにして、俺から増金を取つたとする。いいかね、そこで又例へば此家の内儀さんが、遊んでる金を持つて居乍ら、女であるから、まあどう使つていいか分られえとする。とおかみさんはお前さんとこへ行つて——妾のお金を何かに用達て、下さいと云ふ。畏つたと金を受

取つて、お前さんは誰かを待つてゐる。そこへ夏頃俺が出かけて行つて——増金をやるから又十留ばかり貸して貰ひてえと頼む。そこでお前さんは考へて、まだ俺だつて皮ぐらゐは剥げる。振つたら鼻血位は出さうだと見定めたら、山をかけて内儀さんの金を俺に復貸する。處が、疊んでも折つても叩いても何にも出れえと見越したら——どうも今度とは云つて、俺の方は斷つて、別な人に貸し付けて、催促にかゝる。それ御覽、銀行といふ奴は此術をやつてゐるんだ。年中金をぐる／＼廻しにしてゐる。こんないゝ商賣は無えんだよ兄弟分。

アキム (憤つた調子で) 何だつて? そんな下司ばつた事があるもんか。そんな事をする百姓は泥棒も同じだ。第一掟にない事だ。チエ: : 醜穢い事だ。人間の皮を被つて出来る事か: : チエ: : :

デイミトリツチ 處がこんな有りがてえ商賣はねえんだつたら。女衆のやうな金の繰廻しを知られえ鈍い人間とか、高利貸根性ある慾張つた狡猾者は、何でも銀行へ持ち込むんだ。眞個にありや抜目のねえ組織だよ。

アキム (嘆息して) どうも俺の勘考ぢや、金の無えのも慘だが、金の有るのは二倍の慘ぢや。一體神様は人間には働けと仰しやつてある。それなのに金を銀行へ積み込んでおいて、自分は仰臥かへつて懶けてゐて食つてゐる。こんな下劣な、罰あたりな事があるもんか。

デイミトリツチ 罰あたりだつて? だから現時の人間は人氣が悪いんだ。兄弟分。今の人間は何とか遁げ路を探してゐる。これが當世だよ。

アキム (嘆息して) どうも何といふ時世になつたのか。俺や町を見て熟々さう思つた。何と云はず華奢で派出になつた。料理屋でも何でも然うだが、一體、りや何の爲めぢや。どうも世間一般が勿體ない神様を忘れてゐる、すつかり忘れてゐる。——おやお神さん御馳走様でした、澤山頂戴しました。(卓子から立ち上る)

デイミトリツチ (爐の上にかき上る。)

アニツシヤ (食器を集め自分も食ひ乍ら) お父さんも彼に異見をして下さるといゝんだけど、誰だつてそんな口出しをするのは嫌だし: : :

アキム え、何ですつて。

アニツシヤ いえ、此方のことです。

アニユートカ登場。

アキム (アニユートカに) あい、好いお見だ、よく働くれ。寒いだらうに。

アニユートカ いらつしやいお祖父さん。あい、寒かつたこと。

アニツシヤ 居たかい父さんは。

アニユートカ 居ないの。唯アンドリアンが来て居てね、町の料理屋で二人に會つたつて

話したよ。父さんはグデン〜になつてゐたつて。

アニツシヤ お腹空いたる、来ておあがり。

アニユートカ (爐端へ行つて) フー寒いこと。手が丸で凍えて了つた。

アキム (靴をぬぐ)

アニツシヤ (食器を洗ひ) お父つさん。

アキム 何だれ。

アニツシヤ マリンカはよくやつてますかい。

アキム あいさ、中々いいよ。何せ根が惻口な落付いた女だし、稼ぎが偉い。どうも彼

女や誰が見ても正直で働き手で、それで柔和しいよ。

アニツシヤ 何でもマリンカの御亭主の親類の者が我家のアクリリナを欲しいとか云ふんですがね、そんな噂がありましたかい。

アキム あいそりやミロノーフだ。さうそ、女衆がそんな事をべちやくちや言つてゐたやうだが俺やよく覺えない：：：チェ：：：婆あどもは、よくそんな事を饒舌くるよ。俺や忘れつぼくつてさ。さう、そのミロノーフと云ふ族は巾を利かしてゐるよ。

アニツシヤ あい、あの娘を疾く嫁けて了つたら、どんなに好いかと思つて。

アキム 何故ね。

アニユートカ (耳をすまして) おや、馬車に乗つて歸つて來たよ。

アニツシヤ 勝手に乗るが、いや。こちらの知つたことかえ。(見向きもせず匙を洗ひつける)

ニキタ、上様嫌で入つて来る。

ニキタ (戸口に立つて) アニツシヤ。おいお内儀。どなたのお歸りだと思ふ。

アニツシヤ (黙つて顔をそむける)

ニキタ (きつく) オイどなたのお歸りだと思ふんだえ。手前知らんのか。

アニツシヤ およしなさいよ空威張りなんか。眞ッ平だ。

ニキタ (尙怒つて) どなたのお歸りだつて訊くんだよ。

アニツシヤ (彼のそばへ行つて手を把つて) はい、旦那のお歸りよ。さあ、疾くお這入りよ。

ニキタ (つきのけて) 今お這入んなさるよ。苟も旦那のお歸りだ、何と名前を申し上げるんだ。禮儀通りに云つて見な。

アニツシヤ 又始めた。お名前はニキタですよ。

ニキタ そら、それが無禮だ。ちやんと本名を申し上げるんだ。

アニツシヤ ちや、ニキタ・アキミツチさま。

ニキタ (尙戸口に立つて) よし。序に名字も云つて貰ひてい。

アニツシヤ (笑つて、其手を引き) はい、チリキンさま。——まあ御覽なさいな此勿體ぶりがた。

ニキタ それで宜しい。(戸口の柱に靠れて) 借チリキンさまは、どちらの足から先にお部屋へ這入る——こいつ伺ひたいもんだ。

アニツシヤ もう大抵になさいよ。いつ迄も開けつ放して部屋が冷えますつたら。

ニキタ なに、どちらのお足が先だ——それを云へ。叮嚀に申し上げる。

アニツシヤ (獨白) 眞個に嫌になつちまつた。(大きく) 左の足からよ。さあ、さつさと這入つたらいいぢやないか。

ニキタ 左様、宜しい。

アニツシヤ まあ、どなたが在らつしやるか御覽なさいよ。

ニキタ ホー、親父様か。いや親父様は御粗末には出來ん。子たる者の禮が要るな。

(頭を下げて、アキムに手を渡し) お父つさん、よう入らつしやい。これは機嫌よう。

アキム (それには答へず) これも皆酒の仕くさる事だ。嫌らしい。

ニキタ 何、酒が? ははあ、私が悪るかつた。實は友人と一杯聞こしめしましたのさ。
エ、何を隠さう、聞こしめしましたのさ。

アニツシヤ もう奥へ行つてお寝みなさいよ。

ニキタ コラ、身どもは今何して居る。女風情めが。

アニツシヤ あい、もう澤山。お寝みつてば。

ニキタ いや身どもはこれから親父様と茶を召し上るんだ。サモワールの用意をせ。ア
クローリナはどこに居るか。

アクローリナ、派出所りで買物を手にして入り来る。

アクローリナ (ニキタのそばへゆき) まあ貴方は皆投げ散らしちまつて。毛絲はどこへやつたの。

ニキタ 何、毛絲? そこにあるさ。おい、デイミトリツチはどこにゐるんだ。又寝てゐるのか。疾く行つて馬を解してやれ。

アキム (アクローリナには目もとめず、ニキタを見つめて) 何だお前の態は。老僕は疲勞れてグタム／＼になつてゐる。それをお前は歸つて来るなり威張り散らしして……チエ……馬を解してやれたあ何の事だ、罰あたりめ。

デイミトリツチ (爐端を離れて靴を穿き込み) あい何の事だえ、馬はまだ出しツ放したつたか。俺も餘り疲勞れたもんだからなあ。見るさ、旦那は張り切れるほど飲んで來た。咽から出るだる。あいやれ／＼、ニコラス様。(毛皮の外套を來て出てゆく)

ニキタ (腰を下し) どうも申譯れえ、お父さん。飲みましたよ、實際飲みましたよ。これも致し方ない。鳥類畜類でも飲みますから。でせう? 勘辨して下さいよ。ほんにデイミトリツチもよく腹も立てずに、もう今頃は馬を厩に入れたことだらう。

アニツシヤ 本當にサモワールを用意するんですかい。

ニキタ 無論さ。お父さんのおいでだ、お茶でも喫み乍ら話をするんだ。(アクローリナに) 買物を皆持つて來たかれ。

アクローリナ 買物を皆? 妾のだけは持つて來たけれど、外んのは櫛の中にあるのよ、あ

あれ、これや妾んのぢやないわ。(包を一つ卓子の上へ投げて、自分のトランクへ入れる)

アニエートカ (姉が荷仕舞するのを見てゐる)

アキム (ニキタを目つめるのをやめて脚絆と靴をストローヅへかざす)

アニツシヤ お前は靴に張り切れる程有るのに、又父さんはそんなに買つて呉れたんだね。(サモワールを持つて退場)

ニキタ (努めて酔はない風を見せかけて) ねえ、お父さん。怒らないで下さいよ。私を酔つてゐると思つてゐるんでせうが、私や何でも出来ますよ。少々飲み過ぎたつて、正氣を失ふやうな男ぢやありませんよ。ちやんと眞面目でやれます。何だつて覺えてゐます。あー、お父さんから聞いたのは金の用事でしたね、馬が死んだつて。そんな事あ造作ありませんよ。それ位の物あ手許に用意してゐます。それも素晴らしい大金でもあるなら、少しは待つても貰ひますがね、仰しやる位の端た金なら、直にでも差上げますよ。御安心なさいつたら。

アキム (依然靴の紐を直してゐる) あー忤や。年が明けると……チエ……どうも道が悪くてねえ。

ニキタ 何ですつて？ 泥酔漢つて者あ話の相手にならんものですがね、私の云ふ事あ確ですよ。まあ茶でも飲みませうや。何でも大丈夫ですぜ。屹度お父さんの用事は片付けて上げますよ。

アキム (頭を振つて) えい、えい、えい。

ニキタ さあ金を上げますよ。(上衣から財布を引き出して、十留の紙幣を探し出し) これは馬の分として上げます。親のことを忘れちや濟みませんから。お助をするのは子の義務でさあ。まあ、取つて下さい。けちく金など、惜しむ人間ぢやありませんよ。

(アキムに進み寄つて金を押し付けやうとする)

アキム (取らない)

ニキタ (父の腕を掴んで) 上げるんだもの、取つて下さいよ。私や愛しくも何ともないんだから。

アキム 可けないよ……チエ……何で受取れるもんか。チエ、手前とは相談も出来ないよ。正氣もない人間が……チエ、チエ……

ニキタ 駄目だつたら。取つてお置きよ。(父の手へ押し付ける)

アニツシヤ 這入つて来て立ち留る。

アニツシヤ 取つてお置きなさいよ。一度言ひ出したら退かない人間ですから。

アキム (頭を振り乍ら金を受取り) あい、皆酒の所以だ。どうも始末におへえ……チエ……全て。人間が變つて了ふ、チエ……

ニキタ あいよかつた。お返しになれたら其時のこと、なれないつて構ひませんよ。(ア

クーリナを見やつて) アクーリナ、まあお土産をお見せ。

アクーリナ 何ですつて。

ニキタ お土産をお見せつてことよ。

アクーリナ お土産? 見せる要はないわ、皆あつちへ持つて行つたんですもの。

ニキタ 又出して來たらいいぢやないか。アニユートカも見たら嬉しがるよ。何でもい

いからお見せつてことよ。包を解いて持つて來たらいいだろ。

アキム おいら見たくでもない。(ストーヴの上に上る)

アクーリナ (取り出して來て卓子の上に載せる) さあさ。見たつて仕様がなけれ。

アニユートカ マア綺麗! ステパニダのに劣けないわ。

アクーリナ ステパニダんの? あれなど傍へも寄付けないわ。(元氣づいて、包をすつかり解いて了ふ) まあこれを御覽よ、佳いこと。佛蘭西出來のシヨールだよ。

アニユートカ まあ好いこと此更紗も。マシユートカのに似てゐるけれど、あの方が少し青みが薄かつた。此方がずんと佳いわ。

ニキタ それ御覽たら。

アニツシヤ (ペンとして出てゆき、サモワールの烟筒管を持つて再び卓子の所へ來て) 何だつてさうがらくたを並べ立てるんだれ。

ニキタ (アニツシヤに) お前も見えてくれ。

アニツシヤ 見たくでもない。そんな物、初めて見やしないや。そつちへやれ! (手で

拂へのける、シヨールが床へ落ちる)

アクリリナ 何だつて人の物を抛ッ散らかすの。御自分の物を抛ッ散らかすがいい。(拾ひ上げる)

ニキタ アニツシヤ、氣を付けるえ。

アニツシヤ 何を氣を付けるんです。

ニキタ 俺だつてお前の事あ忘れやしないよ。こりよ見るがいい。(一包を示して其上に坐り)これがお前へのお土産だよ。だが、これだつて唯ぢややれねえぞ。おい、俺の體の下の物あ何だか云つて見な。

アニツシヤ 空威張りはおよしなさいつたら。そんな事で怖がるんぢやないから。一體誰の金で勝手な遊興をしたり、そんな出ツ臂に土産まで買つてやるんだね。みんな妾のお金ですよ。

アクリリナ 何で貴女のお金ですつて。御自分こそ盗まうとして失敗つた癖に。彼方へ行つてらつしやい。(衝きやる)

アニツシヤ 何だつて他のとこを衝くんた。お待ちよ、お前の方を衝き出してやるから。

アクリリナ 妾を衝き出すつて？ 何有こつちでこそ！(押しかゝる)

ニキタ これ、これ、何方ももう止さんか。(二人を引き分ける)

アクリリナ 可いから這入らんで下さい。(アニツシヤに)御自分こそ黙つてゐるがいい。御自分の爲た事は人が知るまいと思つてもね。

アニツシヤ 何を知つてるつて。云ふがいい。何を知つてるのか云つて見る。

アクリリナ 妾だつて知つてますよ。

アニツシヤ 何だ、この放縦女め。他の旦那を誑し込みやつて。

アクリリナ フン自分の——癖に。

アニツシヤ (浴せかけて)嘘をつけ！

ニキタ (制して)おいアニツシヤ。もう忘れたのかえ。

アニツシヤ 又威嚇するのかれ。手前など怖いもんか。

ニキタ 行け、彼方へ行つて。(アニツシヤを衝き出す)

アニツシヤ 何處へ行くだね。こりや妾の家だよ。

ニキタ 何でもいから出て行け。失せやがれ。もう歸つて来るな。

アニツシヤ 行くもんか。

ニキタ (月口の方へ衝きやる)

アニツシヤ (泣き叫んで柱へしがみついてゐる) 何だ。こりや妾の家だよ。手前妾を追ひ出すつもりか。この獄卒め、何をしやがる。妾が訴へたらどうなる體だと思ふ。今に見やがれ。

ニキタ さつさと行け行け。

アニツシヤ 役場へでも警察へでも告つてやるから。

ニキタ 疾く行けつてことよ。(外へ衝き出す)

アニツシヤ (月の陰で) えい、首でも縊つて死んでやる! (去る)

ニキタ なあに氣を揉む事あれえ。

アニエートカ あい、あい、母ちやん……どうするの、母ちやん! (泣く)

ニキタ 何さ、これ、一寸父やんが叱つただけだよ。何で泣くんた。直歸つて来るわ、心配するな。これ、行つてな、茶缸を見て来てくれよ。(アニエートカ左手へ入る)

アクリリナ (買物を掻き集め乍ら) どうだる、あの嫌な山の神の暴れ態は。今に見てゐるがいい、屹度譬をとつてやるから。

ニキタ 追ひ出してやつたから、もう可いわ。

アクリリナ だつて他の買ひたてのシヨールをクシヤクにしてアひやがつて、畜生。本當に、追ひ出されなかつたら、眼の球を掻ツ撃いてやるんだつたに。

ニキタ 惡體口はもう止せよ。何もお前、そんなにアリク角を出す理由はれえ。ははあ、大事な人を奪られると思つたんだな。

アクリリナ 奪られるつて? フン、あの般若面だつて油斷がなりませんから。一體貴方あの時に直に手を斷つてどこへでも叩き出してアへば、何の事はなかつたんですよ。

此家は妾のですし、お金だつてさうなんですもの。彼女は口癖のやうに、此家は自分の物だなんて云ふけれど、一體あんな大それた女があるもんか。お父さんた——の

も彼女だ、あの畜生だ。罷り間違へば貴方のとこだつて行り兼ねませんよ。

ニキタ エト蒼蠅い。女郎の口つて奴あ、栓をかふこともならねえ。譯も分らずに喋つておやがる。

アクリリナ 何さ、ちやんと分つてますよ。もうあんな奴と共生活は眞平です。もう追ッ拂つてしまはう。先方だつて妾とは嫌々苦だわ。あんな上等な家婦さんては珍しい、人の家に置くのは勿體ないもんだ、監獄肌ですわねえ。

ニキタ もう止せつたら。あんな奴は構ふことはねえ。此俺がぬるぢやねえか。此家の戸主は俺だ。何でも俺の勝手だ。もうあんな奴なんか想つてやしないよ、お前と云ふ者があるぢやねえか。誰を可愛がらうと俺の勝手だ、俺の権利だ。彼女だつて俺から見れば尻の下だ、地びたに這ひつくばつて居るんだ(足もとの床板を指す)あ、惜しいことだ、手風琴でも有つたらなあ……(歌ふ)

想かなうて添ふならば、

粥を啜うても友白髪……

飢ゑも辛さも情に紛れ、

末にや笑うて死のわいな……

デイミトリツチ登場、カフタンを脱ぎ爐かの上ののる。

デイミトリツチ 又女郎どもの啜合や撈り合ひか。あ、やれ〜ニコラス様。

アキム (爐端に坐つて、脚絆と靴を取つて穿く) 此隅の方へ這入りよ。そこは暖かい

よ。

デイミトリツチ どうも皆性が合はんと見える。困つたもんだ。

ニキタ おいプランデーを持つて来い。茶と果酒を交互に飲つて見るんだ。

アニユートカ左手から登場。

アニユートカ (アクリリナに) 姉やん、茶缸がグワタノ、煮いてるよ。

ニキタ 阿母はどこにぬる。

アニユートカ 玄關に泣いてるよ。

ニキタ ぢや喚んで来な、サモワールを持つておいでつて云ひな。でな、お前は茶道具

を持つて来な。

アニエートカ 茶道具？ はい。(茶碗やコップを運ぶ)

ニキタ (ナリツカ、煎餅。餅などを持ち出し)これは手前のお土産だ。女どもには毛織。バラフィンは一玄關にある。金はこゝにある。一寸待てよ。(算盤を取つて)直様勘定して見やう。(よせて見る)麥が八十コペク、茶がこれ、父へ十留……
おや、お父さん、どうぞ来てお茶をお上りなさいよ。

沈黙。アキムは爐の上で靴の紐を結んでゐる。アニツシヤ、サモワールを持つて登場。
アニツシヤ どこに置きますか。

ニキタ 卓子の上にお置き、時にお前は役場へ行つて来たかれ。オイ、なぜ黙つてゐるんだれ。もうブリー／＼や止した方がいゝよ。まあ、茶でもお飲みさ。(自分の腰かけてゐた包を渡す)

アニツシヤ (黙つて頭を振り乍らそれを受取る)

アキム (爐から下りて皮の外套を着、卓子の所へ行つて十留の紙幣を置き)此金は返す

よ、受取つてくれ。

ニキタ (金へは目もやらず)お父さん、何だつて仕度なんかするんです。

アキム おりや今から歸る。許してくれ(頭巾と帶とを取り上げる)

ニキタ 何を云つてゐるんです。此夜夜中どこへ行かうつてんです。

アキム おりや此家には居られねえ、どうしても居られねえ、悪く思はんでくれ……チエ……居られねえもなあ居られねえんだから。

ニキタ だつて一體どこへ行くんです。丁度今茶を淹れるつてに先立つて。

アキム (帶を締めて)いや俺は歸る。ニキタ、お前の家は怪しからんことをしてゐるな。
チエチエ……どうも怪しからんよ。お前は實に大それた生活をしてゐる。こんな處にゐられるもんか。

ニキタ まあ妄言も可い加減にして、坐つてお茶でもお上んなさいな。

アニツシヤ お父さん。今頃出かけちや第一世間體がかしいですよ。何がお氣に障つたんでせう。

アキム いや何も氣に障りはせん。そんな事は一寸も無えが、どうも我子がチエ、チエ……墮落するのはチエ、チエ……見兼ねるわい。

ニキタ 墮落ですつて。そりや一體どう云ふことです、委しく承りませう。

アキム さうだ、お前は今墮落の崖に臨んでゐるんだ。だから俺が前の夏に何と云つて置いた！

ニキタ はい、色々聴かされましたね。

アキム 第一あのマリンカだ、あの孤兒の女だ。あれをお前は瑾物にしておき乍ら……ニキタ 又途方もない事を持ち出した。お止しなさいよ。あんな陳腐な事を。もう夙に過ぎ去つた話だ。

アキム (激して) 何、過去つた話だ？ そんな事があるものか。罪惡と云ふものはチエ、

チエ……それからそれと引つ張り合ふ物だ。ニキタ、お前はもう罪惡に箝まり込んで、

チエ、チエ……段々深入りしてゐるぢやないか。

ニキタ まあ落付いてお茶でもあがつて、それから話はゆつくり出来ますよ。

アキム 嫌だ。俺はお前達と茶は飲めねえ。お前の亂次を見ると切なくなる。チエチエ……胸が壓し潰されるやうだ。一緒に茶など飲むものか。

ニキタ エ、嘸いな。まあお掛けなさいつたら。

アキム お前は金といふ陥穽に陥ちて了つたんだ。こらニキタ、よく胸に手を置いて見ろ。

ニキタ 何だ馬鹿らしい、自分の家で説法を聴かせられてらあ。一體お父さんは私がどうすりや可いと云ふんですかい。洩つ垂らしの小僧の時分なら、小突かれうと撈られうと厭ひませんがね、今日日ぢやもう然うはいきませんぜ。

アキム さうとも、それに違ひねえ。今ぢや親父を尻に敷く人間も有るつてことだ。さうぞ、段々時世が澆季になつて行くんだ。

ニキタ (腹を立てて) 馬鹿らしい、此方は立派に暮してゐるんだ、一文だつて御厄介にやなりやしれい。御自分でこそ困るからつて御座つたんぢやねえか。

アキム だからお前の金は返したよ。そんな物は欲しかねえ。手前の惡錢など貰ふ位な

ら、一層のこと乞食に出かけるよ。

ニキタ もう可い加減になさいよ。何だつてさうアリ／＼したもんだ。家内中をこつたくり返して丁ふ。(手を引きとめる)

アキム (泣いて) 離せ／＼、こんな處にや居られねえ。こんな業曝しな家におるよりか垣根の陰で寝た方がいい。ペツ。お前は太抵にして置けよ。(中の戸から去る)

ニキタ あい、えらい事だつた。

アキム (又戸をあけて) ニキタ、正氣になれよ。よく胸に手を置いて見る。(立去る)

アクリリナ (茶碗を取つて) お茶を注ぎませうか。(誰も黙つてゐる)

デイミトリツチ (呻るやうに) あい、神様、罪ある儂をお救ひ下さい。(皆どきツと身顫ひする)

ニキタ (爐端のベンチに坐り) あい、あい、退屈で仕様がねい。おいアクリリナ、一體手風琴はどこへやつたんだえ。

アクリリナ 手風琴？ 又そんなことを云ふ。あんなに修繕にやつたぢやありませんか。

さあ、注ぎましたよ、来ておあがんなさいな。

ニキタ 嫌だ／＼。もう燈火を消して丁へ！ あい、苦し／＼堪らんわ！ (泣き入る)——(幕)

第四幕

ピートルの家につける庭。

右手には暖室と門、左手に冷室と穴藏。夜。月輝く。

暖室の方から酔へる人々の話し聲や嘸鳴り聲聞ゆ。

近所の女二人支關の方から来る。

第一の女 (第二のを手招きして) 一體アクリリナはどうして顔を見せないんだらう。

第二の女 眞個にね、何故でせう、屹度自分では出て来たんだけど、出て来られないことがあるんでせう。婿舅達は折角見合ひに来たのに、當人は冷室の方に寢てゐて顔を見せないんですものねえ。

第一の女 さうね。だつて何故でせう。

第二の女 どうもお腹に故障があるんだつて、世間が云ひますがね。

第一の女 まあ、そんなことが!

第二の女 處がさうなんですよ。マアちよいと貴女……。(耳へ口を持つてゆく)

第一の女 だつて罪ですわねえ。どうせ先方へだつて知れるんだらうに。

第二の女 なあに知れるもんですか。今は皆あんなに酔つてゐるんですもの。それに第一持參金を狙つてゐるんですからねえ。まあ色々な物を貰つて行くんですつて、毛皮のコリーが二襲、上被が六襲、佛蘭西出來のシヨールが一枚——それに麻布を夥多と、お金が何でも、二百留とか云ひましたよ。

第一の女 だつて腹の方の噂が眞個とすりや、お金など幾らだつて嫌ですよ。そんな瑾物をねえ。

第二の女 叱！ それそこへ舅さんが。(二人は口を仰へて玄關へ這入つてゆく)

舅、逆咳をし乍ら右手の玄關から出て来る。

舅 (獨り) あい、汗びツしよりになつた。室内は恐ろしく暑いことだ。一寸風を入れやうて、(立ち上つて大息し) どうも分らん。これには何か異しな事があるんだわい——面白くてもねえことだ。宜し、一つあの婆さんに聴きたらして見やう。

マトリヨーナ玄關から出て来る。

マトリヨーナ まあ随分お探れましたよ——お舅さんはどこだらうつて。こんな處にいらしたんですねえ。一體お一人で何を仰しやつてゐるんです。まあ有難いことに、萬事立派にまゐりさうですよ。何も法螺を吹くにや當りませんよ、妾も法螺を吹く性じやありませんがね。けれど貴方がたも眞個にお合せですよ。一生神様にお禮を申していゝんです。第一貴方、嫁が並普通の嫁ぢやムいませぬよ。それが嘘なら、近所方々を探れて御覽なさいまし、この位の嫁は貴方……

舅 そりやさうてがせう。だが金の件に就いちや、餘りけち／＼しちやなんねえんだ。

マトリヨーナ もう金に就いちや何も云ふことはありませんよ。彼女が親達から譲られたものは一切有つてゐるんです。今日貴方、二百五十留と云ふ金は生やさしい金ぢやありませんからねえ。

舅 なあに俺や何も云やせんがね、どうも我子に就いちや萬事善かれと願ふのが、これ人情でがすからねえ。

マトリヨーナ できれえ貴方、正直な處、もし妾が何しなかつたら、貴方は生涯この位の代物は手に入れられなかつたでせう。現にコルミリンの家族などは、あの娘をヤイ／＼つて云つたんですけれど、妾一人で喰ひとめたんですよ。それから金の一件ですがね、實は斯うなんですよ。故の親父が死ぬ時に、ニキタを入婿にするがいつて遺言したんですと。こりや妾は悴から直接に聞いたんですがね、あれ丈の金は、アクリリナの分に定まつてゐたんですよ。大抵の入婿なら随分強慾なこともするもんですがね、ニキタの奴はすつかり揃へて渡したんです。とに角あれ丈の金を然うするのは、容易の事ぢやありませんよ。

舅 だつて彼女の分の金はまだある筈だつて、世間ぢや云つてゐるがのう。あれでお前の息子どもも、中々抜目のない方だからね。

マトリヨーナ まあ途方もないこと。誰にも他の物は大きく見えるんですよ。遣る丈の金は皆やつてあるんです。まあそんな錢勘定は止して、疾くキチンと極めてお仕舞ひなさいよ。好い娘ですぜあの娘は、丸くくクリ／＼して居てね。

舅 いや萬事結構だが、どうも今も家内と、どうも變だつて云つたんだがね、一體常人はどうして顔を一寸も見せないんだらう。畢竟、どこか悪いんぢやあるまいかつて話だがね。

マトリヨーナ 滅相なこと、あの娘が病氣だなんて貴方。村中一の達者ものですよ。丸で鑄固めたやうな造で、挫めたつて捻つたつてスンとも云ひませんよ。貴方だつて、遂近頃御覽になつたでせう。あんな働き手は二人と無いことは、妾がお請合しますよ。尤も少々耳は遠いやうですがね、眞赤な林檎にだつて、蟲の一疋位は已むを得ませんから。今日顔を出さないのは、幾らか憚る所もあるんですよ。實は彼女に少々睨みをつけてゐる人がありましてね——尤も妾は誰がそんな悪戯をしてゐるのか知つては居ますがね。この婚約が極まるとなつたので、あの娘を魅みにかいつたんですよ。けれど妾やそれを解く呪厭を知つてゐますから、明朝は御覽なさい、屹度元氣がつかますから。まあ、さうクヨ／＼氣を揉むもんぢやありませんたら。

舅 ぢや宜うがす、事件は決まりましたよ。

マトリヨーナ さうですとも、もう退けたつて退けませんよ。これで妾の苦勞だつて一通りぢやなかつたんですぜ。餘り憎まないで下さいよねえ。

姑の聲 (支關から) イブン。もう出かけるんですから、おいなさいよ。
舅 直行くよ。(支關の方へゆく)

マトリヨーナそれに従ふ。一しまり支關が混雜して一同乗り去る。アニエートカ支關がら駈けて来てアニツシヤを手招く。

アニエートカ かあちやん。

アニツシヤ (支關から) 何?

アニエートカ かあちやん、いらつしやい、内證のお話よ。(二人で納屋の方へ行く)
アニツシヤ 何だれ、用つて。アクーリナはどこにゐるの。

アニエートカ 倉の方だよ。まあ、姉やんはあそこに何をしてゐると思つて? ア、怖い? 一生懸命に、泣きたいのを凝乎と忪へてね、あゝ苦しい、もう苦しうつてく、堪らないつて云つてたよ。あゝ慄然とするやうだ!

アニツシヤ なあに、我慢し通すよ。さうと、妾やお客さんをお送りしなげりや。

アニエートカ だつて、かあちやん。姉やんも大變わるいのよ。それに何だか怒つてるやうだわ——「お客さん達にあんなに酔はせたつて徒のことだ。妾や婚禮などする位なら死んで了ふ」つて云つてゐたよ。母ちやん、若しものことはないだらうか。妾や怖くつてく、もう……。

アニツシヤ 何も怖いことはないよ——死にやしないから。だが今は行かない方がいよ、こつちへお出で。(二人支關の方へ行く)

デイミトリツチ、門から入つて来て散らばつてゐた草を集める。

デイミトリツチ (獨り) やれく、ニコラス様。よくも彼等は那樣飲んだもんだ。熟柿ツ臭い息を吐き出しやがつて、此庭までブンくして来るわ。もう此方も充分だよ。オヤ滅法に又草を撒いて呉れやがつたな。これぢや馬だつて喰ひやしれえや、唯掘ぢくるばかりだ。まあ驚いた、樽をすつかり明けて、揚句が此惡臭だ。もう澤山だ、随分鼻へ堪へるぜ。(欠伸をして) あゝ、もう寝る時刻だが、どうも俺や内の中へ這入る氣がしれえ。

堪られえブン／＼鼻をつゝきやがるでなあ。(車の乗り出して行く音がする) 今度こそあ
お歸りだな。まあ助かつた、やれニコラス様。だが、よくもまあ彼等は、那樣お互に嘘
をついたり、茶化したりしてゐられたもんだ。何にもならねいたわごとだ。

ニキタ庭に入つて来る。

ニキタ デイミトリツチ、もう行つて爐端で寝ろよ。此處は俺が片付けてやる。

デイミトリツチ ぢや、どうが羊に草をやつて下さい。時に、お客衆は皆歸りましたかえ。
ニキタ あゝ歸つた。處がまだ濟まないことがあるんだよ。どうしていいのか俺も分ら
なくなつちまつた。

デイミトリツチ 成程困つたことだ。だが、なあに、今ぢや何をしやうと、育兒院てがあ
るぢやありませんか。あそこなら何を持ち込んだつて、取受りますよ。こちらで心づけ
丈握らせりや、何とも云ひやしませんね。おまけに、乳母にや金まで出しますからね。
なあに今日は造作もありませんよ。

ニキタ おい／＼、デイミトリツチ。何かつて場合に、餘計な事喋るなよ。

デイミトリツチ へえ、私や何ありませんがね、まあ出来る丈痕跡を残されえ様にやん
なさいよ。オヤ随分酒臭うがすな。どりや内へ這入りませう、やれ／＼。(去る)

ニキタ (暫く無言、やがて櫛に腰を下す) やれどうも窮つたことになつたわい。

アニツシヤ支關から来る。

アニツシヤ どこにゐるんだね。

ニキタ こゝだよ。

アニツシヤ 何だつてそんな處にゐるんだね。愚圖々々しちやゐられないぢやないか。あ
れを疾くどこかへ持つていかなけりや。

ニキタ だつてどうしたらいいんだ。

アニツシヤ 妾が云ふから、其通りなさいよ。

ニキタ 育兒院へでも持つていかうつてんだらう。

アニツシヤ お望みなら持つていらつしやい。お前さんも悪い方にかけてちや随分の腕き、
なんだから。さうかつて愈々となると、氣が弱いんだから、無理な荒療治はし得ないし

ニキタ ぢやどうすりや宜いんだよ。

アニツシヤ だからね、穴藏へ行つて穴を掘るんですよ。

ニキタ 不可々々。何か外の術がありさうなものだ。

アニツシヤ (せ、ら嗤つて) 外の術? 處が駄目なんだから。今少し早く考へないつて事がないんだよ。もう斯うなつちや、人の云ふ處へ行つたらいいんですよ。

ニキタ あゝ何と云ふことになつたんだ。

アニユートカ 支關から来る。

アニユートカ かあちやん、婆やが喚んでるよ。何だかれ、姊やんとこで、赤ちやんが生れたやうだよ。オガ〜泣いてたもの。

アニツシヤ 何だれ此子は! べちや〜云ふと非道い目だよ。そりや猫でも啼いてるんだよ。疾く行つて寢てお仕舞へ。聴かなけりや又斯うだよ!

アニユートカ だつて、かあちやん。ほんとだよ。

アニツシヤ (手を振り上げて) ぢやお待ち、斯うしてやるから! あつちへ行つといで!

アニユートカ (走り去る)

アニツシヤ (ニキタに) さあ疾く、妾が云つた通りに。でなけりや、もう知りませんよ。

(支關の方へゆく)

ニキタ (獨り。暫く沈黙。やがて孤輪車の上に腰を下し) あゝ窮つた事にしちまつた。こちらの災難だ。どうも非道い女どもだ。今彼女が變な事を云つたな——今少し早く考へないことがないんだつて? ぢや、いつ考へたら宜かつたんだ。手前が夙くに俺を手に入れて置きやがつて、フン、こちらは僧侶ぢやあるまいし。先の旦つくが死んだ時にも、俺や出来るだけ臭い物に蓋をしておいた。ありや俺の罪なもんか。あんな例や幾らも有らあ。だが、あの紛薬はかりや、あんな相談にや俺は乗りやしれえや。俺や其の話を聞いた時にや、あの畜生女を撲き殺してやりたかつた。正直、さう云ふ氣がした。處があつた。あの賣女は、俺をも其惡黨仲間に入れて了ひやがつた。其時からと云ふものは、彼奴はもう堪らなくなつた。阿母から話を聞いた時にや、熟々彼奴が嫌になつて、もう面でも

見たくない。到底あんな奴と一緒に暮しちやいけれえ、どんな羽目になるか分りやしれえ。そこへ又あの小娘子が嬌垂れかゝりやがつて、とうとう斯んなことになつちまつた。俺が居なかつたら外の情夫を作つたに極まつてゐる。さうしたらどんな事になつた。これも俺が悪いぢやれえ。兎に角、窮つた事にして丁つた。(思入り)度胸のいい女どもだ、えらい事を考案へやがる。だが、よさう。俺や手を出さんぞ。

マトリヨーナ、提灯と鍬とを持つて、玄關の方から息せき切つて来る。

マトリヨーナ まあ何だつてお前は、鶏が卵でも孵すやうに屈み込んでゐるんだよ。吩咐けられた通りに、自分のする事を疾くしたらいいぢやないか。

ニキタ 一體何をしやうつてんだね。

マトリヨーナ いいから、此方はこちら丈のことをするから、お前は自分のする丈の事を疾くお仕つたら。

ニキタ 又他を連累にしやうと思つて。

マトリヨーナ 何をまあ言つてゐるんだね。さう白を切つてゐられると思ふのかね。事件が

斯うなつちや、もう然うはいかんよ。

ニキタ どうしやうつてんだね一體。如何に何だつて生きてゐる物を。

マトリヨーナ 何、生きてゐる物だつて？ 飛でもない話だ、もう生きてゐると云ふ氣も無いんだよ。ぢやどうするつもりだね。よし、育兒院へ持ち込んだ所で、何れは死ぬもんだし、これが若し世間に知れでもしたら、あの娘は大瑾物になつて、一生此方の荷厄介だよ。

ニキタ だつて、そんな事が世間に知れたら尙更ぢやないか。

マトリヨーナ フン、自分の家で何をしたつて勝手ぢやないか。どんな事をしたつて氣附かれつこは無いよ。何でも云つた通りにすればいいんだよ。斯んな事は女のする事なんだけれど、男の手も少しは要るんだ。さあ、鍬を持つて下りて行つて用意をおしよ。燈火は妾が見せてやるからさ。

ニキタ 用意つて、何をするんだね。

マトリヨーナ (囁いて) 小さい穴を掘るんだよ。さうすれば妾達がそいつを抱いて来て、

そこへ手早く埋めて了ふよ、あれ又彼女が喚んでるよ。疾くにおし、妾やそれを抱いてくるから。

ニキタ もう死んでるんかね。

マトリヨーナ 大丈夫死んでるよ。疾くにしなないと曝露て了ふぜ。でなくとも此頃ぢや、鶉の目鷹の目で嗅ぎ廻つてゐる。昨日も巡査の奴が見廻つて来たよ。何を迂路々々してゐるんだね。(鉄を渡して)疾く下りておいで、その隅へ小さな穴を掘ればいいんだよ。そこなら土が柔かいから、直に本通りになつて了ふさ。流石の大地だよ、告口なんて野暮な真似はしないかち、つまり牛がペロリと甜めて了つたやうに片付くんだよ。だから早くにおしよ早くに。

ニキタ 又そんな碌でも無い事に曳ッ張り込むのかい。もう真平だよ。本當に俺やもうあつちへ行くから、爲てい事を勝手にするがいいさ。

アニツシヤ 玄關から来る。

アニツシヤ (戸口から)ねえ、彼はもう掘りましたかい。

マトリヨーナ (アニツシヤに)お前さん何の爲めにブラ／＼来るの。一件をどこへやつたんです。

アニツシヤ 泣いても聞えないやうに囊を被せておいたよ。ねえ、彼は掘つたんですかね。マトリヨーナ 嫌だつての。

アニツシヤ (髪を振りたて)嫌だつて? ぢや監獄へ行つてゐたいんだよ、屹度さうなんだよ。いいよ、妾が今直に警察へ行つて悉皆告げてやるから。すりや何もかも水の泡だろ。いいよ、直に行つてやるから。

ニキタ (目をむいて)何を抜かしてんだ!

アニツシヤ 何でも抜かしてゐますよ。一體金を取つたのは誰だね。お前ぢやないか。(ニキタ黙つてる)毒を與つたのは誰だね。それや妾だけねど、お前だつて承知の上だ——無論お前だつて承知だつたよ。だから妾とお前はつまり共謀なんだよ。

マトリヨーナ まあお待ちなさい。——これニキタ、なぜさう意地を曲げるんだよ。さあ、のツびきならない場合なんだよ。今行つちまはなけりや、駄目ぢやないか。さあ疾くお

往てつたら。

アニツシヤ まあ御覽なさいよ、嫌だなんて、自分ばかり善い人にならうつてんだよ。お前も散々他を虐めておいて、今になつて腰を折るのかい。これまでお前にや随分難義をかけたから、今度はお前の番だよ。さあ、どうしても嫌となりや、妾も思ひ通りにする覺悟だから。ねえ、鋏を把つてさつさとお爲よ。

ニキタ 何だつて人にさう食つてかゝるんだ。(鋏を把る、併し動かず) 嫌だから、行かれえつてんだよ。

アニツシヤ 何だつて? 行くのが嫌だつて。(大聲で騒ぎ出す) さあ、誰でもよくお聞きよ! マトリヨ一ナ (アニツシヤの口を抑へて) やあ何の事です。氣でも違つたんですか。彼だつて行きますよ。さあ、疾くにおしよお前。

アニツシヤ 直にでも交番へ駆けつけるから。

ニキタ 野暮な真似するなえ。あゝ、困つた人間どもだ。おいどうだい、まあ其奴あ活きてるんだらう。チエ、どうだつて同じことだ。(穴藏の方へ出かける)

マトリヨ一ナ さうだよ、さう樂な仕事でもないんだよ。お前もこれ迄随分嬉しい目に逢つたから、厄介な後仕末が來たんだよ。なあに一思ひにやつけて了ふのさ。

アニツシヤ (まだブンくして) これ迄にや、彼の嬖女と同腹で、随分虐められたもんだよ。それもこれも一形つくんだ。今度は妾ばかりぢやない、彼だつて人殺しの味を覺えるんだ。どんな氣持ちのするもんだか、自分でやつて見たら分るだろ。

マトリヨ一ナ これさ、さうブンくしなくとも宜うムいますよ。まあ貴女、ゆつくりやるんですよ。さあ、あの娘のともへ行つて下さい。

ニキタ (穴藏へ下つてゆく)

マトリヨ一ナ もう彼も始めますよ。(提灯を持つてニキタに跟着いてゆく)

アニツシヤ 彼奴も今度は自分の醜行の塊を締める羽目になつた。(興奮して) 妾だつてピートルを片付けて仕舞ふ迄にはどの位一人で切ない目に逢つたかも知れやしない。今度は彼奴も同じ味を嘗めて見るんだ。いゝ氣味だ、何で可哀さうなもんか。

ニキタ (穴藏から) よく燈火を見せとくれ。

ない、自業自得だしねえ。

アニツシヤ (——の口に立つてゐる)

マトリヨーナ (階子段に腰をかけて、見込んで、物思ひ) まあ彼も驚いたらうさ。だが、

—— どうしやうに、外に仕様がななんだもの。どこへもやりやうがない。世

間にや—— と云つて、神頼みまでする者もある。さういふ處へは——

を覗いて—— (アニツシヤに) ねえ、まだですかい。

アニツシヤ (覗き込んで)

マトリヨーナ 彼もこんな——事はどんなに嫌だらうが、だつて外に仕様もなし。

ニキタ (全身を——乍ら出て来て)——。もう俺には駄目だ。——

アニツシヤ——や何處へ行く氣なんだね。(ニツキを留めようとする)

ニキタ (アニツシヤに飛びかゝつて) あつちへ行け！ 行かないや——。(女の手

を掴む)

アニツシヤ振り離す。ニキタ——あとを追ふ。マトリヨーナ、飛びかゝつてニキ
タを引きとめる。アニツシヤ階子段を駆け上る。マトリヨーナはニキタから——を振ぎと
らうとする。

ニツキ (母に) あつちへおいで！ お前だつて——。

マトリヨーナ (アニツシヤの後から梯子段を駆け上る)

ニキタ (立ち留まつて) どういつも撲ちのめすぞ——一人残らず。

マトリヨーナ 吃驚してあんな真似をするんだよ。直に復りますさ。

ニキタ 何をしやがるんだ。他に何をさせやがるんだ。どうだ彼奴の——ことは。——

——。ぬる。(黙つて耳をすまます) おや——ぬる、さうだ、——

——やがる。(穴藏へかけつける)

マトリヨーナ (アニツシヤに) 又行きましたよ。今度は屹度——つまりですよ。ニツキ、

提灯をやらうか。

ニサタ (答へず、——に耳をすまして)もう何も聞えぬ。聞として来た。(少し行つて立留り)あ、

——。(更に耳をすまし)あ、

——。どうしたんだらう! おつかあ、おつかあ。(——投げて母に近づく)

マトリヨナ どうしたんだいお前。

ニキタ おつかあ、おつかあ、もう俺にや駄目だ。逆も駄目だ。おつかあ、俺の事も思つておくれ!

マトリヨナ これ、お前はまあ吃驚したんだ。行つてプランデーを少しおあがり。――

ニキタ おつかあ、く、俺はもう逆も駄目だ。えらい事をさせるんだもの。ああ、――

を他にさせるんだね。(ヨロ／＼と桶の上に倒れかゝる) …… おつかあ、――、何を

マトリヨナ だからお前、疾く一口飲つておいてつてのに。どんなに苦しい時でも、あれなら洒然するよ。なあに一日二日すりや忘れて了ふことだし、一寸の辛棒だよ。あの娘を嫁けてさへ了へば、皆無くなつて了ふことだ。藏の方は妾が自分で仕末をするから、疾く行つて一盃お飲りつてのに。

ニキタ (つツ立つて)プランデーがまだ残つてゐたかね。ちや、あいつを飲んだら忘れぬ。(芝罫へ行く)

暫く芝罫に立つてゐた。アニツシヤは、ニキタを黙つてやり過す。

マトリヨナ (ニキタを呼びかけて)そつちへおいで。こちらは妾が自分でやるから。自分で這入つて行つていけて来るよ。だがまあ鐵をどこへ投げらまつたんだらう。(鐵を見つ、中程まで下りて行つて)アニツシヤ、疾く来て燈火を見せて下さいよ。

アニツシヤ 彼はどうしたんですかえ。

マトリヨナ 全て氣が遠くなつちまつたんですよ。此方の押し付けやうも少し無理だつた。まあ少し休まして置けば直に復りますよ。彼は彼、こちらは妾が自分で思ひ切つて

やりますよ。暗いから、燈火を指し出して下さい。(穴藏へ這入る)

サニツシヤ (ニキタの入った戸口を見やつて) そら見たか、勝手を淫行をして應報だよ。いくら威強つたつて、いゝ氣味だ、自業自得なもの。もう大抵で夢も覺める筈だ。

ニキタ慌て、玄關から穴藏の方へ駈けて来る。

ニキタ おつかあ！どうか。おつかあ！

マトリヨーナ (穴藏から頭を出して) 何だね、お前。

ニキタ (耳をすまして) 可けねい——まだ——ゐる。あれが聞こえれえかれ。

ゐる。お聞きよ——お聞きつてば——あれ、あんなに

ハツキリと……

マトリヨーナ 何だね、泣く譯が無いぢやないか。お前——の様に——ぢやないか。——

ニツキ 何を云つてるんだね。(兩耳を押へて)

俺や一生取ッ返しのつかれえ事をしちまつた。もう俺や助かりやうがねえ。何故斯んな

事をさせたんだ。俺やどこへ行つたらいいんだよ！ (梯子段の上に倒れかゝる)(幕)

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

**
改修

〔第四幕一五七頁七行以下を左の如く變改し得。〕

改修第四幕登場人物

デイミトリツチ 兵士上りの老僕

アニユートカ ピートルの後妻の娘

アニツシヤ ピートルの後妻

マトリヨーナ アキムの妻

ニキタ ピートルの家の下男

ダークチエーンヂ。

序幕と同じピートルの室。

夜。卓子の上にランプが輝いてゐる。

アニユートカ、寢衣で長椅子の上に寝てカフタンを被つてゐる。

デイミトリツチ (アニユートのそばに坐つて烟草を吸つてゐる) あい、部屋中がまだ酒臭くて仕様がねえ。皆で茲で飲みくさつて、惜ら酒を零し散したんだ。チエ、此烟草の香も厭に鼻へ衝ツかけて來やがる。やれ、寝るに上越す樂は無しだ。(ランプの處へ行つて、それを消さうとする)

アニユートカ (起上つて) 阿爺や、阿爺や、どうか消さないでおいとくれ。

デイミトリツチ なぜでがすかい。

アニユートカ 庭の方はまだ賑やかだよ。(耳をすまし) まあお聞きよ、皆まだ倉の方へ行くやうだよ。

デイミトリツチ 行つたつて何でがすとえ、お前さんにや用のねえことだ。疾く寝てお睡みなさいよ。燈火を消しますぜ。(心をねぢり初める)

アニユートカ 阿爺や、阿爺や、ランプは消さないで頂戴よ。小さくしてもいいから、點けておいてくれよ。何だか萎怖くつて……

デイミトリツチ (笑つて) はい、ようがすく。(少女のそばへ寄つて) 何だつてお前さんさう怖えんでがすかい。

アニユートカ 怖くなくつてどうするね。まあ姉やんの苦しみやうつたら無いよ。頭を箱のどこへ押付けてさ。(叫くやうに) 姉やんはもう……赤ちやんを産んだんだよ。

デイミトリツチ まあ消魂ちまふ、この幼稚で何でも知つてる。——さあ、お睡みなさいよ。(アニユートカ寝る) さう、これでいい。(夜着をにかけてやる) さうだ。餘り色々な事を知りたがると、早くお婆さんになりますぜ。

アニユートカ 阿爺やは爐の上で寝るんでしよう。

デイミトリツチ さうですとも、外にどこへ寝ませうに。——本當に何でも知つてる。(今一度掛けてやつて) さう、凝乎と寝てお睡入なさいよ。(爐はたへ行かうとする)

アニユートカ アレ、前にや聞えたんだけど、どうしてもう聞えないんだらう。

デイミトリツチ あい、やれくニコラス様。——何でがすえ聞えれえつては。

アニユートカ 赤ちやんの泣き聲さ。

デイミトリツチ 赤ちやんなんか何處にぬますえ、そんな物聞える筈がねえ。

アニユートカ だつて聞えたもの、眞個に聞えたもの。そりや優しい聲よ。

デイミトリツチ お前さんは何から何まで聞いてゐる。ぢや斯う云ふ話を聞きましたかい

——黒い爺さんがな、お前さんのやうな子供を囊の中へ押し込んで、ひどく小突き廻すつて話を。

アニユートカ 黒い爺さんて、どんな？

デイミトリツチ さあ、其黒い爺さんと云ふのはな。(爐の上にずり上つて) あゝ暖かい、

何て好い氣持だ。あゝ好い氣持だ。やれく、南無ニコラス様。

アニユートカ 阿爺や。阿爺やはもう直に寝入つちまふの？

デイミトリツチ なぜそんな事云ふんでがすえ。ぢや歌でも唄つて上げますか。(沈黙つづく)

アニユートカ 阿爺や。ねえ阿爺やつたら。赤ちやんはね——いけられるんだよ。屹度あそこへいけられるんだよ。ねえ阿爺やつたら。お聞きよ。屹度さうなんだよ。

デイミトリツチ 何でさう途方も無い事を考へなされるんだ。今頃何人がいけるんでがすえ、此眞暗な氣味の悪い夜中に。牛の奴が體をこする音ですよ。いける音なんかしやうがねえ。さあ、疾くおやすみなさいつてば——もう燈火を消して了ひますよ。

アニユートカ あゝ阿爺や、消さんでおくれよ。靜にしてゐるから、屹度もう何も云はないから。——たつて妾怖くつてし。

デイミトリツチ 何が一體怖いんでがすえ。何も怖がありませんよ。もう色々な事考へなさんな、怖くなるから。馬鹿な嬢つちやんだ。

蟋蟀の鳴く音が聞こえる。

アニユートカ (少時して、小聲で) 阿爺や。阿爺やつたら。もう寢入つたの。

デイミトリツチ チエ、又何を言ひ出すんですかえ。

アニユートカ 其黒い爺さんては一體何なの。

デイミトリツチ チエ、そりや黒い爺さんなんですすよ。お前さんのやうな子供がどうしても寢入らないと、其爺さんが囊を持つてやつて来て、ワツと攫んで囊の中へ押し込んで

了ふ。さうして頭を衝ツ込んで、子供の襟を引き上げて、力一杯に撲くんでがす。

アニユートカ 何で撲くの。

デイミトリツチ 答を持つてゐますさ。

アニユートカ だつて囊の中ぢや見えないもの。

デイミトリツチ 處が其爺はよく見えるんでがすよ。

アニユートカ ぢや妾なら咬ッ付いてやるわ。

デイミトリツチ どうしてし、其爺さんへは咬ッ付けねえんですよ。

アニユートカ 阿爺や。アレ何人が来たやうだよ。だれだらう。あゝ、かあちゃん——か

あちやんかれ。誰だろ。

デイミトリツチ 誰が来たつて宜うがすよ。お前さんにや用がねえ。さうだ、かあちやまらしいな。

母アニツシヤ、中の戸口より入り来る。

アニツシヤ アニユートカや。(アニユートカ、狸寢入りをしてゐる) デイミトリツチ。

デイミトリツチ 何てがすえ。

アニツシヤ 何だつて燈火を點けッ放しておくんだね。妾達は冷室で寝るんだよ。

デイミトリツチ 何さ、たつた今寝る仕度をしたばかりです。直に消しやすて。

アニツシヤ (何か箱の中を探して、つぶやく) 要るからつて探した時に、有つた例がない。

デイミトリツチ 何だれ探しなざるのは。

アニツシヤ 十字架さ。せめて洗禮だけはやらなげりやね。それでなくて死んだもんなら助からないよ。第一罪だからね。

デイミトリツチ さうですとも。する丈のことは爲てやるに限るだ。——どうです、ありましたかい。

アニツシヤ 然。有つたよ。(中の戸口を出てゆく)

デイミトリツチ (アニツシヤのうしろから) 當り前なら、俺や自分ののを貸してやるんだが、まあいゝさ。あゝ、やれ、南無ニコラス様。

アニユートカ (飛上つて顛へ乍や) 阿爺や！ 後生だから睡らないでおくれよ。何だか妾怖くつて。

ジイミトリツチ 何だつてさう怖えんだね。

アニユートカ あの赤ちやんは屹度死ぬんだよ。だつて、アリナ小母さんところでも、産婆が洗禮したら、其赤ちやんが死んぢまつたよ。

デイミトリツチ 死んだら埋けてやるのさ。

アニユートカ さう死ぬやうな事はないだらけれど、唯マトリヨーナの婆やがゐるかられ。妾やあの婆やの話してるのを聞いたよ。眞個に聞いたんだよ。

デイミトリツチ 何を聞いたんですえ。さあもうお睡入んなさいつたら。夜着を耳の上まで被つて疾く睡るもんですよ。

アニユートカ もし赤ちやんが死なないんなら、妾待つて居たいんだけれど。

デイミトリツチ (つぶやいて) やれ。

アニユートカ 一體皆で赤ちやんを何處へやらうつてんだらう。

テイミトリツチ やつて可いとこへやるんですよ。何もお前さんが氣を揉まなくも宜うが
すよ。さあ、お睡入んなさいつたら。今に母ちゃんが來たら大變ですぜ。

アニユートカ (間) 阿爺や。阿爺やの話のあの女子つてばね、そりやとう／＼殺されちま
つたの？

テイミトリツチ 何、あの女子ですかい。いえさ、そりやいゝ具合になりましたよ。

アニユートカ 何、何だつて阿爺や。ぢやどうして見つかつたの。

テイミトリツチ へえ、皆で見つけたんでがすよ。

アニユートカ だつて何處でよ。え？

テイミトリツチ ある處の家で見つけたんですよ。或る時一つの村へ乗り込むと、兵士ど
もは直に家捜しを始めた。すると小さい女の兒が、腹匍ひになつてゐるのを見付けて、皆
は殺して了ふつて騒いだのを、何だか私が可哀さうだつたから、抱き上げて見た。處が
手足を踏んばつて、其重い事つたら、五プードもありさうだつた。何でも手當り次第に
引ッ掻き廻して離しさうにしない。頭を撫でゝやると、丸で猫のやうに、ごわ／＼してゐ

る。段々撫でゝゐるうちに、まあ溫柔しくなつたから、ビスケットを濡らして與ると、
解つたものと見えて嚙リツ付いた。外に何ともしやうなかつたから、側に置いて皆で食
物をやつたりしてゐるうちに、段々馴れついたので、從軍中もいつ迄もそばに置いてや
つた。ソリや可愛い好い娘でがしたよ。

アニユートカ ぞ其兒はつい洗禮を受けなかつたの。

テイミトリツチ そんな事知りませんよ。碌な洗禮は受けてる筈がねえつて話はありません
したがね。だつてその兒は國が違ふんだから。

アニユートカ ぢや獨逸人？

テイミトリツチ どうして獨逸人。さうぢやねえ、亞細亞人だ。どうも猶太人に似てゐた
が、眞個の猶太人ぢやなかつた。亞細亞人——と云つて、其本當の名は忘れちまつたが、
兎に角サシユカと名を附けてやつた。そりや眞個に好い娘だつた。私やあの時分の事あ
何も今覚えちや居れえが、あの娘だけは今でも目にちらついてゐる。兵隊時分の事で今
も覚えてゐるのはあの娘の事だけだ。あの頃の暗語を思ひ出すと、直あの娘の事が浮か

んで来る、よくあの娘は私の頸ツ玉へ縋り付いたり、私に抱かれて歩いたもんだ。恐らくあんな好いた娘は見ねえが、とうとう手離して了つた。隊のある婦人が養子に引取つたんだが、イヤ其當座の淋しかったこと云つたら……

アニエートカ ねえ阿爺や、妾や父やんが死んだ時のことをよく覚えてるんだよ。阿爺やのまだ来ない時分だつたがね、父やんはニキタを枕下へ喚んでね、ニキタどうか勘辨してくれつて云つてね、泣いてゐたよ。(溜息をついて) あれを思ふと切なくなつてもう……

デイミトリツチ さうだがすとも、無理のねえ事だ。

アニエートカ アレ！ 爺やまあお聞きよ。穴藏の方で又ザラ／＼してゐるよ。まあ妾どうしやう！ 爺や、皆で大變な事をするんだよ。屹度赤ちやんを締め殺すんだよ。まあ、あんなに生れたばかりの物をねえ！ オー怖い！ (夜着をかぶつて泣く)

デイミトリツチ (耳をすまし、獨り言) 屹度皆で、醜惡い罪なことをやらかしてゐるんだ。罰あたりども奴！ 何でも不吉な災難は、いつでも斯う云ふ女どもが本だ。男性だつて

讀めたもんぢやねえが、女どもと來たら——丸で野獸だ。何だつて怖がりやしねえ。

アニエートカ (起き上つて) 爺や、まあお聞きつたら、爺や！

デイミトリツチ 何ですとえ又。

アニエートカ 頃日我家へ泊つた餘所の人が云つたよ、子供が死ぬと其靈魂は直に天へ飛んで行くんだつて。眞個かれ。

デイミトリツチ 誰がそんな事知つて。まあそんな事もあるかも知んねえが。何だつて馬鹿な事を訊くんですえ。

アニエートカ だつて、もし妾が死んだら……(すゝりなく)

デイミトリツチ 然、お前さんだつていつかは死ぬさ、死ぬには違ひねえ。

アニエートカ だつて十歳までは誰もまだ子供で、靈魂は神様へ飛んでいくけれど、それから上は墮落するんだつてね。

デイミトリツチ ぢやお前さんはどうして墮落するんだね。どうして女は墮落しねえでゐられるんだね。一體女の見たり聞いたりする物あ何ですか、唯鼻持ちのならねえ事だ

けた。俺等だつて碌に物を知られえが、それでも田舎の女よりや知つてますよ。もと／＼田舎の女なんて者あ何だもんで——只不潔な塊だ。さういふ女は此ロシアの國にや何百萬とある。それが皆土龍のやうに目先の見えれえ愚物どもだ。牛疫を犁の魔呪で療すとか、鶏の棲木の下で子供の病氣を拂ふとか、さういふ碌でなしの術だけはお手のものだ。アニュートカ　ぢや、うちの母ちやんも然なの？

デイミトリツチ　えい、矢つ張りさうですよ。世の中にもや婦人や娘は萬も億もあるが、どれも／＼奥山の獸同様だ。これと云つて見た物聞いた物も無し、唯生れて、大きくなつて、死んでいく、丸で獸と異りはれえ。同じ百姓でも男の方はまだ酒屋へも這入つて見る。ひよつとしたらお城の中へも行つて見ることも見る、又私のやうに兵隊にでも行きや、何のかんのつて見たり聞いたりする。處が女はどうだ。てんで神様のことも碌に識りやしれえ。無論、金曜日たあどう云ふ日だかも、満足に知つたもんでれえ。金曜日たあ金曜日に相違れえが、それから先を訊かれたら二の句のづける女は無え。全で盲な犬ころが糞溜の中へ首を衝ッ込むやうなもんだ。唯ゴーゴー、ゴーゴーつて様な妾けた歌

はよく唄ふが、諸其意味はと訊いたら矢ツ張り知りやしれえんだ。

アニュートカ　だつて妾はれ、爺や、お祈禱の文句を半分まで知つてるよ。

デイミトリツチ　えい、そりや好い事を知つてますれえ。——だが、どうも女と云と者は當にならんもんだ。第一女は誰に何かを習ふんだ。唯酔つ拂ひの百姓なんか、よく蹄係を掛けちやな、かしの事を仕込むんだ。女の教育たあ唯それ丈だ。女に眞劍に責任を持つてやらうつて者あ誰だか、俺のにや分られえ。新兵にや長官とか隊長とか云ふ者が責任を持つてするが、女にやその責任の持ち人がありやしれえ。丸で番人のついて居れえ家畜のやうなもんだ、其癖唾々で圖々しい性分だ。どうも女くらのお下等なものには有りやしれえ。空樽だつてこれまでだ。

アニュートカ　ぢや、どうしたらいいの。

デイミトリツチ　どうも抛つとくより仕方ありませんよ。——まあ頭まで被つて疾くお睡ズんなさいよ。あゝやれ／＼。(蟋蟀が鳴く)

アニュートカ　(少時して、飛上り)爺や、アレ誰か、呻つてるよ。氣でも變になつたやう

な……マアどうしやう！ 眞個にだれか、呻つてゐるよ。爺やつてば——アレもうそこへ来たよ。

デイミトリツチ チエ、夜着をつつ被つておいなさいつては。

ニキタ、中の戸口をけた、ましく衝きあけて、ヨロ／＼と這入つて来る。其あとからマトリヨーナ。

ニキタ 嗟々、えらい事をさせやがる。まあ、他をどうしやうつてんだ！

マトリヨーナ まあお前ブランデーをお飲みよ。どうだね氣持は。(ブランデーを持つて来る)

ニキタ どりや、おくれ。飲んだら一寸は紛れるか。

マトリヨーナ 静に！ まだ睡入つてゐないよ。——それ、おあがり。

ニキタ 一體お前さん達あ、どうしたんだね。何だつて又斯んな事を計畫んだもんだ。

何處か外に持つて行き所があつたらうに。(飲む)

マトリヨーナ (聲を殺して) マア、そこへ掛けて、今一盃飲んだら烟草でもお喫ひよ。す

りや頭が紛れるから。

ニキタ 嗟々、お母あ、もう俺や駄目だ。那樣ヒ／＼泣かれて、

——、此方は全て人間の氣なんかしやしれえ。

マトリヨーナ まあ、何て小氣味の悪い事を云ふんだい。尤も夜夜中の斯んな仕事は誰にだつて随分、たへるがね、何有お前、一日二日しりや厭でも忘れて了ふよ。(ニキタに歩みよつて手を其肩にのせる)

ニキタ ……エ、あつちへ行つておくれ！ 二人で俺をどうしやうつつんだね。

マトリヨーナ まあ、一體お前どうしたんだよ。(其手を握む)

ニキタ あつちへ行つておくれたら——。もう——。まだだ。どいつても、ぶちのめして了ふぞ！

マトリヨーナ あい、どうしやうまあ。お前は餘り吃驚しちまつたんだよ。まあ、彼方へ行つて寝て見たらどうだね、え？

ニキタ 俺なんか何處へ行きやうがあるね、どうせ地獄へ往く人間だ。

マトリヨーナ (頭を振つて) あい、困つたく。まあ何でも自分で片付けて了はう。此子は今少し此儘で居たら、そのうちにや復るだらうから。……(中の戸口から出てゆく)
ニキタは坐つたまゝ、両手で顔を押へる。デイミトリツチとアニユートカは吃驚して石のやうになつてゐる。

ニキタ オヤ、又——始めた——眞個だ、——あれ——あれ——

あんなに力一杯で——。あい、今——！ (中の戸口へ飛んでいつて) おつかあ——
——可けんたら——ぢやねえか！

マトリヨーナ、中の戸口から歸つて来る。

マトリヨーナ (小聲で) どうしたんだね、しつかりおしよ。もう止めとくれよ。——
答がないぢやないか、——になつて。

ニキタ ブランデーをもつとおくれ！ (飲む)

マトリヨーナ さあ、もうお前、今度は眠れるだろ、もう何もないから。

ニキタ (立つて耳をすまし) ——てる——まあお聴きよ——お聴きつたら——アレ

あんなに——いつて……。あれが聞えれのかね。アレあんなにさ！

マトリヨーナ (聲を殺して) 聞えやしないよ、何も無いんぢないか！

ニキタ おつかあ！ 俺や一生を臺なしにして了つた。なぜ俺を斯んなやうにさせてくれたんだ。もう俺やどこへも行き處がねえぢやねえか！ (中の戸口を駈けて出る。母其あとを追ふ)

アニユートカ 爺や、爺や。とうく——仕舞つたんだよ！

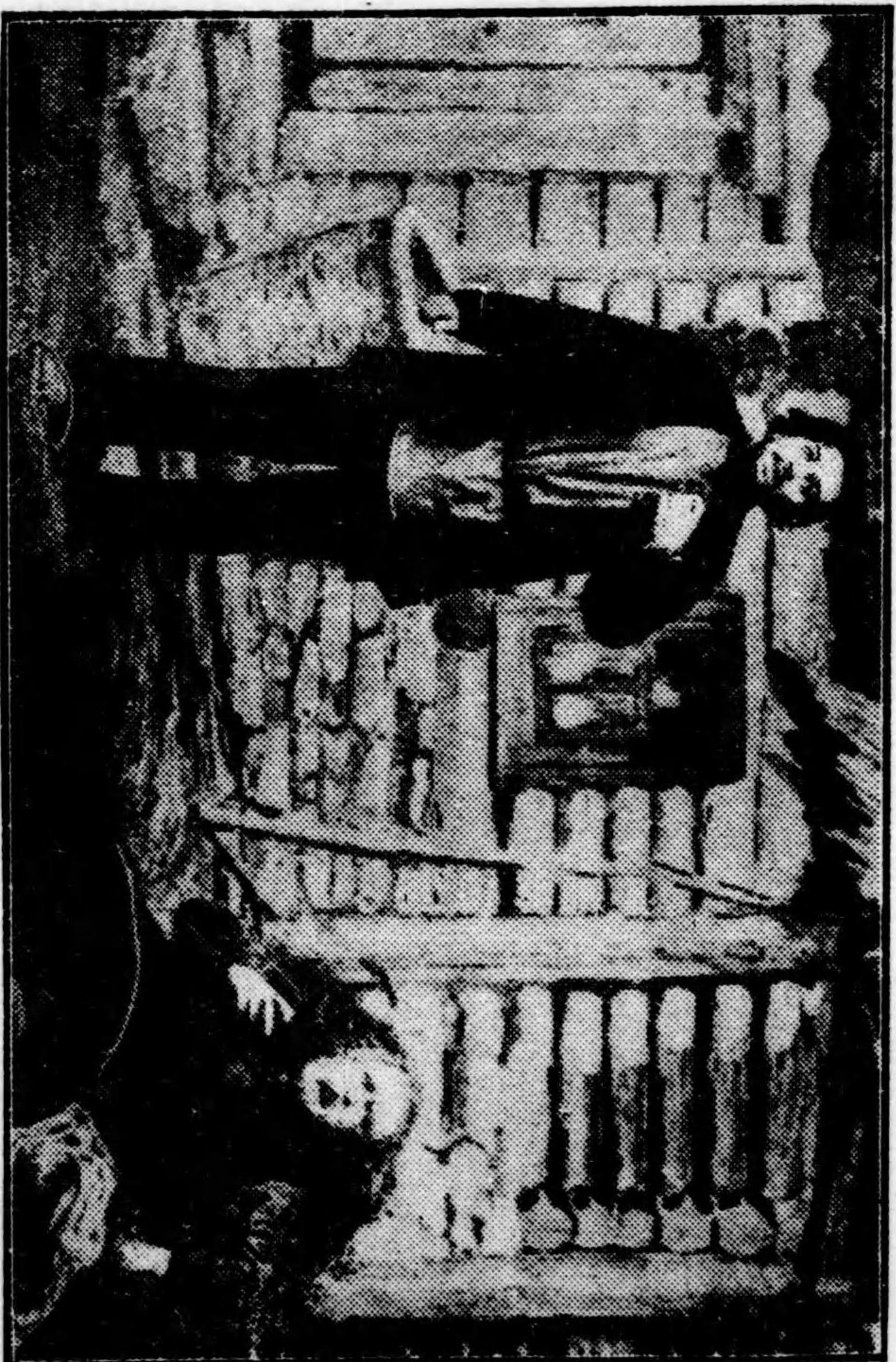
デイミトリツチ (ブリ／＼して) 寢入つてぬさいつてば！ 聴かない兒だねえ。苔がこゝにありますがよ！ 寢入つてぬさいつてば。

アニユートカ 爺や！ 何だか妾の肩を掴みにかつたよ、アレ爪の間へ掴んだよ。爺や、妾も其爐の上へ寝かせておくれよ！ ねえ、いいだろ、後生だから——アレ掴むよ——ソレ手を出したよ。アレー！ (爐の上へかけ上る)

デイミトリツチ (獨り言) 可哀さうに斯んな子供まで吃驚させやがつて——あゝ、恐しい業曝し共だ。(アニユートカに) さあ、疾くこつちへおいんさい。

アニュートカ (壇の上へ上つて) どいッへ行つちや嫌だよ。
 デイミトリツチ なあに、私は何處へいきませうに。さあ、おいなさい。あゝ、やれく
 ニコラス様、南無マリア様、可哀さうに斯んな子供まで吃驚させやがつて。(夜着を被せ
 てやつて) さうく。困つた嬢ちゃんだ。ほんにあの畜生共には吃驚させられましたね
 え。畜生ども奴今に見やがれ！ (幕)

幕 五 第



タキニ

アツチリトミイデ

第五幕

打禾場。

前面に乾草の堆積。右手に藁を積んだ納屋、其戸は開いてゐる。左手に打禾床。奥には庭、其方から歌の聲手鼓の音聞ゆ。

二人の小娘、納屋の傍を通つて家の方へゆく。

甲の娘　こら御覽よ、上手に歩いて来たこと。穿物を一寸も汚さなくつてよ、まあひどい泥道だつたこと。(二人立ち留つて足から泥を拭く)

甲の娘　(昵と積藁の方を見て何物かを認め)何だろそこにゐるのは。

乙の娘　(同じく昵と見て)あゝ、此家の作男のデイミトリツチよ。まあ大變酔つてるやうだわ。

甲の娘　だつて、いつも彼や飲まないんだのに。

乙の娘　なあに、久しく有りつかなかつたからさ。

甲の娘　御覽よ、手に繩を持つて。屹度藁を取りに来て其儘ぐツすり寝込んどまつたんだよ。

乙の娘　(耳をすまし)まだ歌の最中だよ、式がまだ済まないんだわ。れえ、貴女、アクリナは泣きやしなかつたつて話だけれど。

甲の娘　うちの母やもさう云つてたよ、アクリナは自分ぢや嫌なのを、繼親父に威嚇されたんだつて。でなけりや自分は一生嫁くつもりは無かつたんだとよ。だつて随分色な噂を立てられたものれえ。

マリシカ、此二人に追ひついて来る。

マリシカ　皆さん今日は。

二人　人　おや小母さん今日は。

マリシカ　お二人とも御婚禮へ?

甲の娘　もう済むとこ。一寸見やうと思つて。

マリシカ　れえ、後生だから我家の人を呼んで下さい、ズイエーフのセミヨンでは分るか

ら。知つてゐてせう。

甲の娘 何で知らないことが。お婿さんの御親類でせう。

マリンカ えい、お婿さんは家のの甥に當るんです。

乙の娘 ぢや貴女どうして入らつしやらないの、其御祝儀だつてのに。

マリンカ だつて氣が進まないし、それに忙しいもんですから。實は二人とも祝儀につて、來たんぢやないの。町へ麥を運ぶんですがね、もう曳き出さなけりやならないんです。此村へは飼料をするつて寄つたとこを、家ののは呼び込まれたんですよ。

甲の娘 ぢや何處へ寄つたの、フェオドリツチの處へ？

マリンカ えいさう。ねえ、妾こゝに待つてますから、どうぞ呼んで下さいな、後生だから。もう出かける時刻で、仲間の人達はもう川意したからつて言傳けて下さいよ。

甲の娘 えい、ぢや呼んで來て上げるから。(二人の娘、庭の方へ這入つてゆく)

歌の聲手鼓の音聞ゆ。

マリンカ (獨り、物思ひ) 妾も行つたつて可いんだけど、何だかきまりが悪いわ。あゝ

して別れたつきり、まだ一度も會はないんだもの。嗟、もう二年近くになる。アニツシヤとどんな暮しをしてゐるのか、一目でいゝから見てやりたい。二人の仲がどうの斯うのつて、世間ぢや云つてゐるけれど、そんなに女の方は性質の悪い人かしら。ニキタは屹度妾のことなんか思ひ出してくれないに違ひない。何でも樂に面白く暮さうつて伊達ツこきなんだから、妾のやうなものを外の女に見かへちまつたんだ。今ぢや案じてこそやれ、恨になんと思つてやしないけれど、あの時分は随分非道い目にあはされた。悔しくつてくゝならなかつたもんだ。それも今ぢやもう洒然と忘れて了つた。あゝ、一目でいゝから會つて見たいわ……(庭の方を覗き込む。ニキタがやつて來る) オヤ、オヤ彼が！ 何だつてこつちへ來るんだらう。今の娘達が告口したんだよ。でなけりや、何で客をそつちのけにして來たんだらう。イヤイヤ、妾が隠れてやらう。

ニキタ 頸垂れて、手を振り何かブツ／＼云ひ乍ら登場。

マリンカ 何で難かしさうな顔をしてゐるんだらう。

ニキタ (マリンカを見てそれと氣がついて) おゝマリンカ！ まあ……マリンカ！ ど

うして此處へ来たんだ。

マリンカ 家の人を呼びに来たの。

ニキタ お前何故婚禮に来てくれなかつたんだ。来て見て俺の事を笑つてくれりやよかつたに。

マリンカ 何だつて笑ふんです。妾や家の人を呼びに来たんですもの。

ニキタ まあ、マリンカ！（抱かうとする）

マリンカ（不機嫌に振り拂つて）何だれお前、お止しよ！ 昔の仲と違ふんですから。妾や只家の人に會ひに来たんですよ。あそこに居るんでせうね。

ニキタ ぢや既往の事を忘れるつてのや。思ひ出しちやならないつてのや。

マリンカ だつて既往の事なんか思ひ出したつて、仕方ないぢやありませんか。昔は昔のこと、今は今ですもの。

ニキタ ぢや、昔はどうしても歸つて来ないつてのや。うん！

マリンカ 来ませんとも、歸つてなんか来ませんよ。何だつてお前さん、出て来たんです。

家の主人公が御祝の客を措きつ放しにして、ブラ／＼出て来るつて法がありやしない。

ニキタ（藁の上へ坐つて）なぜ俺が出て来たつて云ふのか。嗟々、お前が其理由を知つてくれたら——よく俺の心中も推察出来やうけれど。これマリンカ、俺は心中が苦しつて切なくつて、眼も碌に明いちやゐられねえんだぞ。もう人中にや居たたまらねえ、誰を見るのも嫌々でつツと立つて出かけて来たんだ。

マリンカ（彼に進み寄つて）一體何だつてさうなの。

ニキタ 俺はな、食ふ時も——飲む時も——眠る時も、どうしても忘れることの出来ねえ物に擱まれてゐるんだ。逆も苦しくつて堪つたもんぢやねえ。俺はもう眞個に獨りぼつちになつて了つた、どんなに苦しんでも誰も構つて呉れねえ、斯う考へると其時の辛い事つたら、もうマリンカ……

マリンカ ニキタ。どうせ此の世の中は苦勞で持つてるんだよ。妾だつて地獄の苦しみてどれ程泣いたか知れやしないよ。けれど今ぢやそれも過ぎた事になつて了つた。

ニキタ さうか、お前の泣いたのは過ぎ去つた事だ。ねえマリンカ、お前は泣いて泣い

て泣き勝つたんだ。處が俺はどうだ、今が潮の満ち時だ。

マリンカ 一體そりや何の譯だれ。

ニキタ 俺やもう、自分の一生なんかどうでも可いやうになつて了つた。自分で我身を持って餘して了つた。これマリンカ、お前はなぜ俺を引きとめて呉れなかつたんだ。お前は俺を墮落させた上に、お前自身も墮落して了つたんだぞ。あい、こんな一生があるもんな。

マリンカ (納屋の前に立つて、シク／＼泣いてゐる) ニキタ、妾やもう自分の生涯にや愚痴は云はないよ。誰の一生も神様の思召しだと諦めてゐる。だから恨みは言へないんだ。妾はあの時に悉皆家の人に白状して了つたらね、家の人もすつかり救して呉れて、一寸も嫌味は云はなかつたよ。だから妾が愚痴を言つちや濟まないんだよ。家の人は豁達な性で妾にも優しくして呉れるんだから、妾も子供の世話や仕着せやら洗濯やらに夢中で、これ丈に神様から授かつたのだと思へば、愚痴を言つてる餘地もありやしないんだよ。それはさうとニキタ、お前の身の上はどうたれ、お金は山ほど有るんだし……

ニキタ 俺の身の上？ あいもう云つてくれるな。俺は唯今夜の祝儀を邪魔したくない。さもなげりや、これこの(ト繩を藁から取り出して)この繩を唐突何の梁へでも引つ懸けて——睨り結んで、頸を衝つ込んでアラリとやる覺悟だ。よく聞いてくれ、おのれ一生もそこらが終局だ。

マリンカ まあ、お止しよ縁起でもない。

ニキタ 何だ、お前は俺が諧戯を言つたり、酔つてゐると思つてるのか。酔つてないかゝるもんか。俺は此頃ぢや酔心地つて物あ知られえんだ。苦しかったり切なかつたりして、氣が腐つてゐる。もう俺の胸を動悸つかせるやうな事あ、何も無くなつて了つた。嗚呼マリンカ、お前と一緒に料理番で居た時分が、一生の華だつた。お前はもう忘れたか——每晚二人で黎明を恨んだ、忘れやしまいね。

マリンカ まあニキタ。そんな古傷を洗ひ立てちや困るよ。妾はもう人妻になつたんだし、お前さんだつてもう獨身ぢや有りやしない。妾は自分の罪は償つたんだから——そんな既往の事なんか云はないで頂戴。

ニキタ だつて俺やこの苦しい胸をどうすりやいいんだ。もう俺や何處へも往きどころが無えんだ。

マリンカ 何を云つてるの、お前さんには立派な内儀さんがあるんぢやないか。もう餘所の物へは手を出さないで自分の物だけ守つておいでよ。あれほどアニツシヤを戀ひ込んでゐたんだもの、將來だつて可愛がつておやんなさい。

ニキタ 何だあのアニツシヤ！ 丸で葦草のやうな奴だ。葛のやうに人の足へ巻きつきやがつて。

マリンカ そりやどうであらうが、お前さんの内儀さんに變りはないさ。——まあ何だろ、こんな詰らん事喋つて。さあお客さんとこへお歸んなさいよ、序に家の人も呼んで下さいね。

アニエートカ、眞赤に酔へるマリンカの亭主と庭の方から来る。

マリンカの夫 おいマリンカ——でない内儀さんか。こら、おつかあ。そこに居たかい。

ニキタ おい御亭主が来たよ、呼んでるよ。さあ疾く。

マリンカ でお前さんは？ どうしやうつての。

ニキタ 俺か。俺や少しこいで寝ていく。(藁の中へ寝る)

マリンカの夫 おい、どこに居るんだい！

アニエートカ そこにゐるよ小父さん、納屋のそばに。

マリンカの夫 何でそんなとこに立つてゐるんだ。御祝儀に來れえんか。御主人達や、お前が來てなぜ喜びを言つてくれなんだらうつて云つてるよ。お客様達や直にお立ちだ、さうすりや俺等も出かけるんだ。

マリンカ (夫の方へ進み寄つて)だつて氣が進まないんだもの。

マリンカの夫 何でもいゝから來い。あのペトルエカの奴に盃をさして祝を云つてやれ。でれえと内儀さんが又腹をたてるぞ。俺等の仕事にやまだゆつくりだわさ。(マリンカを抱いて、よろ／＼と一緒に這入つてゆく)

ニキタ (起上つて、藁の上に坐り込み)嗟々、彼女の顔を見てからは、尙苦しくつて堪らなくなつた。彼女と一緒に居たら、斯んな事にはならなかつたのに。莫迦な、一生を棒

に振つて何にもなりやしれない。何にもならん事に頭を毀傷して了つた。(轉んで)あゝ、俺やもう往きどこがねえ。嗚呼、地面に穴でも開いてくれ!

アニュートカ (ニキタを見て駈けより) 父ちゃん。アラ父ちゃんでは! 皆で探してゐるよ。もう皆お祝も濟んでお祈禱も終へたのに。眞個だよなせ居ないんだらうつて、皆怒つてゐるよ。

ニキタ (獨言) どこへ往くんない。

アニュートカ 何! 何を云つてゐるの。

ニキタ 何も云ひやしないよ。蒼蠅え奴だな。

アニュートカ 父ちゃん。おいでつてばよ。

ニキタ (黙つてゐる)

アニュートカ (手を曳つ張つて) 父ちゃん、早く往つてお祝を濟ましておあげよ。眞個だよ、皆怒つてプン／＼云つてゐるよ。

ニキタ (繩を振り上げて嚇し) あつちへ失せてゐつてば! 行かれえ? ぢや斯うして

やるぞ—

アニュートカ ぢや母ちゃんを呼んで来るわ。(走つてゆく)

ニキタ (獨り起上つて) どうしてそんな處へ行かれるものか。どうして聖像へ手をつけられるものか。何だつてアクリリナの眼を見られるものか。(又横になり) 嗟々、此地面が大口でも開いて呉れりや、俺や直にでも飛び込むがなあ。すりや、何人にも見られねえ、だれを見なくても濟むんだ。(又起上り) イヤ俺や死んでもあんな處へ行かれえ、糞でも食へだ。行くものか。(長靴を脱ぎ、繩で輪を拵へ自分の頭へあてゝ) さうだ、斯うやつちまへ!

マトリヨ一ナ息せき切つてやつて来る。ニキタは母を見て繩を頸からはづし又藁の中に寝る。

マトリヨ一ナ ニキタ、これニキタ! まあどうだろ、返事もしやしない。おいニキタ、お前どうしたんだね。そんなに酔つたのかい。さあ、ニキタ、あつちへおいでよ、さあ行つとくれよ。一同待ち遠しがつてゐるぢやないか。

ニキタ まあ、俺やどうされちまつたんだ。もう人間ぢやねえ。

マトリヨ一ナ お前一體どうしたんだね。何でもいゝからお出でよ。立派にお祈禱を済ましたら、それで旨く片付くんだから。一同それを待つてゐるんぢやないか。

ニキタ どうして此俺が祈禱など済ませるもんかね。

マトリヨ一ナ そんな事くらゐ誰だつて知つてゐるよ。ぢやお前は知らんのかね。

ニキタ 俺だつて知つてはゐるさ。けれど祝はれる者あ何人だと思ふね。俺はあの女に何をしてゐると思ふんだね。

マトリヨ一ナ 何をしてゐるつて？ 又そんな敵の生へた事を想ひ出した！ どの馬鹿がそんな事を掘じくるもんか。あの娘は自分で好きで嫁くんだもの。

ニキタ さあ、それも何の爲めだ。

マトリヨ一ナ そりやお前、恐ろしいからさ。だが、畢竟嫁くんだよ。此上奈何にも仕やうがないぢやないか。思案するなら以前にするが好かつたさ。今ぢやどんなにバタ／＼したつて取つ返しがつきやしないよ。婿だつて舅だつて二度も見合に来てさ、金まで取

つて一切用意をして丁つて、今更摺つた揉んだも云へた義理ぢやないよ。

ニキタ ぢや穴藏の中にある一物はどうだね。

マトリヨ一ナ (笑つて) 穴藏の中に？ 何もないよ、キヤベツに罎に馬鈴薯だけだよ。何でお前も又そんな陳腐い事なんか氣に病んでゐるんだね。

ニキタ 俺だつて氣に病みたくねえは山々だけれど、どうしても可けれえんだ。一寸考へたばかりでも、あの泣聲のヒー／＼が耳について来るんだ。あゝ俺やもう、どえらい目に會つちまつた。

マトリヨ一ナ だつてまあ、お前の其振舞は何だね。

ニキタ (寢がへりして) あゝ、おつかあ。もう虐めねえでおくれ、俺やもう死にさうだから。

マトリヨ一ナ だつて行つてくれなけりや困るぢやないか。さもないと一同色々な事を云つてゐるよ——主人が中座をするとは異しいだの、式を済まさない法が無いだの、まだ何を蔭口云ふか分りやしないよ。それにお前がさう戦々してゐちや、却つて皆に見抜かれ

て了ふよ。お前が睨り平氣でぬりや、誰だつてお前が悪いなんて云ひ出す者あ無いさ。そんな風ぢやお前自分で危ない獅子の口へ飛び込んでゆくやうなものぢやないか。何ても弱い風を見せちや駄目だよ、でなきやお前誰にだつて覺られちまふぜ。

ニキタ 嗟々、どこ迄も俺を引つ張り込まうつてのや。

マトリヨーナ もう呷いことは云はずに行かうよ。さあおいでよ。お前が型通りに立派に式を濟ませば、それで萬事が終まるんだよ。

ニキタ (又寝ころんで) 駄目々々、俺にも出来ねえ。

マトリヨーナ (相手に聞えないやうに) まあどうしたつてんだらう。今迄はちゃん／＼旨くいつて来て、急に此子のことと聞へちまつた。どうも何かに魅れたんだよ。これニキタ、お起きよ！ アレお見よまあ、アニツシヤもやつて来たよ。あれもお客さんを置き去りにして来たんだらう。

アニツシヤ、素晴らしく嬌艶し込んで顔はほんのり足もと危く登場。

アニツシヤ (上機嫌で) まあおおかあさん。結構々々、何から何までお見事づくめて、お客

さん達も大満足よ。それはさうと家の人は？

マトリヨーナ (ニキタのそばへゆき) まあ斯んなときにさ、御覽よまあ、斯んな藁の中へ寝込んでさ。寝たまゝ動かないんですつて。

ニキタ (アニツシヤを見て、獨り言) 見ろまあ、彼女もゲン／＼だ。あの面を見ると、もう返吐が出さうだ。どうしてあんな奴と暮せるもんか。(寝返りして腹匍ひになり) あいつも何時か撲ち殺してやらう。其方が勝した。

アニツシヤ おや／＼、こんな藁の中になんか隠れて。貴方、お酔ひなすつたんでせう、それでお倒れなすつたんでせう。(嬌々して) 妾も御一緒にいたいんですけれどね、今は駄目。さあ手を曳いて上げるから、入らつしやいね。まあ家の中で好いこと見ても氣持ちがいの。樂器のお揃ひで、お女中がたのお歌やら、それはお美事。随分皆さんもお酔ひなすつたわ、お歴々の御祝儀にだつてこれまでよ。

ニキタ 何がさう美事だつて。

アニツシヤ 御祝儀がさ。誰だつて云つてゐますよ、こんな賑やかな御祝儀は滅多に無い

つて。だつて何から何まで立派で美事なんですもの。だから入らつしやいよ。ねえ御一緒に行きませう。妾も随分へべれけになつちまつたけれど、お手ぐらぬは曳いてあげますわ。(ニキタの腕を取らうとする)

ニキタ (嫌つて振り放し) 獨りで行け。今行くわ。

アニツシヤ 何だつてさうプン／＼してゐるの。もう嫌な物は悉皆難免れしたし、邪魔者は餘所へ片付けるんだし、やつとこれから水入らずの面白い生活が出来るんぢやないの。誰にも汚名がつかず、罪にもならずにさ。もう妾や嬉しくつて／＼、何を言つていいか分らないの。何だか復二人で婚禮したやうな氣持ちよ。妾ばかりぢやない皆が欣んで下さるの。そりや一同好い人よ。あの辯護士さんも警官さんも讚め通しだわ。

ニキタ ぢやその一同と居りやいぢやないか。何で斯んなところへ出て来たんだ。

アニツシヤ だから又行くんですよ。一體御主人がふいつと立つて、客を置き去りにするなんて、異しいぢやありませんか。皆何不足のない客だのにさ。

ニキタ (立ち上つて、着物の藁を拂ひ落し) 先へ行け、今行くよ。

マトリヨーナ 何でも若いものにやかなはない。此年寄の言ふ時や首を振つてゐて、内儀が言へば直だ。

マトリヨーナとアニツシヤは行きかゝる。

マトリヨーナ (ニキタに) 眞個に来るんだよ。

ニキタ 直行くよ。先へ行くがい、後から行くから。行つて式を済ましてやるよ。(二人の女立ち留まる) 先へおいてつたら。俺だつて行くよ。

二人の女去る。ニキタ獨り残る。

ニキタ (考へ込み乍らそれを見送つて了ふと、坐つて靴を脱ぐ) フン、他が行くと思つてるのか。嫌な事だ。梁の上でお目にかゝらあ。繩を結んで飛び下りた時分にやつて来い。有難い。こゝに繩がある。(考へて) あい、外の屈托ならどうにか仕様もあるんだが、この苦勞ばかりや心中へ深く食ひ込んで居やつて、撈り出すことも出来ねえんだ。(庭の方を見やつて) 彼女が来なけりやい、が。(アニツシヤの口眞似をして) 嬉しくつて／＼、妾も御一緒にいたいんですけれどねえ——と抜かしやつた。聞いて呆れらあ。猫又阿

寤め。そんなに俺を抱きたかあ抱かれてやるわ——梁の繩から外した時来い。もうこれ丈だ。(繩を掴んで引つ張る。デイミトリツチ酔ひ乍らも起き上り、繩を離さず)

デイミトリツチ これをやつてなるものか。何奴にだつてやりやしれい。俺や藁を取りに来たんで、これから持つていくんだ。——オヤ、こりや旦那かれ。(笑つて)何だクソ。旦那も藁取りにかれ。

ニキタ 其繩が欲しい。

デイミトリツチ いえさ、そりや困るんだ。俺や言附けられたんだから、これから藁を持つていくんでさ。(足を踏みしめて、藁を爬き寄せにかゝつたがヨロ／＼して足もと危く、とう／＼倒れて了ふ) いやこれは酩酊——逆も駄目だ。

ニキタ 其繩を呉れてくれ。

デイミトリツチ 呶いな、可けれいつてことよ。あゝもし旦那。お前さんは失禮乍ら馬鹿だ、豚の仔同然だ、ハ、ハ、ハ。旦那はいゝ人だが、どうも馬鹿だ。イヤ失敬、御覽の通り手前少々酩酊して居る。だが、失禮ながら、旦那なんか駄目だ。私やお前さんを恐がつて

ゐると思つてござるか知んれえが、憚り乍らこれ見ろだ。苟も下士官様だ。輦轂もとの近衛一聯隊の士官と云やあ、お前さん達にや分られえが、これでも君の爲め國の爲めにや骨身を盡いたもんだ。處が今ぢや何だ。お前さんは俺を軍人だと思つてござるか知んれえが、そりや違ふ、決して軍人ぢやれい。今ぢや下司の下司、孤者の浮浪人だ。俺は嘗て禁酒を誓つたことがある。處が又もや飲み始めた。れえ旦那、なあにお前さんなぞあ恐れえんだから。恐いもんか！ 何人の前へ出たつて恐がるのぢやれえんだ。僕は酔つてはゐる、何を隠さう酔つてはゐる。これからだつて、二週間飲み續け位はお易い御用だ。帽子であらうが、十字架であらうが、何でも咽下三寸嚙み下してお目にかける——服務證書は一六銀行だ。なあにどんな人間だつて恐くれえもんだ。隊に居た頃は酒を飲むからつて、随分擲られもしたんだ。「まだ酒を飲む量見か」つて答や棒で擲りやがつたから、「飲むとも、幾らでも飲む」つて云つてやつたんだ。何さ、私やどんな人間だつて恐れえんだ、今だつて其通りだ。斯う云ふ性来だから仕様れえ。尤も私だつて禁酒を誓つて、一時は飲まれえ居たこともある。然るに今日ぢや又飲み始めた、これからも

どし／＼のむつもりだ。なあに何奴だつて怖えもんか。私や嘘をつくは大嫌ひな人間で、眞個の事だけしか言はねえんだ。人が怖えつて理窟あねえ。これ、この通りの人間だ、私や人間が怖くねえもんだと思ふと、氣持が洒然するんだ。どうですか分りましたかい。さあ、ずん／＼やつけませうて。

ニキタ (禮をして) さうだよ、實際だ、俺だつて全然さうだ。(繩を投げ出す)
 デイミトリツチ どうしたんですえ。

ニキタ (起上つて) オイ、お前は今、「どんな人間だつて怖くねえもんだ」つて云つたれ。デイミトリツチ さうですとも、同じ製糞器だ、怖い理窟がありやしねえ。第一、湯場へ行つて見渡して御覽なせえ。どの人間もどの人間も同じ肉と皮で出来てゐる。唯瘦せてる肥えてる丈で鑿別をつけるんだ。さう云ふ人間にビク／＼してゐるなんて、ヘン、糞でも食へだ。

マトリヨーナ庭の方から来る。

マトリヨーナ (ニキタを呼びかけて) 何してゐるんだれ、来る氣は無いのかれ。

ニキタ 嗟々、あゝ、復か！——宜し、行つてやらう！ 今行くよ。(庭の方へ行く)

ダークチエーンヂ

〔此變り舞臺は實演の際には省き得。即ちマトリヨーナは戸を開いて呼び込む、客人達がぞろ／＼出て来る、婦人達は歌ふ、樂人は奏す、以下其場で行はれる〕
 序幕のやうなピートルの廣い部屋。
 卓子の上には聖像と麵包。

アニツシヤ。マリンカ。其亭主。アクリーナ。其新郎。マトリヨーナ。警官。下士官。馭者。媒妁人。附添人。樂人。婚禮の客其他居並んで、或者は立つてゐる。新郎新婦は正面。マリンカ夫婦と警官は客の中にまじつてゐる。アニツシヤは酌をして廻る。婦人達の歌やむと——

馭者 さあもう出掛けませう。教會までは随分ありますぜ。